

TSUKUBA ACTION PROJECT REPORT

2025年度 活動報告書



T-ACT
つくばアクションプロジェクト

目　次

はしがき

アクション / プラン

新編入生お助け隊2025!! ～広大な学内にちらばる新編入生のみなさんへ～（24023A）…… 1

令和７年度 日韓青少年対話型交流事業（24028A）…… 5

Tsukuba Intern（24029A）…… 10

芸術専門学群　交流会（25001A）…… 13

みんなで空を飛ぼう！ 2025（25002A）…… 16

サッカーボールをパスしてみんなと対話しよう！ 7th ステージ（25005P）
Pass the soccer ball and interact with everyone! 7th Stage …… 19

エッセイコンテスト ――「知的好奇心の更新履歴」（25003A）…… 22

クロスジャンル JAM（25004A）…… 25

Science Cafe in English 英語でサイエンスカフェ（25004P）…… 28

「いつか」に備える今　―自分のカラダに向き合う第一歩―（25005A）…… 33

学生交流スペース「ARATA」の設置（25006A）…… 36

Sustainability Week 2025（25007A）…… 43

筑波大吃音会 ―ツクスター v3（25008A）…… 48

芸術文化の入り口としての体験型写真展示とワークショップ（25010A）…… 50

つくば自然共生プロジェクト ～ ITF Lab. ～（25011A）…… 54

T-KOSEN ～全国高専向け大学説明会 2025～（25012A）…… 57

Step into Art 〈筑波大生パイロットプログラム〉（25013A）…… 61

StartupWeekend つくば 14th（25015A）…… 67

レゴ®でからくり箱を作ろう（25017A）…… 70

るりもん　わたしの蝶が消えた理由 ～絶滅から環境保全を考える～（25019A）…… 74

筑波大学オタクフリマ（25021A）…… 77

旧宿舎からの脱出２（25022A）…… 81

観客『も』動き回る体験型演劇を学内で ―物語を歩いて辿る、新しい演劇鑑賞のかたち（25023A）…… 85

ひかりのや ～夜桜とランタンが織りなす一の矢の新たな魅力～（25028A）…… 89

ボランティア

つくばの街で外遊び＆居場所づくりをしよう！（24008V）…… 92
「矢中の杜（旧矢中邸）」の保存活用（25002V）…… 93
第４回 小児がん支援のためのレモネードスタンド（25003V）…… 94
つくばの森づくり　森林保全　参加者募集（25006V）…… 95
森のようちえん あなたとわたしサマースクール（25009V）…… 96
小中学生の居場所支援 ～遊び・学び・生活支援～ @つくば市（25011V） …… 97
令和７年度 茨城県警察大学生サポーター（25012V）…… 98
チャリティーサンタつくば支部　運営スタッフ募集（25013V）…… 99
森のようちえん あなたとわたしウィンタースクール（25015V）……101
茨城県のひきこもり支援を盛り上げよう……102

2025年度　実施状況報告……103

編集後記

※活動報告では、成長度（自分はどのくらい成長できたと感じますか？）と充実度（やりたいことができた充実感はありましたか？）を５段階で自己評価している。

※学生の学年は活動報告書提出時のものである。

はしがき

「つくばアクションプロジェクト」（T-ACT）の『2025 年度　活動報告書』が完成しましたので、ここにお届け申し上げます。

本報告書には、T-ACT で実施された企画・活動のうち、昨年度（2025 年度）に「活動報告書」が提出された企画・活動の内容が掲載されています。具体的には、T-ACT アクション・プランの企画 24 件、T-ACT ボランティアの活動 10 件です。一昨年度は、前者が 20 件、後者が 12 件でしたので、ほぼ例年通りということになります。本報告書に収められた各企画・活動には、学生の創意と工夫、そして努力が詰まっています。ぜひとも学生の想いを感じ取りながら、本報告書をお読みいただければと思います。

T-ACT の歴史は長く、2026 年度で 19 年目を迎えます。その間、数多くの T-ACT アクション／プラン／ボランティアを生み出してきましたが、常に大切にしてきたことは、次のようなことです。

第一に、「主体性と自由な発想」です。学生の「やってみたい」を実現するのが T-ACT の特徴で、その背景にあるのが学生の積極的な意欲と自由なアイデアです。大学の課外活動やサークル活動と異なり、T-ACT では活動の中身や継続期間に縛りがありません。日常のふとした関心や困り事を出発点に、学生は実にユニークな企画を立てていきます。潜在的な想いを持ちながらも行動に移せずにいる学生にとって、「一歩を踏み出す勇気」を提供してくれるのが T-ACT です。

第二に、「他者との協働」です。学生間で協働して活動を企画・運営・実行するのが T-ACT の基本ですが、協働する他者はそこにとどまらずに、学生・教員・職員・地域住民などと大きく拡がっていきます。自分一人では解決するのが難しい課題でも、多様な背景を有する人々がつながり合うことによって、その解決が可能となり、新たな価値や可能性が創造されます。こうして生まれたさまざまなネットワークこそが、T-ACT の最大の財産かもしれません。

第三に、「実践のプロセス」です。T-ACT では、企画の成功／不成功だけでなく、実践のプロセスにおいて生じる試行錯誤や困難から学生がさまざまなことを学び取ることに着目しています。取り組みの運営では、計画通りに進まないことや予想外の課題に直面することが少なからずあります。T-ACT では、そのような困難を乗り越えるために自ら考え、周囲と協働して解決策を導き出す経験そのものを、学生の成長に不可欠な事柄として捉えています。

以上のことを念頭に置き、もう一度本報告書に収められた合計 34 件の取り組みをご覧いただくと、いかに「主体性と自由な発想」「他者との協働」「実践のプロセス」を重視しながら T-ACT が推進されていることに、気づいていただけるのではないでしょうか。

2008 年度（平成 20 年度）に開始された T-ACT は、来年 2027 年度（令和 9 年度）で、20 年目の節目を迎えます。古くからあり大切なことはそのまま残し、新しくて価値のあることはどんどん取り入れていきながら、T-ACT の前進を図っていきたいと思います。引き続き、ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

2026 年 11 月

T-ACT 推進室室長

唐木　清志

新編入生お助け隊2025‼ ～広大な学内にちらばる新編入生のみなさんへ～（24023A）

T-ACT プランナー　山田　朝陽（情報科学類4年）

活動目的

筑波大学には、毎年100人以上が編入してきます。これは編入制度を設けている他の大学と比較しても非常に多い人数となっています。

しかし、新 1 年生に対しては 1 年次必修科目であるファーストイヤーセミナーがあり、図書館や施設の利用方法、経済支援、学類生同士の交流などの情報提供の場がある一方、編入生に対してそのような制度は現在存在しないため、先輩後輩同士の交流の機会が少ない、または学類によっては全くないところもあり、情報を得る機会が少ないです。

また、編入生の人数自体は多いものの、編入先の学類が多岐にわたることや、キャンパスが広大であることから、編入生が広範囲に散らばってしまい、編入生同士の学類をまたいだ交流が発生しにくくなっています。

本企画では、編入生に対する情報提供の場として、また、編入生同士の（特に学類を超えた）交流の場として、新編入生向けのセミナーを開催することを目的とします。

具体的には、前半では履修申請（統一システムの登録など）や単位認定、進路就職、manaba、twins の登録など、筑波大学で学生 生活を送るために知っておくべき情報や、去年の編入した先輩方による相談会を実施、後半では学類混合でのレクリエーションなどの交流会を実施します。

今回の運営に携わるメンバーは、2024年度の編入新歓で歓迎されたメンバーです。2024年度に T-ACT アクション企画を通して編入新歓が実施され、悩みの解消やスムーズな大学生活のスタートにつながったと実感しています。さらに横のつながりや縦のつながりが活性化されることで、大学での人間関係が希薄なものではなくなり、精神的に良好な学生生活を送る補助となりました。このことから、2025年度、及び今後も実施するべきであると考え、企画立ち上げに至りました。

具体的な活動計画

まず、編入生特有の大変さや、困りごと、その解決法などを現役編入生からアンケート調査を実施し、歓迎会で共有すべき内容を検討する。

例：履修申請、単位認定、研究室配属、就職、人間関係など

【スケジュール】

2 月中旬：アンケート調査の枠組み立案、メンバー募集
2 月中旬～下旬：アンケート調査の実施と回収、パンフレット作成
3 月：イベント計画、広報
4 月：広報、新編入生向けの事前申し込みフォームの送信、4/10（木）歓迎会イベントを実施
5 月以降～　振り返りと来年度のための人員確保や引き継ぎ、定期的な交流会や相談会の実施

【アンケート調査の詳細】

アンケート調査は入学前の新編入生に対して Google Forms を用いて雪だるま式サンプリングで実施し、結果を収集する。結果は編入生 用のパンフレットに記載したり、歓迎会イベントの当日の内容を決定するために用いる。

アンケートに書く質問の例は以下の通りである。

・編入先学類
・歓迎会イベントで知りたいこと
・筑波大学の志望理由

【新歓パンフレット作成の詳細】

新編入生への、筑波大学に関する情報提供を目的として、編入新歓パンフレットである「ファーストペンギンセミナー」を作成する。記載する内容は、manaba や twins などの各種システムの使い方、奨学金などの申請方法、筑波大学の各種相談窓口の情報などである。

パンフレットは作成後、各学類の支援室の確認・修正作業を経て、編入生オリエンテーションで新編入生に配布される予定である。

【歓迎会イベントのタイムスケジュール】

18:00～18:30　運営による会場準備、新編入生入場
18:30～19:30　開会式、去年の編入生による情報提供、相談会
19:30～20:20　新編入生が参加するレクリエーション実施
20:20～20:30　閉会式、写真撮影、新編入生退場
20:30～21:00　運営による片付け

活動場所
学内の空き教室



活動期間
2025/02/01～2025/07/31

対象
学生

T-ACTオーガナイザー／パートナー
O：籠谷春紀（情報メディア創成学類３年）、山田怜央（情報科学類３年）、小倉瑞生（看護学類３年）
P：杉江征（人間系）

備考
本企画は、承認番号23022A、2024年度の編入生歓迎会企画「新編入生お助け隊2024!!～広大な学内にちらばる新編入生のみなさんへ～」の継続企画となります。
本企画の主旨は新編入生への情報提供の場とすることです。
しかし、新四年生になる学生の方も現在進行形で進路や就職、研究室配属について悩んでいることや困っていること、その他についての悩みがある方もいらっしゃるかと思います。そのような悩みの共有や解決の場とすること、また筑波大学での学生生活の１年間を振り返り、大変だったことを労う場、入学して楽しかったことや良かったことなどを共有する場となることも目的としています。
つまり、新編入生同士、先輩後輩同士、在学生同士の情報共有の場としたいと思います。
また、学類によっては入学者が数名の学類もあるため、１人もとりこぼさないためにも多くの方にご協力いただきたく思います。
編入生ではない方でも情報提供していただける方、交流会にお手伝いいただける方を募っておりますので、ご協力していただきたいです。

編入試験を実施している学類は、
社会学類
生物学類
生物資源学類
地球学類
数学類
物理学類
化学類
応用理工学類
工学システム学類
社会工学類
情報科学類
情報メディア創成学類
知識情報・図書館学類
医学類
看護学類
医療科学類



になります。
こちらの企画をお友達に紹介していただくだけでも、直接、プランナー（岡本）に連絡いただける形でも構いません。学生の在籍数は多いですが、少人数が各学類に散らばって在籍しているために全数把握が難しい状況です。心細い気持ちで入学される新入生のためにも多くの方のご協力を募っております。
また、学類が豊富な方がきっと楽しい企画になると思います！ご連絡をお待ちしております、是非よろしくお願いいたします！

活動報告

実際の活動内容
本活動は2024年７月から2025年６月までの長期にわたって行われました。

2024年
６月
・前編入新歓プランナーより引き継ぎ
７月
・編入新歓メンバー募集
・編入新歓用ブログアカウントを用いた、合格者向けの記事執筆
・合格後のスケジュール
・単位変換の方法

2025年
１月
・編入生用のパンフレット「ファーストペンギンセミナー」の作成
２～３月
・４月の編入新歓に向けた準備
・当日のタイムテーブル作成
・レクリエーション考案
・Twitter での告知
・編入新歓告知用のビラ作成
４月
・編入新歓の実施
５月
・編入生交流会（BBQ の実施）

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒90％

実施中の困難と解決策
実施中に困ったこと
編入新歓を手伝ってくれるメンバー集め
　特に、編入新歓では最初に学類ごとに集まって相談会を開くことになっていたため、各学類最低１人は人員を確保したかった。しかし、学類によっては編入生を１、２人程度しか受け付けていない（場合によっては０人）ことがあるため、最初、なかなか人が集まらなかった。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか
　去年の編入新歓がきっかけで出来た自分の友人伝手にメンバーをかき集めた。最終的に自分の想定をはるかに超える現役編入生が手伝ってくれたが、それでも埋まらなかった学類があるのが惜しい。

活動の体験について
自分にとってどんな体験であったか
　この活動は自分にとって、今後も続いていくであろう「編入新歓」の歴史の一部になる体験でした。私は「編入新歓を絶やしたくない」という思いで本活動を引き継ぎました。というのも、編入新歓の歴史は３年とまだ浅く、引き継ぎに関してもその年の編入生の中から来年も同じような活動をしたいという意思を持つ人が自ら行動して活動を引き継ぐという方法で続いてきていました。
　この方針の問題点は、次年度に確実に引き継げる保証がないという点です。中学校などの生徒会も似たような方針ではありますが、筑波大学に関しては、編入生が学生全体に対し数％しか存在しておらず、さらに学類もバラバラな上、同学年同士の結束を強めるイベント（やどかり祭や雙峰祭 など）は３年生はメインターゲットではありません。また、筑波大学の敷地そのものが広いことも相まって、編入生全体で見ると人間関係が疎になりがちです。こんな状況では、学類を問



わない編入生同士の交流の機会である編入新歓の運営メンバーはほぼ集まりません。
　そのため、編入新歓が引き継がれやすくなるためには、編入新歓で新編入生の結束を高め、来年度も活動しやすいような人間関係作りを手伝うことが重要だと考えました。かくいう自分も、前年度の編入新歓によって出来た友人のおかげで、楽しい大学生活を送ることが出来ています。今回の編入新歓の運営メンバーも、この繋がりがあったからこそ集めることが出来たため、本年度は新編入生の交流に主軸を置いて活動を行いました。具体的には、編入新歓での交流レクリエーションの時間を増やす、編入新歓後も定期的に交流会を企画する（結局１回しか開催できず申し訳ないが…）、編入生の加入を歓迎しているサークルの紹介時間を設けるなどです。
　その結果、新編入生同士の仲は比較的良好であるようです。５月頃に行った交流会 BBQ の後、新編入生同士で２次会カラオケの話をしているのを聞いた時、この活動を行って良かったという気持ちが溢れてきました。さらに、次年度の編入新歓を引き継ぎたいという人も現れたため、「編入新歓を絶やしたくない」という思いに関して、自分ができることは全てできたと確信しています。
　心残りがあるとすれば、恒久的に続いていくための仕組みづくりをした方が良かったのではないかという点です。例えば、やどかり祭や雙峰祭などは、やどかり祭実行委員や学園祭実行委員会などといった、１つの大きなグループが主軸となって運営されていますが、編入新歓にそのような仕組みはありません。編入生の規模の小ささに対して大袈裟かもしれませんが、編入新歓というイベントは受け継いでいくべきものだと感じているので、こういった仕組みを作ってもいいかもしれないと感じました。

参加者への影響
　まず編入試験合格者に向けたブログ記事は結構好評でした。一般入学と違い、編入生は母数が少ないため、こういった記事を意識的に出していかないと編入生は情報面で不利になってしまいますが、そこを解消できたのは大きかったです。
　また、編入新歓も非常に多くの編入生に参加いただきました。中には学類３年の編入生ではなく、大学院１年への編入生も混ざっており、多種多様な人に参加いただきました。レクリエーションによる交流会も盛り上がっており、学類を超えたつながりが生まれたのではないでしょうか。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ
　T-ACT の企画は自分がやりたいと思ったことを「０から立ち上げる」企画が多いですが、本企画みたいに「次世代に繋げる」のも立派な企画です。
　どんなに素晴らしい活動やサービスも、永遠には続きません。しかし、自分が動けば延命はできます（そして前任者はめちゃくちゃ喜びます）。気になる活動があれば、一歩踏み出してみましょう。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください
　活動においてそこそこ強い権限を持つことができる。
　・編入生用パンフレットを学類オリエンテーション資料に混ぜる
　・現役編入生に一斉メールを送る
といったことは、T-ACT の枠組みを通じて学生課とコネクションを持たないと出来ないことでした。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒5





令和７年度 日韓青少年対話型交流事業（24028A）

T-ACT プランナー　齎積　應公（社会・国際学群社会学類4年）

活動目的

※ご案内

この事業は、令和７年７月より文部科学省「大学の国際化によるソーシャルインパクト創出支援事業」の枠組み下での実施となり、大学主体の運営に移行しました。令和８年５月、事業全体をソーシャルインパクト推進室／教育推進部 教育推進課 国際共修担当に移管しました。

■新着情報

この事業は筑波大学が令和６年度に文部科学省に採択された、大学の国際化によるソーシャルインパクト創出支援事業「GASSHUKU（合宿）と DOJO（道場）によるグローバルスタートアップ人材育成」による取組で、「正課外科目」となる教育プログラム（授業）です。

■日本国内参加者、申込受付中（７月20日まで）

https://miraefactory.jp/2025

訪日招へい参加者の申し込みも受け付けています。詳しくはソウル大学のホームページをご参照ください。

https://ijs.snu.ac.kr/communications/notice?bm=v&bbsidx=3434

■学内枠組み

国立大学法人筑波大学　社会貢献プロジェクト「日韓の青少年による探求型国際交流プログラムを活用した交流事業」（令和７年度採択）

■学外枠組み

公益財団法人日韓文化交流基金　人物交流助成事業（令和７年度採択）

公益財団法人三菱 UFJ 国際財団　国際交流事業（令和７年度採択）

■目的

この活動の目的は、日韓の文化を深く理解し、双方の文化に柔軟に対応できるグローバル人材の育成です。異なる背景を持つ人々が出会い、共に学び合う過程において、参加者は国際交流の主体となり、プログラムを通じて異文化対応力を身につけることが期待されます。さらに、日韓両国を舞台に、自身とは異なる価値観や考え方を理解・受容することで、異文化への理解を深め、柔軟な思考力と行動力を養います。これにより、参加者がグローバル社会で活躍できる人材として成長することを目指しています。

■沿革

○令和４年度

令和４年度日韓青少年対話型交流事業「日韓高校生文化 PR アワード2022 Presented by 三養ジャパン」（当事業の前身事業）

○令和５年度

創基151年筑波大学開学50周年記念冠事業 令和５年度日韓青少年対話型交流事業「日韓みらいファクトリーアワード2023」

○令和６年度

創基151年筑波大学開学50周年記念冠事業 令和６年度日韓青少年対話型交流事業「日韓みらいファクトリーフォーラム2024」

具体的な活動計画

■社会的現状・課題

我が国と韓国は令和７年に国交正常化60周年を迎えます。両国は経済・文化活動において深い結びつきがある一方で、その関係は変動が激しい状態が続いています。グローバルな情勢の変化や社会の分断が急速に進む今、世代を超えた対話を促進し、両国の将来を担う青少年を育成することは、これまで以上に重要な意義を持つものと考えます。

本プログラムでは、対面での共同作業を通じて活発なコミュニケーションを図り、相互理解を深めます。また、産官学連携のもと、特別講演やワークショップを通じて、参加者に深い学びと貴重な体験の機会を提供します。「境界を超えて共に創る新しい日韓交流空間ビジョン2.0」では、文化体験や市民交流との連携を強化し、安定的かつ持続可能な日韓交流の実現を目指します。これにより、両国関係の更なる発展に寄与できるものと確信しております。

■内容（プログラムの流れ・構成の概要）
　探究型国際交流プログラム（CCPP）を通じて、日本と韓国の学生がチームを組み、国際的な共修を実現します。プログラム全体のテーマは「SDGs の視点から日韓共通の課題を探索・発見し、その解決策を考案する」ことです。

プログラムは以下の三段階で構成されます。
ステップ１）事前研修（オンライン）
　対面研修に向けた導入アクティビティを実施します。
ステップ２）対面研修
　産官学連携による共創プログラムとして、具体的に以下の内容を実施します。
　プログラム①：行政機関・企業による特別講演（官庁訪問）
　プログラム②：Hack Tokyo（東京観光ミッション）の実施
　プログラム③：チームでの課題解決活動とアイデアソン（ハッカソン）
ステップ３）事後研修と活動報告会
　活動全体を振り返る事後研修（オンライン）と一般市民や日韓交流関係者へ成果報告を行います。

　本事業では、社会課題解決型のアイデアをビジネス化したい学生に対して、本学の子会社である「つくばツインスパーク株式会社」の支援を受けながら、プログラム終了後も社会実装に取り組むことが可能であることが特徴です。また、近年の韓国における日本ブームや訪日観光客の増加を好機と捉え、日本の魅力を効果的に発信する機会としても活用できます。昨年度は韓国側だけで 200 名を超える応募があり、本プログラムへの高い関心が示されています。

■募集人数
日韓の大学生各50名程度（日本か韓国の大学に在籍する学生、国籍不問）

■募集方法
プログラムホームページよりオンライン出願（様式に必要事項を入力し伝送）

■開催日程
令和７年８月25日～令和７年８月29日（４泊５日）

■スケジュール

令和７年１月15日	令和７年度事業計画案作成、公的助成申請開始
令和７年２月１日	産官学連携申請開始、学内手続き
令和７年３月１日	プログラム実施を公告
令和７年４月20日	参加者募集開始
令和７年７月12日	参加者選抜結果通知 参加者向け案内開始
令和７年７月（未定）	事前研修（オンライン）：オリエンテーション
令和７年８月25日～29日	対面研修（４泊５日・合宿形式）
令和７年10月（未定）	事後課題、活動報告会（一部参加者のみ、対面）

■事業運営体制について
外部有識者を含む「筑波大学探求型国際交流プログラム推進委員会」を設置し、「事務局」にて運営いたします。なお、韓国における業務の一部は「ソウル大学日本研究所」にて処理されます。

■プログラムの質を向上する為の取り組み（研究等）
https://miraefactory.jp/research

活動場所
○筑波大学東京キャンパス文京校舎
　〒112-0012 東京都文京区大塚 3 丁目 29－1
○東京セントラルユースホステル
　〒162-0823 東京都新宿区神楽河岸１－１ セントラルプラザ 18階

活動期間
2025/04/01～2025/09/30

対 象
学生・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー
O：小野柊羽（医学群看護学類３年）
　為永結子（人文・文化学群比較文化学類４年）
　野田健祐（理工情報生命学術院　数理物質科学研究群　博士前期課程）
　尹珠恩（人文社会ビジネス科学学術院 人文社会科学研究群　博士前期課程）
P：申貞恩（人文社会系　助教）

備 考
■社会的価値・効果等について
　本事業は、参加学生個人の成長にとどまらず、持続的な日韓交流の基盤構築という社会的インパクトを生み出しています。その効果は、２年間にわたりプログラムに参加した学生の声に明確に表れています。
　「私はオンライン開催の令和５年度と対面開催の令和６年度の両方を経験した立場から、対面研修がもたらす特別な効果を強調したいと思います。対面での交流は、オンラインでは得難い深い信頼関係の構築を可能にし、言語や文化の壁を超えて真の相互理解を育むきっかけとなります。実際に、異なる背景を持つ参加者が共通の目標に向けて協働する過程で、国際理解の重要性が自然と体得されていく様子を実感しました。」（令和６年度参加者）
　このプログラムの意義は、駐日本国大韓民国大使館韓国文化院の孔炯植院長からも高く評価されています。令和６年度事業について「今回のフォーラムを通じて築いた友情は、両国の未来に大きな力となり、参加学生の皆様の人生における重要な道しるべとなるでしょう」との評価をいただきました。

■持続可能な社会の実現のための取り組み
　さらに、具体的な成果として、本学主催の日韓交流事業修了生による同窓組織「日韓次世代交流団」の設立が挙げられます。この組織は、参加年度や所属、世代を超えた交流とコミュニケーションを目指して結成されました。私たちは「日韓次世代交流団」を「日韓未来の主人公集団」として位置づけ、社会に新たな価値を創出していけるよう支援を行っています。

■事業成長戦略
　日韓交流で培ったノウハウを諸外国・地域へ拡大することを今後の展開における基軸にしたいと考えています。アントレプレナーシップ教育、異文化コミュニケーション、そして文化体験や観光等による人的交流の３つの視点を組み合わせた「探究型国際交流プログラム（CCPP）」は、複雑化する社会課題を解決しソーシャルインパクトを創出する、国際交流の新しい常識として位置付けられます。私たちは今後、CCPP をグローバル・コミュニケーション・プラットフォームとして成長させて、世界中の人々がグローバルシティズンとして信頼し合える未来をつくってまいります。





活動報告

実際の活動内容

アントレプレナーシップ教育、異文化コミュニケーション、文化体験・観光等の人的交流の 3 つの観点から構成される「探求型国際交流プログラム」に基づきプログラムを提供した。プログラムを通じてグローバル人財を育成し、社会課題の解決・ソーシャルインパクトの創出を図ることで、新たな価値創造を目指した。「課題発見・解決能力、異文化コミュニケーション能力、チームで協働する能力」を有するグローバル人財の育成と共に、招へいする韓国人学生の対日理解を向上させ持続可能な両国関係を構築することを目的とした。

「日本と韓国に共通、または地球規模の課題に対し、両国の知見・資源等を活用したソーシャルビジネスを構想しよう」という題目で、日本人学生と外国人学生が混合で 6 名程度のチームを組んで多文化共修を行う対面研修を基軸にプログラムを構成した。事前研修では異文化コミュニケーションの理論と導入を中心に多文化共修に臨む上で必要な考え方等を講義形式及び、小グループ学習を用いて実施した。事前課題として地球規模課題理解の導入ワークを課した。具体的には自己紹介と関心のあるテーマの深掘りを行うワークシートを配布して取り組んでもらい、参加者全員が内容共有することで、参加者間での理解を深めてもらい、対面研修においてチームメンバーを探したり交流したりする際に活用してもらった。対面研修は、課題解決型学習の手法を本格的に導入した活動を行った。具体的には、「課題設定→現状把握・課題模索→解決策の立案（仮説）→先行事例の探索・解決策の検証→最終案としてソーシャルビジネス・アイデア発表（最終発表）」という流れで実施した。チーム活動ではスケッチブックや付箋などの使用を奨励した。また、学生たちが実際に現場を訪れて企業及び機関が取組む社会課題の解決のモデルを学ぶと共に、チーム活動と接続しインスピレーションを得ることを目的として、羽田エアポートガーデン（東京国際空港第 3 ターミナル直結）、TAKANAWA GATEWAY CITY（JR 東日本 高輪ゲートウェイ駅周辺エリア）、駐日本国大韓民国大使館韓国文化院へ訪問、首都圏新都市鉄道の方を本学にお招きし、特別講演・ツアー・フィールドワークを通じた学びを実施した。さらに、参加学生たちは、合宿先での交流や夕方等の自由時間を活用して自然な交流をしながら、取り組んでいるチーム別の課題に対して、会場において机上で議論するだけではなく、東京の街など全体を活動のフィールドとしてアイデアをブラッシュアップすることができた。対面研修 5 日目となる最終日は、チームごとに自分たちのアイデアを発表し、産学の関係者によって多角的に評価・審査を行い表彰した。事後研修では、振り返りを通じて、異文化、多言語、地球規模課題に関する理解や気づき・学びを深め、個人そしてチームメンバー間において省察することを目的として行った。また今回のプログラムへの参加経験を今後のキャリアデザインにどのように活かしていくのか、短期的・長期的な道筋を考えてもらった。また、事後課題として、事後研修での省察内容をまとめてレポート形式で提出してもらった。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒90％

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

スタッフの継続した動機づけ

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

この活動の形態について丁寧に説明を行い、双方が上手くいく処理方法を考えました。スタッフとの疎通を強化するために、一週間に一回程度のオンラインミーティングを行い、必要に応じて対面でのミーティングも実施し、情報の共有に最善を尽くしました。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

2021年の活動開始以降、大部分の作業を一人で行っていたが今回は、自分にとっては大きな試みとなるチームでの活動でした。これまでの活動では、参加者と支援事業者をステイクホルダーとしていたが、今回活動を通じてチームメンバーが新たなステイクホルダーとなりました。全てのステイクホルダーが満足できる内容（サービス）を提供するためには、それぞれの方面を注視しなければならず、またその核心部分はチームメンバーでした。事業全体の目的地（ありたい姿）を定め、そこに向かって行く過程を理念と共にすることは、非常に重要なことであるということに気づきました。また、これに関連し「ブランドストーリー」の確立と発信及び共有も活動を推進する上で最重要すべき事項であると感じています。ブランドストーリーとは例えば「なぜこの活動をして行くのか」、「この活動は何を目指しているのか」、「この活動はどのような背景と共に成長してきたのか」、「この活動を通じて社会に何を提供したいのか」があります。その一つ一つを常に活動の土台とし、それらを全てのステイクホルダーに向けて発信及び疎通することで、活動の価値を最大化することができ、活動の持続可能な成長へと繋がると考えました。それぞれのステイクホルダーとの最適なコミュニケーションを模索することは、私にとって挑戦でありました。参加者には SNS や Web サイト上のビジュアル・イメージ、オリジナル・キャラク

ターを活用することで、ブランドへ親しみを持ってもらい参加者の一番近いところに寄り添う活動としての席を確立するように努力しました。支援事業者に対しては、ニュースルームサイトを通じたリアルタイムの新着情報発信及びメールマガジンを実施しました。ニュースルームサイトでは「お知らせ」のみを掲示するのではなく、「参加者へのインタビュー」などのコンテンツも充実させ、支援を受けた学生たちの姿を共有しました。

参加者への影響

この活動は、韓国から選抜した大学生を日本に招へいし、日本の学生と「衣食住」を含めて疎通することを通じて、日本に対する理解の促進を図り、もって、「日韓の未来を担うグローバル人財を育成し、持続可能な両国交流の発展に貢献する」ことを目的としています。特に、日韓の未来を担うグローバル人財を「日韓の文化を理解し双方の文化、例えば新しい価値観や考え方に対応することができる人財」であると定義しております。探求型国際交流プログラムを通じて、異なる背景を持つ人々が出会い、交流する過程（共同作業、議論、文化体験）において、アントレプレナーとしてのマインドセット、自信や力を獲得すると同時に、異文化コミュニケーションの主体と化することで、異文化対応力を身につけ、柔軟な思考や行動達成できる異文化変容を遂げることを期待しております。事前研修から事後研修時、1ヶ月後に実施した効果測定の結果を概観すると、参加者が前述の目標を概ね達成することができたことが推察されます。今後は、産官学連携の深化並びに強化、及びプログラム構成の更なる品質向上を図っていく考えでございます。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

プランナーは基本的に孤独であり、時には少々難しい決断をする場面に直面します。しかし、プランナーと一緒になって共に考え行動してくださるオーガナイザーの仲間や、T-ACT フォーラムの先生、教職員の方がいらっしゃいます。そのような恵まれた環境に感謝することを忘れずに、「一人で近い目標」はなく、「チームで通り目標」を目指して努力し続けることが重要であると感じました。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

T-ACT フォーラムを通じてきめ細かな支援を受けることができました。先生や職員の方と継続的に疎通し、活動を実施する上で、どのような点が不安要素になっているのかをその都度洗い出し、解決を図るべく対策を講じることができました。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒4









Tsukuba Intern（24029A）

T-ACT プランナー　阿部　龍馬（数学類4年）

活動目的

私は大学 1 年生の時につくば市内の飲食店でホールスタッフのアルバイトをしていました。しかし、アルバイトの時間は「ただ時間をお金に変換している」といった感覚を抱きながら、働く意義を見つけられていませんでした。そんなある日、サークルの先輩からの紹介で、IT 教育サービスを届けている企業の中で社員さんと協働し、スキルを学びながら、給料をもらえる長期インターンを経験しました。自分のキャリアについて見つめ、実践的なスキルを身につけながら、金銭的にもメリットがある長期インターンという存在に衝撃を受けました。その一方で、長期インターンに参加している筑波大生の数はとても少なく、始めたいと考えている人もその縁遠さから諦めているという知人・友人の現状を知り、今の筑波大生の状況に課題意識を抱くようになりました。

インターンに関する科目が開設されている一方で、周囲に長期インターンをやっている筑波大生が少なく、その存在すら知らない学生もいたことから、同じ学類や学年の筑波大生仲間のインターン経験を可視化したプラットフォームを作成することで、長期インターンへ参加するハードルを下げられるのでは、と仮説を立てました。この仮説のもと、大学の講義を通じて筑波大生特化型インターン情報プラットフォーム「Tsukuba Intern」を企画・開発しています。このプロダクトを拡大、拡散することで”筑波大生の働く選択肢に長期インターンを当たり前に”したいと考えています。

～「Tsukuba Intern」～
URL: https://tsukuba-intern.com/
利用規約 : https://fog-sunstone-a29.notion.site/Tsukuba-Intern-182b646d3b2c806ab095c6ee32362ffb
プライバシーポリシー : https://fog-sunstone-a29.notion.site/Tsukuba-Intern-171b646d3b2c8074ad73f8ffb200dfd0
・筑波大生専用長期インターン求人サイト
・筑波大生のメールアドレスでのみ会員登録が可能
　→プライバシーの問題に対応
・長期インターンを経験した筑波大生の体験記が閲覧できる
　→身近な筑波大生が行っている現状理解や長期インターンに対する解像度向上に繋げたい
・長期インターン求人企業が閲覧できる
　→このサービスを学生と企業の橋渡し的な存在としたい
・学類や学年、業種を指定して体験記を検索できる
　→利用者ごと気になる体験記を閲覧できる

Tsukuba Intern をさらにブラッシュアップし、より多くの筑波大生に利用してもらうことで、キャリアにつながり金銭的にもメリットがある長期インターンの認知を広げ、多くの筑波大生が長期インターンという選択肢を持てることを最終目標とします。

具体的な活動計画

～これまでの活動～
情報学群の 3 年次実験の一部である enPIT において、筑波大生特化型インターン情報プラットフォーム「Tsukuba Intern」を作成した。 また長期インターンに対する意識調査を実施、中央図書館にて70名程度の筑波大生からご回答をいただいた。この調査結果と周囲の友人・知人の意見から、1・2 年生のニーズが高いことや情報系の学生はインターンの敷居が比較的低いことなどが予想された。
（実施したアンケート https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSfIFLdD48WtRp8BTRfiwgml314SUsA6fWh0DzvpOpAigucRhw/viewform）

～今回の活動～
これまでの活動を踏まえ、今回の活動におけるメインターゲットを、筑波大学情報学群の 1、2 年生とする。これらのターゲット層に対して 2 つの方面から広報活動を行う。1 点目は SNS を利用した認知拡大とする。現在掲載中の体験記の紹介や、長期インターンに対する質問コーナーなどを行うことで、情報学群低学年に向けて長期インターンや Tsukuba Intern への認知拡大を狙う。2 点目はキャリアイベントの開催とする。筑波大学ヒューマンエンパワーメント推進室（BHE）と協力しながら、上記の主たるターゲット層に対して参加者20人程度のキャリア意識向上イベントを行う。キャリアイベントを開催する旨について、すでに BHE の皆さんから協力したいとのお話を頂いているため、今回の活動期間内でさらに詳細を決定していく。
今回の活動を通じ、筑波大生が長期インターンという選択肢を当たり前にできることを目標とする。また、学

生と企業の橋渡しとなるサービス「Tsukuba Intern」を実際に筑波大生に利用してもらい、「長期インターン」へのハードルを低くする。今回の活動期間内に Tsukuba Intern を通じて長期インターンに応募した学生が20人になることを目指す。

～活動予定～
［通期］情報学群の新入生をメインターゲットにした SNS 戦略を行う。情報学群の先輩のインターン体験記の紹介や、長期インターンそのものに対する認知向上を目指す。また Tsukuba Intern の紹介もそれらに合わせて行う。
［4、5 月］春日エリアや中央図書館などを中心とした、Tsukuba Intern を宣伝するチラシの配布。新入生向けの資料やイベントに、TsukubaIntern の宣伝資料を入れてもらえないか交渉する。
［5 月～］ある程度の利用者数獲得以降、利用者からのフィードバックを得てアプリケーションの改善を行う。この活動はこれ以降、継続的に行 う。また BHE と協議を重ねながらキャリアイベントの詳細について計画する。現時点では長期インターンの重要性、実際の経験者の登壇・質疑応答、現在募集中の長期インターンピックアップなどの内容を予定している。
［6 月～］利用者が実際に長期インターンに参加し始めた以降、参加者にインターン体験記の記載を依頼する。このような体験記を読んだ学生がまた長期インターンを始めることで、体験記と参加者が世代を超えてループするような構造の構築を狙う。
［7 月～8 月頭］キャリアイベントの広報活動を開始する。特に春 AB 期末試験が終了する 7 月 4 日から自由な時間が増える学生が多いため、ここでキャリアに対する意識を高めてほしい。具体的な広報活動としては、4 月から運営していた SNS による広報や、春日エリア中央図書館でのチラシ配りなどを予定している。
［8 月 8 日］キャリアイベントを開催する。参加者数は20人程度を予定している。学生の自由な時間が増える夏休みを狙い、その前日となる 8 月 8 日を開催日とした。ここでキャリア意識や長期インターンに対するモチベーションの向上を図ることで、夏休みに長期インターン探しや自分の将来について考えてもらえるようにしたい。内容については上述の通り、長期インターンの重要性、実際の経験者の登壇・質疑応答、現在募集中の長期インターンピックアップなどを予定している。
［8 月 8 日～］キャリアイベントの反省を行う。特にイベント実施により Tsukuba Intern の利用者数や長期インターンへの応募に対してどの程度のインパクトがあったのかを重点的に反省する。
冒頭に記載した通期の内容は、活動期間を通じて行う。

活動場所
オンライン・学内教室

活動期間
2025/03/20～2025/08/31

対象
学生・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー
O：桑原士門（情報メディア創成学類 3 年）
　白澤陸（情報科学類 3 年）
　渡邉周（情報メディア創成学類 3 年）
P：福嶋美佐子（ヒューマンエンパワーメント推進局）

活動報告

実際の活動内容
筑波大学生に向けた長期インターン掲載サイトの運営。学生と企業様をつなぐイベントの開催運営。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒120％

実施中の困難と解決策
実施中に困ったこと
　イベント運営にて、メンバー不足により円滑な進行ができない恐れがあった。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか
　参加企業の方々にご協力いただいたり、イベント内で「Tsukuba Intern」に興味を持ってくれた学生を運営メンバーとして招き入れた。

活動の体験について
自分にとってどんな体験であったか
　沢山の学生と企業に触れることで、長期インターンの利点について改めて再認識した。それにより、長期インターンへの解像度が更に上がり、プレゼン力の向上や目標の明確化に繋がった。

参加者への影響
　バイトを長く続けていた学生が実際に長期インターンを始めたり、イベント運営に参加したりと着実に周りから「長期インターン」という文化が広がっているように感じる。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ
　一歩踏み出すことはとても勇気がいります。しかし、その一歩で環境と未来がガラッと変わる経験をしました。是非皆さんもその一歩を大切にしてください。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください
　筑波大の公認団体となり、活動を後押ししてもらえることが利点だと思います。怪しい団体ではないという名刺にもなりますし、近くに相談できる大人がいる安心感を持てるのは貴重に感じました。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒5





芸術専門学群　交流会（25001A）

T-ACT プランナー　林　路子（芸術専門学群2年）

活動目的

［目的］

今回のイベントでは参加者が新しい知り合いをつくることや意見交換・情報交換を互いに行うことを目的にする。参加者は芸術専門学群生を対象とし、学年は問わない。

こんな人にぜひ来てほしい

・芸専生同士でもっとたくさん話したり、話を聞いたりしたいがなかなか集まる機会がないと感じている方
・知り合いを増やしたいが、サークルや委員会に所属するのは負担に感じている方
・オリエンテーションや新入生歓迎会で知り合いを作るタイミングを逃してしまった新入生の方
・興味が複数領域にまたがっていて、他領域や他学年の学生と交流したい方

［企画に至る経緯］

まず入学してからの一年を振り返り、新入生オリエンテーションやファーストイヤーセミナーが終了すると、サークルや委員会などに属していない場合交流の機会が激減すると感じた。友達とじっくり話ができる機会は思った以上に少なく、友達でもどんなことに興味があるのかを半年経ってから知ることもあった。「こんなに面白い人だったのか！」「自分は興味なかったけど、この情報に興味があるなら紹介すればよかった」など、もっと早くから知りたかったという後悔がある。

次に「日本画とはなにか」という問いに悩んでいる友達と話していた際に、他の人に話して自分の頭を整理したいという欲求が生まれた。だが普段友達と話し合うには十分な時間が取れない。また抽象的・哲学的な事を長々と話すと友達に嫌がられたり、めんどくさいと思われるかもしれないという不安で思い切り話せないといった問題があった。

そして自分の興味が複数の領域をまたがっているため、領域の異なる生徒とも交流をしたいと強く思うようになった。入学してから自分のやりたい事や興味のあることが抽象的で、具体的に何をするべきかわからずに苦しんでいた。しかし自分以外の人にじっくり相談すると新たな解決策や具体案が見つかるという経験を何度もした。興味の近い生徒や先生を紹介してもらえたり、今まで知らなかった職業や活動を教えてもらったり、それに自分がすごく助けられているため、そういった交流の機会を増やそうと思った。

具体的な活動計画

4月下旬　……準備　模擬開催（立案者・オーガナイザーのみで行い、反省点を本番で活かす。）
4月下旬〜5月中旬……参加者募集期間
　各学年のグループLINEや知人経由で告知・Googleフォームで事前に参加人数を把握する。
5月下旬〜6月上旬……交流イベント実施（参加無料）平日はアイスブレイクを兼ねた気楽な交流会
　休日はじっくり話し合える交流会
　※当日飛び入り参加、途中退室可能。友達を誘って参加可。
　候補　平日6/2、3、4の3日間と休日6/7または8の計4日間
　（教室利用やオーガナイザー・参加者の都合を考慮して日にちを決定する）
7月以降　……オーガナイザーや参加者の要望に応じて開催を検討する

イベント当日の流れ

（平日3日間）
18:15　集合……スタッフが事前に決めた3〜4人のグループに分かれて座る。交流用のワークシートへの記入。
18:30　開始……軽い自己紹介をして、ワークシートをもとに交流を始める。ひとりがワークシートを見せ、グループ内の人はそれをもとに質問をしたりする。15分ずつで交代。それぞれのグループにオーガナイザーを配置する。
19:30　振り返りなど
20:00　終了

（土曜日または日曜日のどちらか1日）
（13:30　スタッフ集合）
14:00　開始……全体で自己紹介（一人1分前後）
14:30　自由に交流
16:30　参加者に振り返りアンケート（次回開催希望内容など）をとる。片付け。
17:00　終了

活動場所
未定（5C 棟もしくは 6A 棟の空き教室）
平日　5C404教室
休日　5C307教室



活動期間
2025/04/10～2025/09/30

対象
学生

T-ACT オーガナイザー／パートナー
O：安倍麻衣子（芸術専門学群 2 年）、川口楓加（芸術専門学群 2 年）、東海林晄（芸術専門学群 1 年）
　角田実優（芸術専門学群 1 年）、上田ラナ（芸術専門学群 1 年）、島田百合（芸術専門学群 1 年）
　楠優華里（芸術専門学群 1 年）
P：吉田奈穂子 先生（芸術系）

活動報告

実際の活動内容
2025年 4 月11～5 月31日
交流会の構想、ワークシート作成、模擬開催をプランナーとオーガナイザーのみで行った。

2025年 6 月 1 日以降
実施は当初の予定通り 6 月 2 日、3 日、4 日、7 日の計 4 日間行った。活動内容は 4 日間とも共通だが、参加メンバーが異なる。

まず用意したワークシートに自分の興味関心事項を記入した付箋を貼っていく。
次に 3～4 人ごとのグループに分かれ、一人当たり15分の持ち時間を自己紹介と班内のメンバーから質問を受け付ける時間に当てる。
そして班全員の紹介が終了した後は今回交流できなかった他の班の人に向けて自分の右隣に座っている人の紹介をする（他己紹介）。
最後に自由時間を設け、同じ班でも別の班でも関係なく自身が気になった人へ話しかけると言う時間を交流会終了後にも受けた。この時間がかなり盛り上がったため予定のスケジュールよりも早めに進行することもあった。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒70％

実施中の困難と解決策
実施中に困ったこと
①交流会が終了した後、教室から退去する制限時間ギリギリまで参加者の大多数の人たちが自主的に交流していた。嬉しい誤算だが、話が盛り上がっている最中に教室から退出してくださいと言わなければいけなかった。
② 2 年生の参加が多く、3 年生や 1 年生の参加が少なかった。
③急遽キャンセルの方や連絡なしで欠席した方がいてチームの組み合わせを急遽変える必要があった。班員の偏りやオーガナイザーへの急な指示出しなどで手間取ったりしたが、オーガナイザーの人数が多かったため臨機応変に対応することができた。
④開催後アンケートの回答率が低かったこと。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか
①交流会のスケジュールの最後に自由時間を設ける。Teams などで参加者同士が交流会の前後でコミュニケーションが取れるようにしておく。
②同学年で固まってしまいすぎないように広報の仕方を変える必要があった。次回行うときには今回の参加者や知りあいづてにも参加者を募ることで改善を図る。
③申し込みの Google form でのリマインドをして再度出欠確認などをする必要があった。
④交流会中にアンケートに回答する時間を十分に取ることが必要だった。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

大きな反省点としては、当初の目的であった芸術の学生同士で議論する場をつくると言う目的から少し交流会という浅い話し合いの場になってしまった点だ。原因としては参加者同士が初対面で議論の前に打ち解ける時間が必要だったこと、議論に至る前に十分な時間が足りなかったこと。開催時期が 6 月という 1 年生がまだ学校生活に馴染む前で緊張している。といった点が挙げられる。目的を達成するためには高学年に募集を絞り、交流会で取り上げる話題をいくつか提示した段階で募集をかけるなどした方が効果的に議論が進みやすい交流会ができたのではないかと思う。

よかった点としては当初の計画通りの日程で計画が進んだことと、オーガナイザーへの指示だしや役割分担などの仕事がうまく出せていたということ。一つの企画として初めから最後までやり遂げたという自信が生まれた。また自分やオーガナイザー、参加者との交流を通して絆が生まれたことで、後々の学校生活が豊かなものになった。交流会のために作成したワークシートの評判がよかったため別の機会で用いることや改良を加えようと考えている。

参加者への影響

今回参加して一番よかったと感じたことは、全く知らない人同士で会った参加者が交流会の終了後に打ち解け、各々が書いたワークシートを持ち寄って気になった人のところへ行き、退室の時間になるギリギリまで交流を楽しんでいたことだ。内容はキャリアの相談、履修、授業の内容、同じ専攻同士での相談、別の専攻領域に対しての興味、キャリアや趣味など多岐にわたる。どれもワークシートに書いたキーワードやグループ内での自己紹介、また最後に全体に向けて行った他己紹介が短時間にも関わらず良いきっかけになっていったと思う。芸術専門学群では 3 年次以降に領域が決定するため、他領域や先輩と交流することで進路の参考になったという生徒や、総合学群から芸術専門学群に移行したばかりの 2 年生は同じ領域の知り合いが増えて嬉しいというふうにも言っていた。また知り合い同士の参加者の中でも友人の知らない一面を知ることができて新鮮だったという意見も出ていた。

実際にこの交流会を通して仲良くなった人同士で共通の趣味の場所へ出かけた人もいる。他にも気になる研究室の先輩を紹介してもらい、連絡を取ることでポートフォリオを見せてもらうことができたという人もいる。さらには自分がやりたいことと近い内容の活動団体が筑波大にあることを知った。などの効果がみられた。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

初めて企画をするが不安が沢山ある、何から手をつけていいか分からないという場合でも職員さんに相談すれば具体的な提案をしていただけるため、良いスタートがきれると思います。大学生活で自主的に活動を始めるきっかけに T-ACT で企画を実現してみてください。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

今回の企画を個人で行うには参加人数が多く、グループワークなどで用いるバインダーやマーカーペン、付箋などが一度に大量に必要になった。個人でこれらを用意する初期投資費用が抑えられ、かつ T-ACT という大学内の組織で行うことで参加者からも信頼が得られたので、初めて企画した企画としては概ね順調に行えたと感じている。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒3





みんなで空を飛ぼう！ 2025（25002A）

T-ACT プランナー　髙橋　華恋（心理学学位プログラム博士前期課程2年）

活動目的



自分がハンググライダーというスカイスポーツをしており、一緒に空を飛ぶ仲間を増やしたいと思いました。ハンググライダーの魅力や自由に空を飛ぶ楽しさをたくさんの人に知って欲しいです！そして、みんなで空を飛びたいです！また、筑波大学には数年前まで、パラ・ハンググライダーサークルのアイオロスという学生団体が存在していましたが、コロナ禍で所属人数が減少し、無くなってしまいました。そのこともあり、最終的には、仲間を集めて一般学生団体を設立することを目指しています。

前回の T-ACT では思うように人が集められず、活動が殆どできないまま期間が終了してしまったため、今回は人を集めることに重点を置き、勧誘活動に力を入れて活動したいと考えています。

【ハンググライダーとは】

大きな翼にぶら下がって空を滑空するスカイスポーツです。機体を自分で操縦して、自由に空を飛ぶことができます。さらに、風を直に感じられるため、鳥になったように思えるかも!? 上昇気流を捕まえれば、飛び立った場所よりも遥かに高い場所、遠い場所を飛ぶこともできます！

ハンググライダーは生涯スポーツだとも言われていて、実際に社会人になっても続けている人達が沢山います！中には70歳になっても続けている人も……！

そんな社会人の方々と交流したり、大会などで全国の他大学の人達と一緒に飛んだり出来るのも、ハンググライダーの魅力です！

具体的な活動計画

４月・５月　週末に日帰りで無料体験会※①
SNS での広報活動
学内での勧誘活動（ビラ配り等）
内でのハンググライダー展示（月１回）※②

６月・７月　SNS での広報活動
学内でのハンググライダー展示（月１回）
無料講習体験（随時）
週末に講習会※③
平日に勉強会※③

※①体験会について
大学内（参加者の都合によって変更可）に集合し、車で石岡市にあるフライトエリアに向かいます。実際にハンググライダーで飛ぶところを見学したり、浮遊体験をしたり、VR で飛ぶ体験をしたりできます。
同じ場所で活動している他の大学（東京大学、東京農工大学等）の学生とも交流しながら、体験に参加できます。活動の内容についても、ここで詳細に説明します。
参加費は無料で、日帰りで行います。

※②学内でのハンググライダー展示について
学内の許可が取れた場合、通行の邪魔にならない場所に展示することを考えています。
頻度は状況に合わせて平日に月１回程度、場所は石の広場を考えており、関係部署へ確認を取る予定です。

※③講習会、勉強会について
石岡市にある晴飛ハンググライダースクールに入校し（備考参照）、インストラクターの指導のもと、飛ぶための練習をします。
平日には、大学内の教室を借りてハンググライダーについての勉強会や安全講習会を定期的に行います。

○参加申込について
以下の方法で申込が可能です。
① T-ACT の企画ページ（このページ）からの問い合わせ
②このページに記載されているメールアドレスへのご連絡
③ Instagram 及び X（旧 Twitter）の DM でのご連絡
なお、大学でのメールアドレスを聞くことで、在学生であるかの確認を行うこととします。

活動場所

勧誘活動の場所‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥第１エリア1C 棟２階前スペース・第２, 第３学間広間等
ハンググライダー展示場所‥‥石の広場等
週末の体験場所‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥茨城県石岡市
平日の勉強会‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥学内のどこかの教室（参加者の都合によって考える予定）

活動期間

2025/04/09～2025/08/09

対象

学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：片貝陽花（心理学学位プログラム博士前期課程２年）
P：合原一究（システム情報系）

備考

【安全について】
　学外活動の際には、ハンググライダースクールに入校し、日本ハング・パラグライディング連盟が発行する教員技能証を持つインストラクターに指導してもらいながら、安全に気を付けて活動します。また、平日に勉強会や安全講習会を行うことで、安全への意識を高めます。
・入校する晴飛ハンググライダースクール‥‥https://haretobi.jp/

【保険について】
　参加者は、練習を始める際に、第三者賠償責任保険に必ず加入します。

【費用について】
　スクールに入校し指導を受けるために、講習費５万円（条件つきで２万円キャッシュバックあり）が必要となります。保険の加入には、7,000円がかかります。
　これらの費用は参加者各自が負担することとしますが、事前にプランナーが十分な説明を行い、了承を得てから負担してもらいます。

活動報告

実際の活動内容

① SNS での広報、学内での勧誘活動
　主に Instagram を使用し、SNS でハンググライダーについての投稿や活動の宣伝を行った。
　学内では、昼休みにビラ配りをするなどして勧誘活動を行い、下記の無料体験会への参加者を募った。
②日帰りでの無料体験会
　４，５月の週末に、日帰りで無料体験会を行った。実際にハンググライダーが飛ぶところの見学や、本物の機体で浮遊する体験、VR で空を飛ぶ体験などをしてもらった。30人ほどに参加してもらうことができ、ハンググライダーについて知ってもらえるきっかけとなったと思う。
③週末の講習会
　無料体験会でハンググライダーで空を飛ぶことに興味を持ってくれた人を中心に、実際に飛ぶための練習を週末に行った。まず初めに、本物の機体を持って地上で走る練習を行っていた。また、８月には新潟で行われていた他大サークルの合宿に一緒に参加して練習を行った。
④平日の勉強会
　月に１回程度学内で集まり、ハンググライダーや安全についての知識を深めるために勉強会を行った。
⑤初飛び
　今年初めて空を飛ぶことが出来た参加者もいた。空を飛ぶ仲間を増やすことができた。
⑥大学の広報による撮影への協力
　大学の広報局から取材の依頼があり、本活動の撮影及び動画の作成をして頂いた。実際にプランナー自身が飛んでいるところや、新潟での合宿の様子などを撮影して頂いた。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒80％

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

新歓の期間に、T-ACT として勧誘活動をするのに制限があることがあった（新歓祭など）。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

T-ACT 推進室で相談させてもらい、一緒に方法を考えてもらった。完全に解決は出来なかったが、勧誘活動について色々とアドバイスを頂くことができた。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

昨年度も同じような内容で活動させてもらったが、開始時期が少し遅かったこともあって上手く勧誘活動が行えず、人を集めることが出来なかった。今回はその反省を生かし、新歓期間中に T-ACT での活動が始められるようにしたり、昼休みにビラ配り等の勧誘活動を行ったりするといった変化をつけた。結果として、前回は無料体験会への参加者が 2 人だったのに対し、今回の参加者は30人ほどとなり、大幅に増加した。勧誘活動に力を入れることでここまで大きな変化が出るとは思っていなかったため驚いたが、大きな達成感を得た。

今回は、初めて空を飛ぶことができた参加者もいた。一緒に空を飛ぶ仲間ができたことが、とても嬉しく感じられている。ただ、まだまだ一人と少ない人数にとどまっているため、今後も仲間が増えていったら良いなと願っている。

参加者への影響

最後まで活動に参加し、練習等を頑張ってくれていた参加者は、斜面から浮き出したり空を飛んだりすることが出来るようになった。また、他大のサークルでハンググライダーの活動をしている参加者とも交流し、仲良くなることができていたように感じられた。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

T-ACT は、本当に色々な活動を応援してくれます。「こんなもので良いのかな」と不安に思っていても、とりあえず T-ACT 推進室に相談してみましょう。きっと色々なアドバイスをくれたり、改善点を教えてくれたりするはずです。やってみたいことがあれば、ぜひやってみてください。実際にやってみると大変なこともあって、上手くいかないこともあるかもしれませんが、めげずに頑張ってください！

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

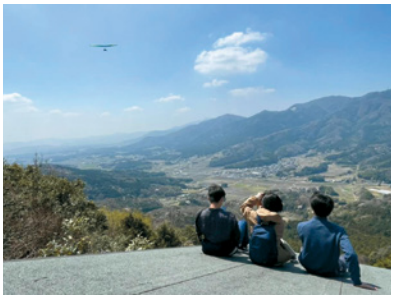
新歓期間に個人での勧誘活動をすることが出来ず、サークルを作りたいと思っても人を集めるのが難しいという状況で、T-ACT を利用させてもらって勧誘活動をすることが出来た。その結果として、ハンググライダーの活動を多くの人に知ってもらうことができたり、実際に空を飛ぶ仲間ができたりして、本当に良かったと思う。

願わくば、サークルの新歓と同じように勧誘活動ができるようになると良いなと思う。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒4









サッカーボールをパスしてみんなと対話しよう！ 7th ステージ（25005P）
Pass the soccer ball and interact with everyone! 7th Stage

T-ACT プランナー　北條　英次（ヒューマンエンパワーメント推進局）

活動目的

企画名：「サッカーボールをパスして、みんなと対話しよう！
Pass the soccer ball and interact with everyone!」

本企画は、スポーツ、特に「サッカー」の力を通じて、コロナ禍により停滞していた学内の交流を活性化させることを目的として、2021年12月に活動を開始しました。参加者は、本学の日本人学生、外国人留学生、教職員、研究員、卒業生など、多様な背景を持つメンバーで構成されています。

活動開始以降は、毎週末に大学のサッカー場や体育館で定期的に練習を行い、継続的な交流の場を提供してきました。参加者の数も順調に増加しており、2026年２月現在では、約150名が本企画に関わっています。
参加メンバーで構成されたサッカーチーム「KickChat FC」は、大学のスポーツ・デーにおけるサッカーやフットサル競技への参加をはじめ、活動の幅を着実に広げています。

さらに、本企画のプランナーが申請・採択された筑波大学の社会貢献プロジェクトと連携し、地域の子どもたちにサッカーを楽しめる場を提供する取り組みも展開しています。

今後も、スポーツが持つ力を信じ、「ボールをパスする＝対話する」というコンセプトのもと、キャンパス内外における異文化理解の深化と多文化共生の促進に貢献していきたいと考えています。

Project Title: “Pass the Soccer Ball and Interact with Everyone!”

This project began in December 2021 with the aim of revitalizing campus interactions that had stagnated due tothe COVID-19 pandemic, through the power of sports-particularly soccer. Participants include a diverse range ofpeople such as Japanese students, international students, faculty members, researchers, and alumni of the university.

Since its launch, the project has hosted regular training sessions almost every weekend at the university’s soccerfield or gymnasium, creating ongoing opportunities for interaction. The number of participants has steadily grown, and as of Feb 2026, approximately 150 people are involved.

A soccer team composed of project participants was formed under the name “KickChat FC.” The team actively expands its activities by participating in soccer and futsal events, such as the university’s annual Sports Day.

Furthermore, in collaboration with a university-approved social contribution project proposed by the project planner, we have begun providing local children with opportunities to enjoy playing soccer.

We believe in the unifying power of sports and will continue to promote intercultural understanding and multicultural coexistence both on and off campus through the act of “passing the ball” —a symbol of dialogue and connection.

具体的な活動計画

本企画の2026年２月から2026年８月にかけての活動計画は以下のとおりです。

①サッカー練習を通しての異文化交流
日時：毎週末２時間程度を予定
場所：春日体育館、第２サッカー場等
内容：ウォームアップ、基礎練習、ゲーム形式など未経験の方には経験者がサポートします。
　　各自持参するもの：運動できる服装、室内用フットサルシューズまたは屋外用サッカースパイク、フットサルボールまたはサッカーボール
②異文化交流 e-sports サッカー大会
日時：2026年４月または５月を予定
場所：スチューデント・コモンズ
内容：実際に体を動かしてのサッカーには抵抗を感じる外国人留学生、日本人学生をターゲットに e-sports サッカー大会を開催し、ゲームを楽しむ中でキャンパス内の異文化交流を促進します。
　　使用するソフトは人気サッカーゲーム「FC25」を予定しています。ゲーム機「PS4」をプロジェクタに繋ぎ大スクリーンでプレイして盛り上がります。ゲームで対戦したり共同プレーをする中で言語の壁を超えて参加者間の交流を深めることを意図しています。
③社会貢献プロジェクトと連携した近隣住民とサッカー交流できる場の共有

日時：毎月 1 回程度
場所：第 2 サッカー場
ワニナルサッカー部の関係者とコラボし、国籍、性別を問わず近隣住民とサッカーができる場所を共有します。

Planned Activities from February to August 2026

1. Intercultural Exchange through Soccer Practice
   Schedule: Approximately 2 hours every weekend
   Locations: Kasuga Gymnasium, Second Soccer Field, etc.
   Content: Sessions will include warm-ups, basic drills, and game-style play. Beginners are welcome—experiencedparticipants will provide support and guidance.
   What to Bring: Comfortable sportswear, indoor futsal shoes or outdoor soccer cleats, and a futsal or soccer ball
2. Intercultural e-Sports Soccer Tournament
   Schedule: Planned for April or May 2026
   Location: Student Commons
   Content: This event targets international and Japanese students who may feel hesitant about participating in physical sports. An e-sports soccer tournament will be held using the popular soccer game ""FC25."" Participants will play on a large screen via a PS4 console connected to a projector. The goal is to encourage intercultural exchange on campus by fostering communication and teamwork through virtual matches and cooperative gameplay, transcending language barriers.
3. Sharing a space for soccer exchanges with local residents in collaboration with social contribution projects
   Date/Time: Approximately once a month
   Location: Second Soccer Field
   In collaboration with WaniNaru Soccer Club members, we will share a space where local residents can play soccer regardless of nationality or gender.

活動場所
①春日体育館、第 2 サッカー場等
②スチューデント・コモンズ
③第 2 サッカー場

1. Kasuga Gymnasium or 2nd Soccer Ground
2. Student Commons
3. 2nd Soccer Ground

活動期間
2026/02/09～2026/08/09

対象
学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー
O：デヴォン ルイシア（生物資源学類）
P：小井土正亮（体育系　准教授）



活動報告

実際の活動内容

キャンパス内における異文化交流および多文化共生の促進を、サッカーを通じて実現することを目的として、本プロジェクトは2022年から継続的に取り組んでいます。本プロジェクトのメンバーを中心に「KickChat FC」と名付けたチームを立ち上げ、現在では学内の留学生の間でも広く認知される存在となっています。活動メンバーで構成するLINEグループには、約150名が所属しています。主な活動は週1回程度の定期練習であり、筑波大学第2サッカー場または春日体育館を会場として実施してきました。今回からつくば市近辺で活動しているワニナルプロジェクトのサッカーチーム「ワニナルサッカー部」と定期的に合同練習を行い、交流を深めました。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒100％

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

特にありません。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

特にありません。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

本活動は3年半以上にわたり継続して実施されており、参加者の広がりも着実に見られます。留学生と日本人学生との交流が進んでいるだけでなく、留学生同士においても、来日直後の生活に関する相談やサポートが自然に行われるなど、相互支援の関係が生まれています。当初想定していた以上に交流の質が深まり、コミュニティとしての機能を果たしている点から、本活動は期待以上の効果を上げていると感じています。

参加者への影響

ワニナルサッカー部の方々と一緒に練習することで、外国人留学生にとってはキャンパス外の社会人の方との接点がつながり、交流関係が広がったのではないかと感じています。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

T-ACTスタッフはいつでも協力的です。思い立ったらとにかく相談してみましょう。実現までサポートしてくれます。

T-ACTを利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

本活動を継続して実施できているのは、T-ACT推進室の多大なご協力があってこそであり、心より感謝しています。継続的な支援と丁寧な対応により、活動を安定して進めることができています。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒5





エッセイコンテスト ――「知的好奇心の更新履歴」(25003A)

T-ACT プランナー　渡邉　愛梨（社会学類3年）

活動目的

大学入学後、興味関心が変化することは極めて自然なことです。実際、入学から卒業まで関心が一切変化しない人の方が稀でしょう。しかし、そこで想定されているのは、あくまで学類の枠にとどまった関心の変化であるように思われます。

所属する学類が扱う分野の中で関心が変化した場合、学類の先生方や友人などに話したり、新しく興味を持った分野の勉強について相談したりするのは比較的容易でしょう。一方、学類・学群の枠を超えた興味関心の広がりを経験した学生は、交友関係の制限上、勉強仲間や相談相手を見つけるのが困難であると考えられます。また、そもそも関心の大きな変化を打ち明けることそれ自体が勇気のいることです。

そこで、「知的好奇心の更新履歴」というテーマのエッセイコンテストを行い、それを冊子にまとめて学内に設置することで、同様の興味関心の変化を経験し、同じように悩んでいる仲間と（紙面上で）出会う場を創出します。

また、OB・OG で転学類をした方々にも寄稿を依頼し、「興味関心の変化に伴う悩み事をいかにして解消したか」を冊子に掲載することで、関心の変化を経験した学生が必要な情報を容易に入手できるようにすることも活動目的の 1 つです。

具体的な活動計画

○エッセイコンテスト――「知的好奇心の更新履歴」

【募集内容】

・対象者：筑波大学に所属する学生
・「知的好奇心の更新履歴」を大きなテーマとし、「知りたい」「学びたい」という気持ちの変遷やそれに伴う体験を自由に書いてもらう
・字数は600～1,000字程度
・個人情報保護のため、冊子に掲載されてもよいペンネームで提出してもらう
・冊子掲載の許可を確実に得るため、エッセイにその旨を明記してもらう（記載がない場合は連絡して確認）

【審査方法 / 賞品について】

・参加賞：冊子の PDF 版をプレゼント
・賞（品）：グランプリ（図書カード3,000円分）、準グランプリ（図書カード1,000円分）賞品
・審査員：エッセイ応募者
・評価基準：伝わりやすい文章／テーマに沿った内容／応援したくなる内容

○ OB・OG の方々への寄稿依頼（転学類経験者や複数の分野に精通している知り合い）

・600～1,000字程度
・学生と同様、冊子に記載する上でのペンネームを伺う
・依頼内容：興味関心の変化、悩み事や困りごとの解決方法、後輩へのアドバイス等を執筆してもらう
・謝礼として Quo カード1,000円分をお渡しする（想定 2 人）

○冊子の作成

・作品を 1 つの冊子に編集して学内に置かせてもらう（第一候補は中央図書館）
・冊子は 5 冊作成する予定（募集数によっては変更）
・T-ACT 推進室で印刷させてもらう

【スケジュール】

4 月中旬　：作品募集開始、OB・OG への依頼（期日は 8 月末を予定）
　（4 月中：オーガナイザーと審査の詳細について打ち合わせ）
7 月中旬　：作品募集締め切り
7 月中旬～　：グランプリ・準グランプリ選考（参加者による投票）
7 月末　：グランプリ・準グランプリの発表、賞品授与
8・9 月　：冊子の編集（8 月：オーガナイザーと冊子の構成について打ち合わせ）
10月初め　：冊子の設置

活動場所
特になし

活動期間
2025/04/13～2025/10/01

対象
学生・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー
O：田辺匠之助（人文学類３年）
P：土井裕人 先生（人文社会系）



備考
【個人情報の保護等について】
・エッセイは実名ではなく、ペンネームで共有・冊子化を行う
・応募の段階で、冊子として不特定多数に読まれることへの承諾を得る

【募集方法について】
・Microsoft forms にエッセイを PDF で送信してもらう予定（現在、作成中）

【費用の負担について】
「コンテストへの応募がたくさん集まってほしい」「OB・OG の方々への感謝の気持ちを示したい」という気持ちから、プランナーである渡邉が全額負担します。冊子の作成は T-ACT フォーラムでの印刷を活用させて頂くなど、費用は渡邉が問題なく負担できる金額に抑えてありますので、ご心配には及びません。

【X アカウント】
@kokishin_essay

活動報告

実際の活動内容
４月中旬に、学生を対象にしたエッセイコンテストの募集を開始し、募集終了まで企画の X アカウントで応募を呼びかけました。また、同時に筑波大学卒業生へのエッセイ寄稿依頼も行いました。エッセイの募集締め切りは当初６月30日に設定していましたが、「応募者がそれほど多くないため、審査に１か月も必要ないこと」「締め切り直前が期末試験と被ってしまっていること」を主な理由として、７月15日まで締め切りを延長しました。最終的に、さまざまな所属・学年の10人を超える学生に参加していただきました。７月18日には、集まったエッセイをすべてまとめた PDF を参加者にメールで共有し、Google Form にてグランプリ・準グランプリ選出のための投票を行いました。７月末に投票を締め切り、その結果を参加者全員にメールで報告をしました。グランプリ・準グランプリ受賞者には、それぞれ対面とオンラインで賞品の図書カードをお渡ししました。エッセイを寄稿していただいた卒業生への謝礼もオンラインでお送りしました。９月頭には、オーガナイザーと冊子の編集について話し合いをし、印刷は T-ACT 推進室でやらせていただき、冊子を完成させました。作成した冊子は10月中、中央図書館の入り口に掲示していただきました。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒80％

実施中の困難と解決策
実施中に困ったこと
募集開始直後はなかなか参加者が集まらなかったことです。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか
X アカウントでの発信・呼びかけをできるだけ高頻度で行い、企画について周知させようと頑張りました。また、T-ACT 推進室の公式アカウントでの拡散やつくばアクションプロジェクト報告会でのチラシ設置をしていただきました。結果として、10人以上の方に参加していただけたので良かったです。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

大学に入ってから、自分が主体になって動くような活動を一度もしたことがなかったので良い経験になりました。今回行った企画は学問的な関心の変化をテーマにしており、多くの学生の惹きつける企画内容ではなかったかもしれません。しかし、参加してくださった十数人の方々のエッセイを読んで、「私自身が経験した知的好奇心の変化は、程度の差こそあれ多くの学生が経験しているものだろうという想定は間違っていなかった」と分かり安心しました。この活動から得たことで何よりも大きいのは、私自身もこの企画を通じてエッセイを書き、それが自分自身の興味関心について理解を深める契機になったということです。自分の興味関心について誰かに向けて伝えるということを、多くの人々が経験するのは志望理由書を書くときだと思います。しかし、それ以降はなかなかそのような機会がないということに、活動を行っていく中で気づきました。今回の企画は私にそのような機会を生み出してくれました。だから私個人としては、「この企画をやってよかった」と心の底から感じています。参加してくださった方々にとっても、そのような企画になっていれば嬉しいなと思っています。

参加者への影響

（参加者の方々と対面での交流を行ったわけではないため、メールなどのやりとりを通じていただいた感想について書きます）。興味関心の変化を他の人とシェアする機会を作るという企画の趣旨に共感し、参加を決めてくださったという方がいました。また、自分の関心やこれまでの学びを振り返るきっかけになったというコメントを複数いただきました。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

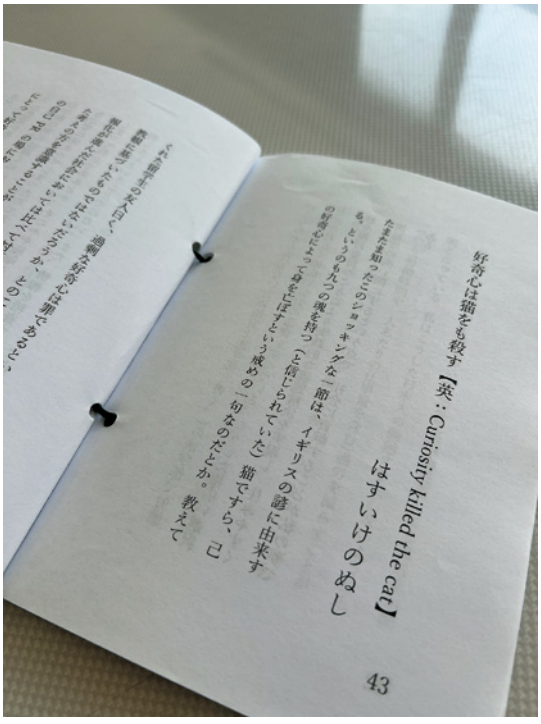
企画を思いついたとしても、「自分しかこんなこと考えてないんじゃないか」「誰も興味を持ってくれないんじゃないか」と不安に思ってしまうかもしれません。しかし、同じようなことを考えている人は意外とたくさんいます。企画をまずは「やってみる」ことで、そのことに気付けるはずです。ぜひ挑戦してみてください！

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

企画を始める前段階で、企画内容や注意しなければならない点などについてアドバイスをいただけたのが非常にありがたかったです。それは活動を開始してからも同様で、特に「活動が上手くいっているか」をことあるごとに気にかけてくださっていたのが印象に残っています。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒5



クロスジャンルJAM（25004A）

T-ACT プランナー　小峯　海円（理工学群社会工学類2年）

活動目的



東大発のインカレKINGが開催するビジネスコンテストに参加し、「ビジコンって面白い！」と実感したことがスタートでした。同様のイベントをつくばで開催したいと考えていますが、学生だからこそもっと斬新で参加者が「ビジコンは楽しい！」と感じられる、メンバーそれぞれの個性が光るイベントにしたいと思っています。つまり、「ビジコン×何か」という新たな形で挑戦を進めたいのです。

また、筑波大学に在籍して感じた課題として、同じ学類内での繋がりはあるものの、他の学類との交流はサークル内にとどまってしまっている点があります。志ややりたいことは似ていても、異なるスキルや背景を持つ人々との繋がりがなかなか生まれにくい現状を打破したいと考えています。そこで、イベントを通じて様々な学類の人々が出会い、共通のビジョンを持つ仲間と繋がれる場を創出することが最終的な目標です。

ターゲットとしては起業やビジコンに気軽に触れてみたい。何かに挑戦したい。自分の好きなことを話したり、何かに活動的な人と話してみたい方です。

具体的な活動計画

○毎月運営メンバーが考えたイベントを１回更新します。（半年で６回）

○１回目のイベント
・開催日：４月19日
・当日の流れ

１．オープニング＆お菓子を食べながらの交流（14:00～14:20）
参加者がお菓子を食べながら自由に会話。（人が集まるまで）

２．サイコロ自己紹介（14:20～14:50）
サイコロを振り、出た目に応じたお題について各自が話す形式の自己紹介を行う。一人二分程度を目安に発表し、他の参加者がコメントや質問を交えて会話を広げる。

お題の例は以下の通りとする。
・最近気になったニュース
・いま熱中していること
・これから学びたいこと
・最近の失敗談と学び
・未来に期待していること
・子どもの頃の夢など

３．普段の活動の紹介（14:50～15:00）
サークルとしての普段の活動を紹介する。

４．キーワード組み合わせビジネス創出（妄想リストランテ）（15:00～16:00）
創造的思考を刺激し、新しいビジネスアイディアを即興で発想する企画を実施する。短時間でアイディアを形にし、発表することで発想力の向上を目指す。

ルール
参加者全員が単語をランダムに出し合う（例：「AI」「シニア」「旅行」「健康」「ペット」「エンタメ」など）。
その中から二つをランダムに選び、さらに一つを自由に選択して、事業アイディアを考える。
例：「健康× AI ×旅行」→ AIを活用した健康的な旅行プラン生成サービス
十分間でビジネスアイディアをまとめ、個人またはチームで考案する。
一人二～三分でピッチ（発表）を行い、他の参加者がフィードバックを行う。

審査員チームを交代しながら三回実施する。

・一回目：A チームが審査、B チーム・C チームが発表
・二回目：B チームが審査、C チーム・A チームが発表
・三回目：C チームが審査、A チーム・B チームが発表

フィードバックのポイント
・アイディアの独自性
・市場の可能性
・実現性の高さ

5．雑談およびボードゲーム（16:00〜17:00）
イベントの最後に、自由な交流時間を設ける。気になったアイディアについて深掘りしたり、興味がある参加者同士で自由に話せる場を提供する。希望者は簡単なボードゲームを実施することも可能とする。
ボードゲームの例として、以下のようなものを用意する。
・ワードウルフ
・Dixit
・はぁって言うゲーム
・ルールが簡単で、初対面の参加者同士でも盛り上がりやすいものを選定する。

6．解散（17:00）
イベント終了時に、参加者の振り返りを促すため、締めの一言を設ける。
例：「次回やるならこのようなテーマがよい」「今日の話で印象に残ったこと」など

○5 月以降のイベントの開催の内容は上記と同様です。4 月に開いたイベントの反省を生かして修正を行うつもりです。日程に関しては基本、毎月第 2 土曜日か第 2 日曜日にやる予定です。

活動場所
基本的には筑波大学内の教室。
予約や規模感が合わない場合は下の施設で開催することを考えている。
・つくばスタートアップパーク
・C3LAB
・coen

活動期間
2025/04/01〜2025/09/30

対象
学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー
O：細井崚吾（理工学群社会工学類 1 年）、庄司悠太郎（理工学群社会工学類 2 年）
　水越拓真（理工学群社会工学類 2 年）、矢作恒太（情報学群情報科学類修士 1 年）
P：野村豪（国際産学連携本部　准教授）





活動報告

実際の活動内容

T-ACT の枠組みを通じて、筑波大学の学生を対象に、起業・事業づくりの「最初の一歩」を踏み出すためのイベント（ワークショップ／交流会）を企画・運営しました。具体的には、起業に興味はあるが一歩目が踏み出せていない学生（「何をやりたいか／なぜ起業したいかが言語化できない」「仲間・メンターがいない」「学生で信用力が弱い」等の壁を感じている層）を主対象に設定し、アイデアの言語化と検証行動の着手をゴールにプログラムを設計しました。成果として、フックのイベントとして開いたボドゲイベントは多くの方に集まっていただけて楽しかったです。ただ、参加者が自分のテーマを言語化し、検証すべき論点と次アクションが整理された状態を作るまでを実行していただくまではできず、改善余地が残りました。そのため、目標達成度は70% と評価しています。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒70％

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

イベントに参加してくださる学生と、イベントに協力してくださる方を集めること。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

インスタ等の SNS と自分自身の知り合いづてで集めた。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

企画を「思いつき」ではなく「実行可能なプロジェクト」に落とし込む難しさと面白さを強く実感した経験でした。特に、良い企画であっても、価値が伝わらなければ人は集まらないこと、逆に、誰に何を届けるイベントなのかが明確になると協力が集まりやすくなることを学びました。

また、運営側としては、当日の進行だけでなく、事前の準備（役割分担、タイムテーブル、告知導線、参加者の期待値調整）が成果の大半を決めることを体感しました。次回は集客・協力獲得を「個人の頑張り」ではなく「仕組み」で回す設計（テンプレ化、継続導線、紹介制度等）に改善したいと考えています。

参加者への影響

参加者からは、アイデアが整理できたこと、次に何をすべきかが具体化されたこと、同じ温度感の仲間に出会えたことが大きな変化として見られました。特に、これまで「やりたい気持ちはあるが動けない」状態だった人が、仮説と検証タスクに落とし込めたことで、イベント後にヒアリングや調査などの行動に移りやすくなった点は成果でした。

運営に関わったメンバーにとっても、イベント設計・広報・当日運営を通して、企画推進力やチーム連携の重要性を学ぶ機会になりました。一方で、イベント単発だと熱量が落ちやすいため、今後は参加後のフォロー（進捗共有、相談会、メンター接続）の導線を強化し、継続的な行動変容につなげたいです。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

集客や協力者集めは、最後の「告知」で頑張るのではなく、企画設計の段階で 8 割決まります。

具体的には、①対象者を絞る（誰のためのイベントか）、②参加者の持ち帰りを明文化する（成果物・変化）、③協力者側のメリットも言語化する（関わる理由を作る）、④申込〜当日までの導線を短く分かりやすくする、⑤紹介を生みやすい設計（テンプレ・一言で説明できる企画名）を作る、の 5 点が重要だと感じました。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

良かった点は、学内で活動する上での「信頼性」と「つながり」を得られたことです。学生団体単体では接点を作りづらい相手にも、TACT を通すことで相談や連携が進めやすくなり、活動を前に進める後押しになりました。また、学内でイベントを実施する際の基盤（情報の集約、周知、関係者への接続）として有効でした。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒5

Science Cafe in English 英語でサイエンスカフェ（25004P）

T-ACT プランナー　芝田　圭子（アドミッションセンター／一般職）

活動目的

一昨年、T-ACT を通じて、(一財)茨城県科学技術振興財団つくばサイエンスツアーオフィスとつくばまちなかデザイン㈱のサイエンスカフェに応募し、成功を収めた。科学は国と国との架け橋となり、紛争をしている国同士の研究者が協力し合うこともある…国際交流の手段としてサイエンスをテーマにすることで、誰もが安心して参加できる場所を作れるのではないか、と思いサイエンスカフェの企画を思い立った。

前回同様、(一財)茨城県科学技術振興財団つくばサイエンスツアーオフィスとつくばまちなかデザイン㈱のサイエンスカフェに応募し、さらに企画をブラッシュアップしていきたい。

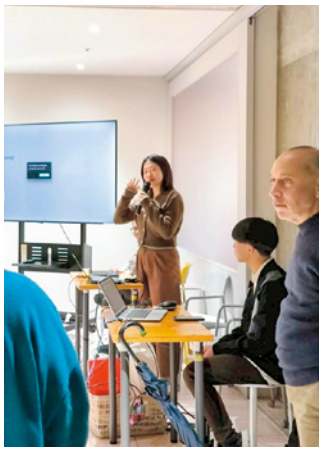


具体的な活動計画

英語でサイエンスカフェ（Science Café in English）と題し、一般の人々にも分かりやすい、サイエンスに関する気軽な話題を提供してもらいながら、つくば在住・在勤・在学等の国際人材に交流する機会を設ける。

筑波大学博士課程の学生及び修了した元留学生をプレゼンターに迎え、国際人材、特に研究者を目指す若い世代にキャリアパスをイメージしてもらう。

Under the theme “Science Café in English,” we will welcome current doctoral students and former international students who have completed their Ph.D. at the University of Tsukuba as presenters, aiming to help young peopleaspiring to become global talents—especially researchers—envision their career paths.



【活動概要】
・開催日：12月24日（水）
・開催時間：19:00～20:00

【プログラム / Program】
19:00　Opening Introduction
19:05　Hidar’s Presentation “研究者への扉を開いて” & Q&A
　　Reasons for Becoming a Researcher
● Improving Language Skills for Studying Abroad
● Life in Graduate School
● Essential Skills for Living Overseas
● Advice for Students Aiming for Global Careers
　(Interactive session with facilitator and participants)
19:25　Qianai’s Presentation “Why UT”
19:35　Presentation : “Imagine the Future – Introduction of UT” (No Q&A) by Keiko Shibata
19:45　Free Discussion, Feedback
19:55　Group Photos
20:00　Close the Event
～ After Party ～

【スピーカー・トピック内容】
タイトル／ Title:
　Science Café in English: Open the Door to the Future
　英語でサイエンスカフェ～世界へ飛び出せ！研究人材のキャリアパス～
　登壇者 / Speakers:
●ハイダル・ラフィド・アジス（HAIDAR Rafid Azis）
　国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構（農研機構）　作物研究部門　作物デザイン研究領域　作物遺伝子機能評価グループ　研究員
　Postdoctoral Researcher at Crop Gene Function Evaluation Group, Crop Design Research Division, Crop Science Department, National Agriculture and Food Research Organization (NARO)

●銭 青茵（セン セイイン）（Qingyin QIAN）
国立大学法人筑波大学　人間総合科学学術院人間総合科学研究群　ヒューマンバイオロジー学位プログラム
博士課程５年
PhD student in Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba（UT）
●芝田圭子（Keiko SHIBATA）
国立大学法人筑波大学アドミッションセンター
Admission Center, University of Tsukuba（UT）

【ファシリテーター／ Facilitator】
コスモシーポ株式会社　CEO　ランドバーグ・ブライアン（Brian Landberg）氏

【使用言語】
英語（日本語サポートあり）
主催／ Organizers:
●一般財団法人茨城県医学技術振興財団 つくばサイエンスツアーオフィス
Tsukuba Science Tour Office, The Science and Technology Promotion General Incorporation Foundation of Ibaraki
●つくばまちなかデザイン株式会社
Tsukuba Machinaka Design Co., Ltd.
提供／ Notes:
●茶菓の提供あり（運営側）
Light refreshments provided by organizers

【スケジュール】
10月：茨城県科学技術振興財団サイエンスツアーオフィスのサイエンスカフェの企画申請、T-ACT プランの企画申請
11月：トピック決定、開催準備
12月：開催
１月：振り返り、報告書作





活動場所
・開催場所：co-en（つくばセンタービル１階）
co-en, 1st floor, Tsukuba Center Building
・開催形式：YouTube 配信によるハイブリッド開催
Live streaming on YouTube available

活動期間
2025/10/01～2025/12/31

対象
学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー
O：内田明空（人文文化学群比較文化学類３年）
Shafa Gendis Nurasty（Graduate School of Comprehensive Human Sciences, Master's Program of Public Health 修士１年）

備考
【T-ACT Forum】Science Cafe in English / 英語でサイエンスカフェの開催について
（Japanese follows English / 日本語は英語につづく）
Announcement: Science Cafe Collaborated by Research Institutions in Tsukuba
・Title: Science Café in English: Open the Door to the Future（T-ACT Forum, University of Tsukuba）
・Venue: co-en
Tsukuba Center Building 1F, 1-10-1 Azuma, Tsukuba
（Approximately 3 minutes walk from Exit A3 of TX Tsukuba Station）
Access: https://co-en.space/access/

・Dates: Wednesday, December 24, 2025
・Time: 7:00 PM – 8:00 PM
・Capacity: Approx. 30 people (no reservation required)
・Admission: Free (includes coffee, tea, soft drinks, and snacks)
・Speakers:
① HAIDAR Rafid Azis,
Postdoctoral Researcher at Crop Gene Function Evaluation Group, Crop Design Research Division, Crop Science Department, National Agriculture and Food Research Organization (NARO) ; Ph.D., University of Tsukuba
② Qingyin QIAN
PhD student in Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba (UT)

・etc.
Facilitator: Brian Landberg, CEO, Kosmoŝipo k.k.
https://www.kosmosipo.com/
Hybrid event + YouTube Live (no archive)

If you are unable to come to the venue, you can join online via the link below.
Watch live here:
https://www.youtube.com/live/gTNfQLRlmfo

Organizers:
Tsukuba Science Tour Office, Science and Technology Promotion General Incorporated Foundation of Ibaraki
Tsukuba Machinaka Design Inc.
For further details and contact: T-ACT Forum
https://www.t-act.tsukuba.ac.jp/project/view/?seq=852
University of Tsukuba Official Site
https://www.tsukuba.ac.jp/en/events/index.html

つくば市内の研究機関がコラボする「水夜サイエンスカフェ」から、T-ACT Forum「英語でサイエンスカフェ」のお知らせです。

【概要】
・タイトル：英語でサイエンスカフェ～世界へ飛び出せ！研究人材のキャリアパス～（筑波大学 T-ACT Forum）
・開催日：2025年12月24日（水）19:00～20:00
・会　場：co-en（つくばセンタービル 1 階）
・使用言語：英語（日本語サポートあり）
・定　員：30名程度（予約不要）
・参加費：無料（コーヒー、紅茶等ソフトドリンクとスナック付き）
・登壇者：
①ハイダル・ラフィド・アジス
国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構（農研機構）作物研究部門　作物デザイン研究領域 作物遺伝子機能評価グループ　研究員（本学博士課程修了）
②銭 青茵（センセイイン）
筑波大学 人間総合科学学術院人間総合科学研究群 ヒューマンバイオロジー学位プログラム　博士課程 5 年

・他
本イベントは会場に来られない方のために、YouTube による Live 配信も実施予定です
＜イベント詳細・視聴は以下ページより＞
https://www.i-step.org/tour/news/news_i1034_u1.html
※リアルタイム配信のみ
詳細及び問合せ先：T-ACT 推進室ウェブサイト
https://www.t-act.tsukuba.ac.jp/project/view/?seq=852
筑波大学基幹サイト
https://www.tsukuba.ac.jp/en/events/index.html

・主催者
一般財団法人茨城県科学技術振興財団つくばサイエンスツアーオフィス
つくばまちなかデザイン株式会社

活動報告

実際の活動内容

【事前準備】

和英併記の企画書を作成し、主催者・登壇者とメールで事前準備を進めた。
リハーサルや事前打合せの設定はなかったが、主催者側に要望し、スピーカーに登壇イメージを持ってもらうために事前の下見を行った。

広報局に校章入りグッズを申請し、大学基幹サイトの学外者も参加できるイベント開催案内への掲載を依頼した。

【本番当日】

ファシリテーターとスピーカーも含めた顔合せは開催 1 時間前。
一般財団法人茨城県科学技術振興財団つくばサイエンスツアーオフィスによる YouTube 配信準備と設営のサポートがあった。
設営の際は、参加者同士もコミュニケーションが取れるように、テーブル・椅子を配置。つくばまちなかデザイン株式会社からは、茶菓の提供があった。

20分前開場、参加者の誘導を行った。サイエンスツアーオフィスによる YouTube 配信が行われる中、本学出身の研究者と博士課程の学生が登壇し、研究者を目指すようになった課程や海外で学ぶにあたって、どのように語学能力を向上させたか、国際人材となるにあたってのアドバイスを共有した。積極的な質問やコメントを行った参加者には本学ノベルティを渡すことで議論を盛り上げる工夫をした。

終了後、参加者間の交流を促すため、二次会を行った。準備から開催、終了時間まで、進行は事前に設定されたタイムライン通りであった。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒80％

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

主催者による YouTube 配信の接続がうまくいかず、オンライン参加者から内容が聞き取れないという声があった。年末のクリスマスシーズンという 1 年で最もイベントが多い時期の開催であったため、集客が危ぶまれた。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

事前に主催者・ファシリテーターへ確認を行い、別途動画撮影と SNS での生配信を実施した。その結果、当日視聴できなかった方にも動画を提供することができた。

また、広報局へのイベント開催案内の掲載依頼や、T-ACT への X での周知依頼を行うとともに、個別集客にも取り組んだ結果、会場内の各テーブルを埋めることができた。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

前回企画した時からの課題でもあるが、こちらが設定したターゲットと参加者に隔たりがあった。前回は主に外国人をターゲットに、日本語が苦手でも英語をメインにすることで、研究者との交流が促進できればと企画したが、実際には外国人を含めて英語が苦手な参加者も多く、日本語での説明が欲しいとの声があった。今回は、国際人材を目指す学生等、若い世代をターゲットに定め、一般の参加者も理解しやすいよう、日本語のサポートをつけたが、実際には英語が堪能な社会人等シニア層の参加が多かった。関係者の都合やほかの企画との調整もあり、若者やファミリーにとって、他に楽しいイベントがたくさんある、クリスマスシーズンの開催になってしまったため、仕方がない側面もあったと思う。

参加者同士の交流ができるよう、合間に休憩時間を設け、自己紹介や自由な会話を促したが、思うように参加者が動かなかった。各テーブルにスタッフ対応ができそうな旧知の参加者を即席で配置して、ファシリテーションをお願いしたが、今回はイベント慣れしている人がおらず、事前にミーティングする余裕もなかったので、いささか無理があったと思う。

ターゲットを、学内・学外一般（誰でも参加可能）としていたが、学内からの参加者は少なかった。クリスマ

スイブという、他にもイベントが多い日程のわりには善戦したと思う。
　スピーカーの内、1 名は本学出身のポスドク研究員、1 名は大学院生だった。今回、市民の前で自身の経験を共有し、好意的な反応を体感することができ、彼らにとっても良い経験となったと思う。
　英語でサイエンスカフェの広報活動の結果、水夜サイエンスカフェに新たな参加者を増やすことができた。この試みを継続し、サイエンスシティつくばで、一種の化学反応を起こすことができればと思う。
　年度末に向けて、忙しい時期でもあり、内容の詰めや集客等、圧倒的に準備不足ではあった。とはいえ、クリスマスイブという、同イベント内で最も集客が難しい日程でありながら、20名の参加者を集めることができたことは、大いに善戦したといえる。質疑応答も活発であり、参加者は笑顔で楽しんでくれていたので、開催できてよかったと思う。今後も、このような企画をできる限り継続し、ブラッシュアップしていきたい。

参加者への影響
　当日、現地参加は16名、オンラインでは、視聴回数73回、最大同時視聴者数が11名だった。

参加者からは好意的な評価があった。アンケート結果の一部を公表したい。
〇大変勉強になりました。
　発表者の方々の歩んでこられた人生から勉強になりました。
〇 It was a Great night. I love English night.
〇留学生のプレゼンが聞ける機会は中々ないので非常に貴重で有意義でした。
　できればプレゼンする生徒の簡単なプロフィール（フルネームは不要）と発表内容の簡単なあらましなどがほしいです。
〇研究者や博士課程の学生さんたちの生き生きした発表が聞けてうれしかった。
　ただ観客の挙動不審な方がいたのが気になり後半は発表に集中できなかった。
〇昨日の Youtube 配信につきまして、開始10分後くらいから配信上のマイクの音声が途切れはじめ、その後はマイクが切れてしまい会場の小さな音声しか　聞こえない状態（登壇者のお声もほとんど聞くことが難しい状態でした）となってしまっておりました。私の端末の問題であったら大変申し訳ないのですが、ご確認いただけますと幸いです。サイエンスカフェの取り組みすばらしいと思います！またぜひ参加させていただきたいです。応援しています。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ
　自らの企画を実現する前に、学内外のほかの企画に一般の参加者やボランティアとして参加してみると良い。企画者側からは必死すぎて見えていない部分も、様々な角度から客観的に観察することで、自身が企画する際の参考にできるはずだ。また、様々な企画に参加することで、自分が企画を実現する際に協力・相談できる人脈も自然に構築できると思う。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください
　つくば市内に数ある研究教育機関がコラボする水曜サイエンスカフェは、基本的に組織として参加している企画ばかりの中で、所属先組織の業務外で個人で応募するのは本企画のみ。筑波大学 T-ACT として参加できたことは、広報局に基幹サイトのイベントに掲載依頼する時もスムーズであったと思う。T-ACT の X での発信も依頼することができた。T-ACT のページに掲載されていることで、授業に参加している学生からの反応もあり、利用して良かったと思う。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒4





「いつか」に備える今　―自分のカラダに向き合う第一歩―（25005A）

T-ACT プランナー　大久保　佳穂（看護科学学位プログラム博士前期課程1年）

活動目的

【目標】

セミナーを通してヘルスリテラシーを身につけ、人生の選択に役立てることを目的とします。

【目的】

プレコンセプションケアとは、男女問わず誰もが若いうちから性や妊娠に関する正しい知識を身に付け、自分たちの生活や健康に向き合うことです。

例えば、栄養や生活、生理周期、ワクチン接種、不適切な体重、妊娠のしやすさ、薬の影響、心の状態について理解し、自分の描くライフプランの実現につなげていきます。

本セミナーでは生殖に関するヘルスリテラシーについて取り上げ、主に将来の妊孕性に関連する健康問題についての説明を行います。現在問題となっている女性のやせや月経に伴う課題、男性の不妊に関する認識、高齢出産について取り上げます。

先進諸国と比較して、日本では生殖に関連する健康についての知識や情報を、正しく理解・活用する力（ヘルスリテラシー）が十分に浸透していないのが現状です。男性が関与する不妊は約半数を占めています。しかし、これはあまり周知されておらず、不妊の原因は女性であるという認識を持つ人が多いのが現状です。また、出産年齢の上昇の影響により、40代であっても問題なく子どもを授かれると考えている人が多く見受けられます。さらに、若い女性をとりまく健康問題が課題となっています。月経の症状の裏には、子宮内膜症などの不妊の原因となる疾患が隠れている場合がありますが、約半数の女性は月経に伴う症状の対処を行っていません。また、不妊の原因の一つでもあるやせに関して、20代女 性の約５人に１人がやせ（BMI18.5未満）というデータが出ています。このように、若い世代でも将来の妊娠の可能性に関連する重要な知識やセルフケアが不足している現状があると考えられます。

受講者の皆さんが将来の妊娠の希望の有無にかかわらず、大学生のうちからできる健康管理に関する意識が高まることを目的とし、このセミナーを実施します。多くの人が学生のうちからヘルスリテラシーを身につけて自身の身体と向き合うことで、自分の人生の選択に役立てることが出来るようになるために、ぜひ多くの方に知っていただきたいです。

セミナー対象者は、性別、年齢問わずどなたでも大歓迎です。たくさんのご参加心よりお待ちしています。

具体的な活動計画

プレコンセプションケアをテーマに、セミナーを開催いたします。

・開催日時：７月９日（水）17:00～18:00予定
・場所：オンライン（Zoom 予定）
・対象者：性別・年齢問わずどなたでも参加可能
・内容：セミナー当日の流れ
　①挨拶（１分）
　②プレコンセプションケアとは（５分）
　③妊孕性って何？（５分）
　④男性にも不妊があるの？（７分）
　⑤年齢が上がるほど妊娠しにくくなるの？（10分）
　⑥若い女性を取り巻く課題（月経・やせ）(12分)
　⑦妊孕性を保つためにできること（15分）
　⑧まとめ（３分）
　⑨アンケート（５分）　計60分

・当日までのスケジュール
　４月22日～　授業内、自己学習にて知識の習得
　５月15日～　企画内容考案・申請書提出
　　企画内容確認
　　承認され次第　広報活動（ポスター、SNS での周知）
　７月９日　　セミナー開催
　７月10日～　セミナー終了後に振り返り、アンケート実施、報告書作成

本セミナー内容は、岡山久代教授（医学医療系）の指導のもと、看護科学学位プログラム博士前期課程 春AB 開設科目「リプロダクティブ・ヘルス支援論」の授業にて作成いたしました。

活動場所
オンライン

活動期間
2025/05/01～2025/08/31

対象
学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー
O：ムーア香乃子ジョセフィン、前原歌、南部睦美（人間総合科学学術院 人間総合科学研究群 看護科学学位プログラム博士前期課程 1 年）
P：岡山久代（医学医療系）

活動報告

実際の活動内容

本活動では、プレコンセプションケアをテーマとしたオンラインセミナーを企画・実施し、参加者の皆さんが生殖に関する正しい知識を身につけ、将来のライフプランや日々の健康管理に役立てていただくことを目的として取り組みました。

1．事前準備・学習

4 月22日以降、授業内での学習や自己学習を通して、プレコンセプションケアや生殖に関する健康、妊孕性、不妊、月経に伴う健康課題などについて知識の習得を行いました。

また、日本と先進諸国における生殖に関する健康意識やヘルスリテラシーの現状についても学び、大学生を含む若い世代にとってどのような情報提供が必要かを検討しました。

2．企画立案・申請

5 月15日より、セミナーの目的や対象者、内容構成について具体的な検討を行い、企画内容をまとめて申請書を作成・提出しました。

セミナーでは、プレコンセプションケアの基本的な考え方に加え、妊孕性、男性不妊、年齢と妊娠の関係、若い女性を取り巻く課題（月経ややせ）など、将来の妊娠の希望の有無にかかわらず、誰もが知っておきたい内容を中心に構成しました。

企画内容の確認・承認後、セミナー実施に向けた準備を進めました。

3．広報活動

企画承認後は、より多くの方に参加していただけるよう、ポスターの作成や SNS を活用した広報活動を行いました。

性別や年齢を問わず参加できること、将来の妊娠の希望にかかわらず役立つ内容であることを意識し、分かりやすい周知を心がけました。

4．セミナーの実施

7 月 9 日（水）17時から18時まで、Zoom を用いたオンラインセミナーを開催しました。

当日は、挨拶から始まり、プレコンセプションケアの概要、妊孕性の基本的な考え方、男性不妊に関する認識、年齢と妊娠の関係、若い女性を取り巻く健康課題（月経症状ややせ）、妊孕性を保つために日常生活でできることについて順に説明しました。

参加者の皆さんがご自身の生活や将来を振り返りながら考えられるよう、具体例を交えながら進行しました。最後に内容のまとめを行い、アンケートへの回答をお願いしました。

5．事後の振り返り

セミナー終了後にはアンケートを実施し、内容の理解度や満足度、今後の健康に対する意識の変化について把握しました。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒100％

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

・参加者の募集が困難だったこと
・男性参加者も積極的に募集していたが、女性参加者のみだったこと

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

大学内の各エリアの掲示板にポスターを設置したこと、LINE グループで宣伝すること、先生にも協力していただき、授業などで紹介していただいたことは効果があり、目標参加者人数を概ね達成することができました。男女両方の参加者に対する内容で用意していましたが、宣伝の時点で男性が参加したいと思うような工夫をするべきであったと感じています。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

本セミナーの企画・運営は、私自身にとってプレコンセプションケアを「伝える立場」として深く向き合う貴重な体験でした。内容を検討する過程で、医学的知識や社会的背景を改めて学び直したことにより、自分自身の健康観やライフプランについても見つめ直す機会となりました。

参加者への影響

参加者からは「普段の生活の中で触れることがないプレコンセプションについて知ることができた」「今の生活習慣が将来に影響することを知った」などの声が多く聞かれました。本セミナーを通じて参加者が将来のライフプランや健康管理について考える第一歩を踏み出すことができたのではないかと感じています。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

「やってみたい」という思いを実現する過程では、大変だと感じる場面もありましたが、共に活動するメンバーや先生方に加え、T-ACT のスタッフのみなさまに相談できたことで、よりよい企画にすることができたと感じています。

また、T-ACT を通して企画を実施したことで、多様なバックグラウンドを持つ方々に広く周知することができ、結果として多くの方に企画へ参加していただけたと思います。

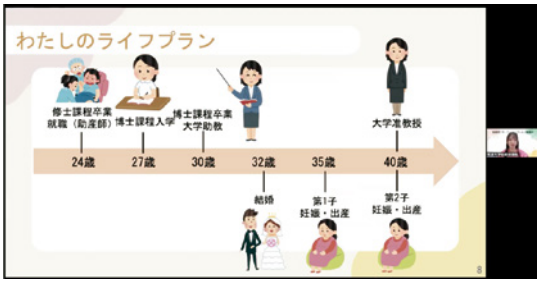
何かに挑戦してみたいと感じている方は、ぜひ T-ACT を活用しながら、一歩踏み出してみてください。

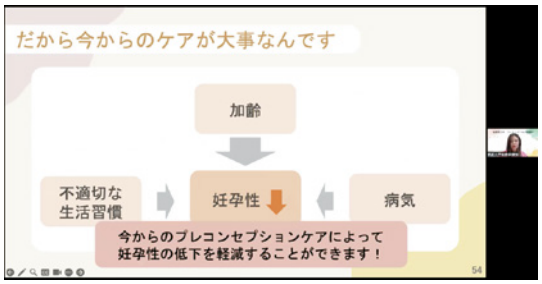
T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

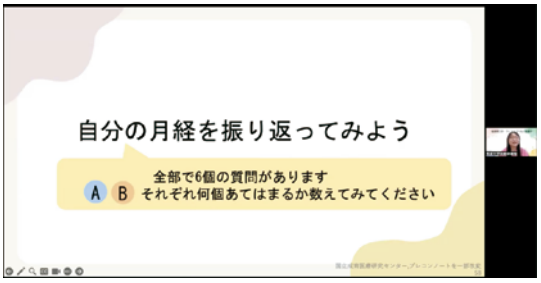
T-ACT を利用させていただいたことで、様々な方にプレコンセプションケアについて知っていただけたと思います。限られた時間の中で広報をする必要がありましたが、ポスターの印刷や掲示についてお手伝いいただいたことで、企画が実現したと感じています。ありがとうございました。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒5











学生交流スペース「ARATA」の設置（25006A）

T-ACT プランナー　佐藤　翔哉（物理学位プログラム修士課程2年）

活動目的

【背景・全体構想】

1．模擬会社構想

筑波大学では、T-ACT をはじめとして、学生のやってみたいことを支援する取り組みが行われてきた。しかし、今年度より新たに「起業家人材」の育成を見据え、支援をされて行う段階の次ステップである、「自分で持続的に成し遂げる」段階の受け皿が必要とされた。それが「模擬会社」である。模擬会社のコンセプトは、「責任は大学、主体は学生」である。T-ACT のように手厚い支援からなる単発企画を通じて、今度は長期的に学生主体で事業を行い、起業家人材に繋げていくという考えである。

※起業家人材：会社を起こすのに必要な主体性・発想力・社会的能力・技術などを身に付けている状態であると解釈する。個人としては、主体性に重きを置きたい。



しかし、この模擬会社構想も中々うまく進まない。前提として、「やってみたい」のある人材が少なく、それらを創出する環境も薄いのだ。私たちは模擬会社構想のために、人材の確保を実践したが乗じる学生はほとんど居なかった。ここで、まずは学生が自らの発想や企画の創出を刺激し、具現化していく「環境づくり」から始めることが重要であることを考えた。

2．弊学の環境

筑波大学の特色として、自由で開かれ、かつ孤立した環境であるといえる。学生が好きなことをできる空間である観点から、これまでの社会にあった自由で伸び伸びとした学生生活を送ることができる良い環境であった。しかし、「模擬会社」人材を創出するためには、向社会性や主体性が少ない状況である。例えば、以下の事例から推察できる。

①脱コロナ禍が遅れ、個人主義が引き継がれている。

コロナ禍と昨今の世論の動きによって、弊学の学生のコミュニティは閉鎖的となっている。自身の生活や特定の小さなコミュニティに閉じこもり、コミュニティ内でも現状維持が美徳化されることも少なくない。特に、学生組織の現状から見られるように、学生同士又は学生と大学が共創して大学社会の価値向上を行う動きは少ないだろう。これらは、コロナ禍によって「学生同士の交流の仕方」が引き継がれず、コロナ禍によって定着した個人主義が受け継がれている背景がある（企画の仕方や遊び方が分からないともいえる）。

②新たな仲間を見つけにくい環境である

都内の大学と比較すると、大学外からの刺激や新たな出会いが生み出されることは少なく、閉鎖的だ。人は、人によって新たな人に繋がれるものであるが、弊学には雑多に学生同士がコミュニケーションをとることができる環境は少なく、それに準じたイベントも多くはない（もしくは、拡散力が不足している）。結果的に、自分の秘めた思いや才能をぶつける「仲間」と出会えず、新たな学生企画をつくれない又は不完全燃焼な企画中断に至っている。さらには、学生の慢性的な問題である、「後継者」探しがかなり難しい。

これらを簡単にいえば、弊学は「刺激が少ない（少なくなった）」のかもしれない。

よって、学生がより社会や異なる学生と多くつながりを持ち、社会や自分の役割を自覚し、Well-being な状態を目指していくことのできる環境を整備したいというものが我々のモチベーションである。

また、本学は国際色に富み、多くの留学生が在籍するメリットを生かし、新しい環境をもって留学生と日本学生の距離を近づけることで、双方 に新たな刺激を生み出すことも可能である。

以上の背景を受けて、学生同士が新たな「仲間」を見つけ、学生らの総体として企画を創り上げることができる交流環境「ARATA」の立ち上げを企画する。

3．新しい環境としての「ARATA」

本企画では、前述した社会と学生を刺激的に交差させ、「模擬会社」の出発点となる環境を創り上げる。この交流スペース ARATA を起点として、模擬会社を波及させていく考えである。

このスペースのコンセプトは、「店内のどこでも活気のあるコミュニケーションが行われ、その中から生まれる「ARATA（出会い、価値観、アイデアなど）」を利用者に提供又は利用者同士が共有すると共に、その活気を学内、学外へ波及する」というところにある。学生の中にある、小さな Seeds（種）を交流によって引き出し、模擬会社の舞台へと押し上げる。

※この企画は、模擬会社構想の一環として筑波大学学生部のご支援をいただいて実施する。

【目的・最終目標】

本企画の最終目標は、学生交流スペースをもとに起業し、長期的な学生運営スペースを設立することである。飲食提供やイベント運営を行 い、様々な学生が毎日集うことで、現状のままでは会うことのなかった学生同士を結び付ける。そして、筑波大学学生の多様な交流の促進や主体的行動力と創造力を刺激し、毎日のように企画やイベントで溢れ、模擬会社の立ち上げに繋がる空間とする。

この最終目標に到達するために以下の５ステップに段階を分ける。本企画はその ２、３ステップ目である。
１．学生交流スペース設立の準備（2025.2～2025.4）
２．プレイベントの実施（2025.4～2025.6）
３．飲食提供とイベントの定期開催（2025.6～2025.7）
４．法人化の準備をし、模擬会社の中心地とする（2025.8～2025.10）
５．起業し、長期的な運営の軌道に乗せる（2025.11～2026.1）

今回の企画では、「ARATA」の恒常的な稼働を目指す第一歩目のオープンイベントとそれに伴う広報活動の実施を目的とし、３段階目のイベント定期開催に繋げる。また、並行して「ARATA」での飲食提供の準備を行い、実際に飲食を伴う企画実施を目指す。

具体的な活動計画

【事業内容】

「学生の交流スペース「ARATA」におけるイベントの開催」

【ビジョン】

「ARATA」におけるイベントの定期開催に向けたオープンイベントを行い、「ARATA」オープンのリーチを行う。また、オープンイベントを通じて新たな企画を行う学生を募集し、「ARATA」におけるイベントの定期開催を目指す。

【目標設定】

・ドリンクの有償提供
・６月～7 月におけるイベント数が３つ以上。

【前回の企画の振り返り】

●目標達成度

前回の企画では、場所の確保から整備、そして運営・企画人員の確保のための広報が主な目的であった。しかし、場所の確保に関しては現状でもまだ確定がされておらず備品配置ができていない状況である。また、運営・企画人員の確保に関しては、SNS 上で大きく広報するには至らなかったものの、T-ACT を通じて新たな構成員１名と企画協力団体を３団体確保した。こちらに関しては十分な成果だと考える。

●目標に達しなかった事項の要因

場所の確保に遅れが生じた理由は、現体芸食堂の契約業者の契約状況を正しく把握できておらず、利用場所の確定が出来なかった点にある。しかし、こちらに関しては学生生活課と相談し、階層を移すことで解決に至っている。

また、大きな人員を募集する広報が出来なかった点については、ARATA において行うイベントやコンセプトの決定が、場所の決定の遅れにより確定できなかった点にある。また、運営人員ではなく企画実施団体の募集と調整に時間をかけてしまったため、運営人員のリーチを上げることができなかった。
しかし、企画実施団体を十分確保することで、今後の運営人員の広報を行いやすくなった点ではよかっただろう。

【本企画の事業内容】

前述した Step2 と Step3 の内容を実施する。具体的には、
①イベントの実施
②イベント中における飲食提供の開始
③次回イベント（７月）の募集
である。



①イベントの実施

本企画においては、6 月に以下の 2 つのイベントを計画している。この 2 つのイベントをオープンイベントとして実施予定である。イベント日におけるイベントは、企画募集を行い、企画の実施を希望する学生や学生団体に基づいて共同運営を行う。なお、未定であるが 7 月にも最低 1 企画の実施は予定する。（新規企画者が居なければ以下の 2 団体が 7 月に同じ内容のイベントを開催する）

〈共通事項〉

○募集：

参加者の募集は事前に GoogleForm にて受け付ける。Form では、

・どのような事柄に興味・関心があるのか

・何で企画を知ったか

・参加したきかっけ

・参加者の属性（年齢、学類）

などを調査し、大体の参加者の傾向を掴むことで準備に活かす。

〈時間〉

平日の18:30～21:00の間にてイベントを行う。

○企画内容：

企画内容は、企画を共同で実施する団体の協力の下で考える。企画団体のイベントを通じて、いかに「新しい価値や人との出会いがあるか」「新しい事業創出につながるか」を観点において企画協力団体と内容を調節する。

〈具体的企画〉

A. 起業家交流カフェ～ボードゲームからつながろう～

○日時：

6 月16日（月）18:30～（時間変更の可能性あり）

○企画協力団体：

企業サークル「STARTiX」、株式会社ガイアックス（予定）

○企画内容：

自分の紹介やビジネス創出ゲーム、ボードゲームを通じて、起業家との直接的な交流を行い、新たな価値観を得るとともに、学生が起業へ前進してもらう機会とする。

※本企画は、既に T-ACT にて活動を行っている STARTiX と連携して行う企画であり、企画内容は STARTiX 企画と重複する。

○当日の流れ：

1．フリートーク＆ドリンク提供（18:30～）

2．オープニング（18:40～）

3．アイスブレイク＆自己紹介（18:50～）

→アイスブレイクには、自己紹介をはじめ、話題サイコロや自己紹介カードを用いる。

4．ゲーム企画（19:10～20:10）

→キーワード組み合わせビジネス創出ゲーム

→ボードゲーム（ワードウルフ、はぁっていうゲーム）

5．クロージング

「次にやってみたいこと」「こういうものがあるといい」「どのくらいの頻度で参加したい」など、感想をいただく。ここで、「ARATA」と「STARTiX」の宣伝を行う。

6. 片付け

B. 超・院生ひろば

○日時：

6 月下旬（未定）18:30～（時間変更の可能性あり）

○企画協力団体：

つくば院生ネットワーク

○対象：

主に大学院生（学群生も歓迎）

○企画内容：

大学院生の研究室外でのつながりを創出するため、4 ～ 6 人のテーブルグループにおいて、ホワイトボードを自由に駆使し、互いの共通点探しや自身の研究を伝える機会とする。また、特徴当てゲームを実施し、同じグループ内の仲間を深ぼるとともに、お互いの共通点を探す。

○当日の流れ：
1．フリートーク＆ドリンク（有償）、軽食（無償予定）提供（18:30～）
2．オープニング（18:40～）
3．アイスブレイク＆自己紹介（18:50～）
→アイスブレイクには、自己紹介をはじめ、話題サイコロや自己紹介カード、なんじゃもんじゃゲームなど初対面でも馴染みやすい簡単な発言促進ツール を用いる。
→自己紹介では、
・名前、所属、学年
・出身地エピソード
・No.1の趣味
・研究概要
などの項目を事前に用意し、ホワイトボードに記載してもらう。
4．特徴の書き出し（19:05～19:35）
→ ホワイトボードに書かれた内容を基に、質問や話題の拡張を行い、ホワイトボードに次々記載していく。
→出た質問に対し、全員が答えていき、各人の特色を貯めていく。
→細かく深掘るほど、細かい共通の特徴が見えてくる。
5．１番の共通点の設定とヒントの設定（19:35～19:50）
→グループの中で一番面白い or 一番しっくりくる共通点を探し、選定する。
この段階でお互いの特徴の深堀ができているほど、よりニッチな共通点を発掘できる。
→その後は、共通点のヒントを３つ用意する。
例）ホラー映画が好きという共通点
・映像　・怖い　・好き　など
6．特徴当てゲーム（19:50～）
→各グループが１つずつヒントを出し合い、他の全員で共通点を当てる。
7．クロージング（～20:30）
→各グループで連絡先交換やトークを行う。この場で、「ARATA」と「院生ネットワーク」の宣伝を行う。
8．片付け（～21:00）

C．ぼどげ会
○日時：
７月28日（月）18:30～
○企画協力団体：
企業サークル「STARTiX」、株式会社ガイアックス（予定）
○企画内容：
自分の紹介やビジネス創出ゲーム、ボードゲームを通じて、起業家との直接的な交流を行い、新たな価値観を得るとともに、学生が起業へ前進してもらう機会とする。
※本企画は、既に T-ACT にて活動を行っている STARTiX と連携して行う企画であり、企画内容は STARTiX 企画と重複する。
○当日の流れ：
1．フリートーク＆ドリンク提供（18:30～）
2．オープニング（19:00～）
3．ボードゲームセッション（19:10～）
→ボードゲームを通じて交流を深めます。
4．交流会・ネットワーキング（19:50～20:30）
→ボードゲームの後は軽食をとりながら、自由に交流を深めつながりを作ります。
5．クロージング
「次にやってみたいこと」「こういうものがあるといい」「どのくらいの頻度で参加したい」など、感想をいただく。ここで、「ARATA」と「STARTiX」の宣伝を行う。
6．片付け



イベント中における飲食物の提供

〈提供物〉

○飲料：

飲料は、有償提供を行う予定である。

・コーヒー（250円）（180ml）

・ソフトドリンク（150円）（300ml）

として学生が買いやすいかつ、十分な量を提供する。

コーヒーは、3年以上珈琲サークルにおいて十分なドリップ技術をもつ弊構成員の2人がハンドドリップにおいて提供する。雙峰祭などでの出店経験が4年ある。ソフトドリンクはアイスのみとし、グラスにて提供する。

○軽食：

軽食は、持ち寄った既製品を提供する予定である。

○準備：

a. 食品衛生責任者の取得

弊企画構成員から衛生管理責任者を1名取得する。

b. 腸内細菌検査の実施

弊企画構成員の上記検査を行う。

c. 保健所への申請

飲食物の提供に係る申請を保健所へ行う。

②次回イベント（7月以降）の募集

イベント中における告知や、イベントの様子をSNSにて広報し、次回の企画者を募集・選定する。

【事業準備・計画】

●5月

〈開店準備〉前企画書から持ち越し

○店舗レイアウト：

→レイアウトデザインから、店舗の座席配置や構成を決定する。

○設備準備：

→備品の手配・搬入を行う。また、内装装飾を施す。

○飲食準備：

→飲食物のメニュー・衛生管理指針など飲食フローを統一する。

○運営マニュアル：

→店舗ルールの策定、運営マニュアルを固める。

○会計・人事システムの構築：

→会計方法やイベント運営にかかるシフト組みを作成する。

〈「ARATA」オープンの広報〉

SNSとT-ACTを通じて、「ARATA」企画の周知、関わる学生や学生団体の募集を行う。

〈イベントの打ち合わせ〉

1．イベント団体との打ち合わせ

→現在お声をいただいている学生や団体との打ち合わせを加速し、6月～7月にプレイベントを含めた「ARATA」のオープンを目標として準備を行う。

2．店舗レイアウト設計・備品手配

→店舗の全体レイアウトを策定し、備品購入と手配を行う。

〈飲食提供準備〉

飲食提供（開業申請を見越して）のための準備を進行。具体的に、以下のことを行う。

・衛生管理責任者の取得⇒完了

・腸内細菌検査の実施⇒完了

・保健所への飲食提供申請⇒継続実施中



●６月～7 月
〈イベントの開催〉
「ARATA」のオープンイベントと称して、前述の２つのイベントを開催する。
〈複数イベントの募集と開催〉
常時、イベント団体や学生の募集を行い、２週もしくは１週に一回のイベント開催を目指す。６月７月を合わせて最低合計３回の開催を目 指す。
〈飲食提供〉
飲食提供の申請を行い、有料での飲食提供を行う。



【事業戦略】
●広報戦略
・T-ACT を用いた広報
・学内におけるビラ配り、ポスター掲示
・ARATA、及び ARATA に関係する団体のハブを使い、全ての SNS で広報する体制を構築することでリーチ層を伸ばす。
・Instagram 広告を視野に入れる。

●利用促進戦略
・ARATA と企画者の事前打ち合わせにより、「次はこんなことをしてみたい」学生と連絡を繋げる。
・次回、友達を連れてくるとドリンクサービスの特典をつける。
・企画終了後にはアンケートと次回企画募集ポスターを配布し、人から人へ繋げる。

活動場所
体芸食堂

活動期間
2025/05/22～2025/07/31

対象
学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー
O：宮田青葉（人文学類４年）、石井誠（生物・資源学類４年）、川口颯太（比較文化学類３年）
P：小野健一（学生部学生生活課）

活動報告

実際の活動内容
使用されていなかった筑波大学体芸食堂の跡地を利用して、学生が交流・イベントを行うことのできる空間の構築を目指した。
実際の活動内容としては、まずは確実なイベント回数を増やすことで、交流スペースの基盤づくりをすることを目標に、令和７年度９月までにかけて５回のイベント誘致と開催を行った。
・6 月16日　ぼどげ会（イベント主催：企業サークル STARTiX,OntThing ～筑波大学エンジニアコミュニティ～）
・6 月18日　超・院生ひろば（イベント主催：つくば院生ネットワーク（TGN））
・7 月11日　LT 会（イベント主催：OntThing ～筑波大学エンジニアコミュニティ～）
・7 月28日　ぼどげ会 vol.2（イベント主催：企業サークル STARTiX,OntThing ～筑波大学エンジニアコミュニティ～）
・9 月26日　学術系情報交換会（イベント主催：iGEM TSUKUBA）

イベントの企画から開催の上流から下流まで、弊メンバーが会場設営・準備、企画の流れ、集客・広報、事務手続きなどのサポートを行った。
また、自主運営の学生交流カフェとするべく、体芸食堂の掃除とカフェ業としての開業手続きを行った。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒30％

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

T-ACT 団体が他の T-ACT 未承認の任意団体や任意の学生のイベントをサポートすることが、筑波大学学内における公認活動の基準に抵触することがあり、筑波大学にてイベントを行う学生団体の定義や方法が明確ではなかったこと。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

各団体のイベント事情を聞き、「どのような団体であれば学内で活動ができるか」まとめました。結論として、学内においては、学生の自主瞬発的・連続的な企画は、現状の制度では困難であることが分かりました。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

学生が筑波大学において自主・自由な発想に基づき、学生という「貴重で短い時間」を用いて自己を表現するには、学内の活動規則が不明瞭かつ厳しすぎると考えました。もちろん、学生の公平性や学生のリスクヘッジをする上では、規則というものは必要です。しかし、企画における手続きが煩雑であること、また代表教員が居れば比較的企画のハードルが下がること（教員の有無がかなりのウェイトを占めてしまうこと）により、学生の完全な「自主活動」というものは成り立たず、大学と教員によって半ば作られたものであるから、企業活動やその他の学生個人の個性と可能性に溢れる企画が学内の企業や共同利用スペースに流れているということが分かりました。

自分にとって大きかったものは、大学の規則の不明瞭な点と現行制度が学生の主体的な活動を推進する現行方針との不調和が表れていることの確信を持てたところにあります。そして、この経験を新しい大学事業に応用し、新しい大学の学生活動を実現する空間の策定にこぎつけることができました。学生と教職員の間で、学生の主体性を向上させ、時代に合った人材育成をするためにはどのようにすればよいのか、長年気づきつつも触ることのできていなかった課題に直接触れる機会を作ることができたのは大きな収穫でした。

また、学生の観点に戻すと、今回の事業を行って驚いた点は、多くの学生が自分のやりたいことを表現する場を求めていることです。ARATA の事業を始めてから10件以上の学生からイベント企画のお声がけがございました。それほど、学内で学生向けのイベントを行いたくてもできていなかった、やり方が分からなかった、そもそもそのような文化が無かったということの現れです。このことから、学内でイベントを行う拠点の絶対的必要性、そしてそこから生まれる人材の交差性や学びが多いのだと確信しました。

参加者への影響

一緒に運営したメンバーとしては、各メンバーが各自に営業をし、団体と並走して企画・実施を行うコンサルテイティブな形態をとっていたため、この ARATA という拠点の存在によって各人が自身のツテで営業を行い、企画としての社会還元まで実現する経験を積むことが出来たと思います。

さらに、今度は顧客だった学生が運営への企画照会や持ちかけをいただけるなど、関わった人の自己実現や社会還元意欲を刺激したのだと考えております。実際にこの ARATA で出会った学生と共に規模の大きな新しい大学事業を策定することとなりました。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

何事にも負けずに、自分の正しい・やりたいと思うことを実現するためにもがくことが大切だと思います。初めは中々企画が進まず、仲間も集まらず自分の行動に意味を見出せないこともあるかと思います。でも、自分が行った行動を必ずどこかで見てくれてる人が居て、その縁が繋がり大きくなります。諦めずに自分の道を見出してください。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

ビラの印刷や機材の借用ができること。

T-ACT によって大学公認の活動となり、学内での活動の閾値が下がったこと。



自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒2

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒2

Sustainability Week 2025（25007A）

T-ACT プランナー　星野　文香（国際総合学類4年）

活動目的



気候変動や生物多様性の減少などの危機を受け、世界では持続可能な環境に向けた取り組みが急がれている。その中で最新の研究の拠点であり、これからの社会を担う学生を育成する大学は重要な役割を持つ。筑波大学でも、Design The Future 機構で紹介されているように、様々な取り組みが行われているが、その情報が多くの学生に行き届き、学生が環境問題を自分ごととして捉えられる段階にはまだ辿り着いてないと感じる。昨年も筑波大学は東京大学、東京農工大学、お茶の水女子大学と共同で、「サステナビリティウィーク」というイベントを開催した。サステナビリティウィークとは、1 週間にわたってサステナビリティに取り組む学生や教職員が自分の研究や活動を紹介したり、ワークショップなどの企画を実施することで、身近な取り組みを通して学生がサステナビリティについて考えるきっかけを創ることを目指すイベントだった。昨年は、ハイブリッド型のシンポジウムに100名以上が参加したり、他大学とのネットワーキングイベントに筑波大生が参加したりと、反響があったと感じた。そこで今年もまたサステナビリティーウィークを開催し、未来の持続可能な社会を一緒に作っていく仲間と繋がり、お互いから学び、刺激し合う交流を強化したい。

具体的な活動計画

開催日：2024年 6 月15日～22日

Sustainability Week 2025は以下のイベントから構成される。

・フリーマーケット

目的：在学生同士の交流促進、ゴミの減量や物のリユースについて考える
日時：6/19（木）17:00～19:00
場所：石の広場
扱う商品について：古着や古本、小物や規格外野菜（出店は筑波大学学生に限る予定です）
準備段階について：支援室に教室申請を行う、参加者を Google form にて募る、出展者の募集を行う
当日の流れ：

16:30～	出展者・運営による設営
17:00～19:00	活動実施
19:00～	片付け・撤収

販売するもの：古本、古着、アクセサリー、廃棄野菜（JA に事前にいただくことを調整済み）

・アップサイクルワークショップ

目的：在学生同士の交流促進、物のリサイクルについて考える
内容：新聞バッグ、紙袋ブックカバー、リサイクルたわしを作成する予定です
日時：6/16（月）18:30～19:30
場所：大学内の教室
準備段階について：支援室に教室申請を行う、参加者を Google form にて募る、運営側で作り方の確認を行う
当日の流れ：

18:00～	運営による設営
18:30～19:30	活動実施
18:30～	サステナビリティウィークの紹介
18:35～19:25	グループに別れて作業。各グループにスタッフがついて、作り方を説明
19:25～19:30	クロージング 感想を数名に伺う 写真撮影
19:30～	片付け・撤収

・ゴミ拾い

目的：キャンパス内を散歩しながらゴミ拾い・分別を行い、楽しく交流しながらゴミについて考える
日時：6/22（日）10:00～11:00

場所：キャンパス内（スタート & ゴール：グローバルビレッジコミュニティセンター）
準備段階について：参加者を Google form にて募る、ゴミ袋・軍手を用意する
当日の流れ：
9:50～　　運営集合
10:00～10:50　平砂・追越エリアでゴミ拾い
10:50～　　グローバルビレッジに戻ってゴミを処理
広報について：
SNS や学校の掲示板を通して広報を行う予定です。
また人数が必要な取り組みについてはいくつかのエコサークルに声をかけ、参加してもらうように促している状況です。

活動場所
アップサイクルワークショップ：3A 棟312号室
フリーマーケット：石の広場
ゴミ拾い：グローバルビレッジ・平砂・追越学生宿舎周辺



活動期間
2025/05/26～2025/06/22

対象
学生

T-ACT オーガナイザー／パートナー
O：石原怜奈（知識情報・図書館学類 1 年）
　小島莞子（国際総合学類 2 年）
　ベイリッツ亜里咲マリー（生物学学位プログラム修士 2 年）
P：藤澤奈都穂（人文社会系　助教授）

備考
参加して頂くことはもちろん、実際にイベントを一緒に運営していく方も大募集中です !! ご連絡いただければ幸いです。

参加方法：出店、参加ともに Google フォームに記入する形で申し込みを行っていただく予定です。公式 SNS 等でお知らせします。

アップサイクルイベントの Google フォームはこちらから↓
https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSderARzQy3cQKqvnAv_x1o8roTBpuZhi1sL2vrQ6x6cdmrlig/viewform

【フリーマーケット出店要項】
「フリーマーケット」に関する禁止事項及び注意事項等です。出店希望者は、当日トラブルがないよう熟読の上お申込み・ご参加ください。

出店対象者：出店者は本学（大学院を含む）の学生、教職員、研究者のいずれかであること。

（1）出店お申込み
本要項に同意された方のみ申込みを受付けます。ブースの又貸し等、申込者と出店者が異なる場合は、出店をお断りさせて頂きます。また、虚偽の内容で申込みされていたことが発覚した場合、出店を取り消すことがあります。出店場所に関してのご希望はお受けできません。
出店者の都合によるお申込みの変更・キャンセルがあった場合は速やかにプランナーにご連絡ください。出展申込の際にご連絡頂く個人情報については、フリーマーケットの出店管理の為の連絡時等に使用させて頂きます。
フリーマーケット運営からの連絡は、基本的に T-ACT 企画ページ、メール、公式 SNS より行います。登録した連絡先（メールアドレス等）に変更があった場合には必ずプランナーへご連絡ください。メール未着等によるトラブルについては、運営は一切責任を負いません。

（２）出店に関して
搬入について：
　６月19日（木）16:30～搬入作業を開始可能。参加者受付が始まる17時までに原則搬入作業を完了させてください。
搬出について：
　６月19日（火）20:00までに搬出作業を完了させること。※出店の際に出たゴミは各自でお持ち帰りください。
販売禁止品目：
1．コピー商品（著作権侵害物）、商標権（キャラクター等）や著作権を侵害した作品
　※著作物については版権所有者に確認をとった上でご使用ください。
2．盗品や法律で禁じられている物品
3．風船、動物、医薬品、嗜好品、飲食物（ペットフードを含む、飲食物全般）・刃物・エアガン・アダルト関連商品・金券・教科書や授業内容を書き記したノート・汚れ破損した衣類、自作の化粧品（身体に使用する石鹸・香水など）等
4．日本での所持、販売、譲渡が法律で禁じられている物品
5．フリーマーケット運営が販売に対して不適当と判断した作品
　※フリーマーケット運営スタッフが会場内を巡回し出店内容の確認を行ないます。上記販売品目を見つけた場合、撤去していただきます。
禁止行為：
1．危険物の持込及び火気・発電機の使用
2．社会通念上不適当と思われるもの、及び法律・関係諸条例に抵触する物品の持ち込み、販売、及び行為
3．周囲の美観を損ねたり風紀を乱す行為および他の出店者の出展の妨げとなる行為
4．『PR』『勧誘』『布教』『契約行為』を目的とした出店
5．偽ブランドや海賊版・コピー商品などの違法商品、盗品、危険物、生き物、飲食品全般（フリーマーケット運営が認めた場合を除く）、医薬品、嗜好品の場内への持ち込み、及び販売。また射幸心をあおるくじ引き類や、掛け売り行為など
6．学内は全面禁煙のため喫煙不可
7．ブース外でのチラシの配布および客引き
8．会場の床面にガムテープ等を貼る行為（剥せるテープ、養生テープ等は可）
9．拡声器の使用
10．会場内での調理
11．開催時間前の物品・金銭のやり取り、また会期中の場内で他の出展者から購入した物を自分の出展場所で販売すること。
12．フリーマーケット運営が不適当と判断した行為
　※禁止行為を見つけた場合、退出していただく場合があります。
その他注意事項：
1．出店品の返品や交換については出展者の責任において対応願います
2．出店品が完売した場合には、早閉まいを認めます
3．出店の際に出たゴミは各自でお持ち帰りください
4．大声での呼び込みなど周辺からクレームが出ないよう販売してください
5．会場内では Paypay による支払いを基本とします。予めご準備ください
6．会場内での盗難や事故に関しては、フリーマーケット運営では一切の責任を負いません
7．出展品の販売価格設定は各出展者に委ねます
8．天災等不可効力原因（盗難・紛失・火災・地震等）による損失または損害に関してフリーマーケット運営は一切責任を負いません
9．会場内でのフリーマーケット運営による撮影及び録画にご協力をお願いします（写真の使用権はフリーマーケット運営・T-ACT に属します）

※本要項は、2023年３月に学内で実施された「ITF フリーマーケット」（T-ACT 企画承認番号：22016A）を基にフリーマーケット運営が作成したものです。本企画に参加する者は上記の条件を全て満たしている必要があります。

【フリーマーケット参加にあたってのお願い・注意事項等】
「フリーマーケット」に関する禁止事項及び注意事項等です。本イベントの参加希望者は、当日トラブルがないよう熟読の上お申込み・ご参加ください。

イベント参加対象者：本学（大学院を含む）の学生、教職員、研究者のいずれかであること。

（１）参加お申込み
　本参加にあたってのお願い・注意事項等に同意された方のみ参加いただけます。申込の際にご連絡頂く個人情報については、フリーマーケットの出店管理の為の連絡時等に使用させて頂きます。
　フリーマーケット運営からの連絡は、基本的に T-ACT 企画ページ、メール、公式 SNS より行います。登録した連絡先（メールアドレス等）に変更があった場合には必ずプランナーへご連絡ください。メール未着等によるトラブルについては、フリーマーケット運営は一切責任を負いません。



（２）禁止行為
1．危険物の持込及び火気・発電機の使用
2．社会通念上不適当と思われるもの、及び法律・関係諸条例に抵触する物品の持ち込み
3．周囲の美観を損ねたり風紀を乱す行為および他の出展者の出展の妨げとなる行為
4．『PR』『勧誘』『布教』『契約行為』
5．学内は全面禁煙のため喫煙不可
6．本イベントに関係のないチラシ配布および広報活動
7．拡声器の使用
8．会場内での調理
9．開催時間前の物品・金銭のやり取り。また会期中の場内で出展者から購入した物を会場内で販売すること
10．フリーマーケット運営が不適当と判断した行為
※禁止行為を見つけた場合、退出していただく場合があります。

（３）その他注意事項：
1．出展品の返品や交換については出展者の責任において対応致します
2．ゴミは各自でお持ち帰りください
3．会場内では両替が出来ませんのでご注意ください
4．会場内での盗難や事故に関しては、フリーマーケット運営では一切の責任を負いません
5．出展品の販売価格設定は各出展者に委ねておりますため、フリーマーケット運営では値段交渉等の管理は致しません
6．天災等不可効力原因（盗難・紛失・火災・地震等）による損失または損害に関してフリーマーケット運営は一切責任を負いません
7．会場内でのフリーマーケット運営による撮影及び録画にご協力をお願いします（写真の使用権は新生活応援フリーマーケット運営・T-ACT に属します）

活動報告

実際の活動内容
　フリーマーケット・アップサイクルワークショップ・ゴミ拾い

　フリーマーケットは在学生同士の交流促進、ゴミの減量や物のリユースについて考えることを目的に、2025年６月19日（木）17:00~19:00の期間に石の広場で実施しました。
　古着や古本、小物や規格外野菜を商材として扱い、多くの学生に参加してもらうことが出来ました。

　アップサイクルワークショップは在学生同士の交流促進、物のリサイクルについて考えることを目的に、新聞バッグ、紙袋ブックカバー、リサイクルたわしを作成することで簡単に作れるリユースグッズを広めました。日時は2025年６月16日（月）18:30～19:30の期間に、大学内の教室で行いました。

　ゴミ拾いはキャンパス内を散歩しながらゴミ拾い・分別を行い、楽しく交流しながらゴミについて考えることを目的に、2025年6/22（日）10:00~11:00にキャンパス内（スタート＆ゴール：グローバルビレッジコミュニティセンター）にて実施しました。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒90％

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

アップサイクルイベントに人が集まらなかったこと。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

放課後、キャンパスに残っている学生に声をかけたものの、あまり参加者を集めることが出来なかった。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

筑波大学について詳しくなる機会でした。多くの学生に来てもらえるように開催場所・ポスターの場所を工夫をしたり、大学の規則に違反しないように注意を払ったり、大学内で T-ACT を利用したからこそ知れた筑波大学のあれこれが沢山ありました。そして改めて環境問題に関心を持つ大学の仲間に出会うことが出来て良かったです！

参加者への影響

参加者の方々には、規格外野菜・古着・古本の良さを知ってもらうきっかけになったと考えています。さらに、まだ食べられる・まだ着られる・まだ使えるのにごみになってしまうものがあることを知り、広く環境問題を自分事化するきっかけになっていたら嬉しいです。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

自分たちで計画をして何かイベントをやることはとても大変なことだと思います。しかし、その時に必要な計画力・協調性・実行力は必ずどこかで役に立ちます。フリーマーケットに限らず、ぜひ T-ACT を活用してイベントを開催してみてください！

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

T-ACT の皆様には計画の段階から丁寧にご指導して頂きました。石の広場におけるフリーマーケットの開催については、当初色々な懸念がありましたが、粘り強く試行錯誤を重ねた結果、多くの人に来てもらうことが出来て良かったです。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒5







筑波大吃音会 ―ツクスター v3（25008A）

T-ACT プランナー　佐藤　悠斗（障害科学学位プログラム博士前期課程1年）

活動目的

本活動は吃音に関心のある方のための「吃音・流暢性障害研究会」と当事者のためのセルフヘルプという２つの側面の活動を行う場です。筑波大学の学生や学外の方に参加いただける会です。吃音のある人の交流及び吃音に関心のある方が当事者とともに知識を深め多様な学びを行うこと、さらに吃音の認知拡大を図り、研究規模の拡大も目的としています。筑波大吃音会ーツクスター v1、2 では勉強会、セルフヘルプ活動で数百名の方にご参加いただきました。



・1 つ目の側面【吃音・流暢性障害研究会】
　奇数月に行われる「吃音・流暢性障害研究会」では、専門的内容から吃音関連の話題など幅広いトピックを扱い意見交換を行います。吃音のない方も参加いただけるため当事者とともに知識や考えを深めることが可能です。吃音に興味のある方、吃音のあるお子さんの親、支援者の方などの参加を主に想定しています。

・2 つ目の側面【吃音セルフヘルプ・グループ】
　偶数月に行われる「吃音セルフヘルプ・グループ」では、悩みの共有・意見交換・テーマに沿ったディスカッション・発表練習・レクリエーション・演劇・映画鑑賞など各会によって当事者セルフヘルプ・グループならではの“当事者目線で考える”様々な活動を行います。吃音当事者の方ならどなたでも参加していただけます。

【企画立案の背景】
吃音は人口の１％に存在するといわれ、目に見えない障害のため他者に理解されにくく様々な困難を抱えます。吃音の研究や臨床を行う上で豊かな環境であると言える本大学を拠点に吃音当事者やその支援者等の交流・勉強の場を引き続き提供したいと考えたことが本企画を行う１番の動機です。

具体的な活動計画

【吃音・流暢性障害研究会】参加費：無料
奇数月（２ヶ月に１回）、18時15分～20時15分。
筑波大学人間系飯村大智研究室の所属学生と学内・学外参加希望者で吃音の専門的知識の習得、吃音トピックに関するディスカッション、交流を行います。対面とオンラインのハイブリッドで行います。

【吃音セルフヘルプ・グループ】参加費：無料
偶数月（２ヶ月に１回）、18時15分～20時15分。
悩みの共有・意見交換・テーマに沿ったディスカッション・発表練習・レクリエーション・演劇・映画鑑賞など各会によって様々な活動を行います。吃音当事者であればどなたでも参加していただけます。対面で行います。

活動場所

【吃音・流暢性障害研究会】
オンラインと対面を活用し、実施します。場所は人間系学系棟 B225 or B226です。オンライン参加の URL などの詳細情報は X、公式 HP、公式 LINE で告知します。

【吃音セルフヘルプ・グループ】
対面で実施します。場所は人間系学系棟 B225 or B226です。詳細情報は X、公式 HP、公式 LINE で告知します。

活動期間

2025/07/01～2026/01/01

対象

学生・教職員・学外者





T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：中澤仁成（障害科学類 3 年）
　今田東子（体育専門学群 2 年）
　落合紬（障害科学類 1 年）
　山本巧真（知能機能システム学位プログラム博士前期 1 年）
　阿部立歩（情報学学位プログラム博士前期 1 年）
　青木瑞樹（障害科学学位プログラム博士後期課程 3 年）
P：飯村大智（人間系）



活動報告

実際の活動内容

ハイブリッド形式で、引き続き「吃音の基礎知識」をテーマに勉強会を実施しました。私が代表として講義するのは最後であった。海外の論文やアプローチについて学び、質疑応答を行いました。また外部の大学生が吃音の研究についてお話ししてくださいました。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒80％

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

対面とオンラインを併用して行う際のマイクが欲しい。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

プランナーの PC のマイクを使用した。



活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

アカデミックな知見に触れることで、吃音に対する論理的な理解が深まりました。研究活動の意義を肌で感じることができ、知的好奇心が刺激されました。

参加者への影響

専門的な内容でしたが、学生が噛み砕いて解説することで、一般の参加者からも「勉強になった」と好評でした。研究と臨床・当事者を繋ぐ架け橋のような会になりました。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

専門的な内容を扱う際は、初心者にもわかりやすい資料作りを心がけると、満足度が大きく上がります。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

一連の活動を通じて、大学という「研究の場」と「交流の場」を両立できる T-ACT の仕組みは、ツクスタのような活動にとって最適だと感じました。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒4





芸術文化の入り口としての体験型写真展示とワークショップ（25010A）

T-ACT プランナー　岩田　悠佑（生物学類4年）

活動目的



本企画は、2024年度実施の T-ACT 企画「展示会を身近にしよう」の流れを汲み、筑波大学社会貢献プロジェクトでの採択を経て実施される。

美術作品の展示会やワークショップに参加することは、精神的な豊かさを育み、創造性を発展させる重要な機会である。特に子供や若者にとって、芸術文化に触れる体験は、自発的に学び、考える力を養うだけでなく、豊かな人間性を築く基盤となるとされる。また、このような体験は、自尊感情や外交性を高めるとともに、精神的な回復力や非認知能力を向上させるなど、健全な成長にも寄与することが知られている。

しかし一方で、美術作品の展示会やワークショップに参加する機会には、いくつかの要因によって格差が生じているのが現状である。まず、美術館や博物館の地理的な偏在が挙げられる。多くの美術館や博物館は都市部に集中しており、地方や過疎地域ではこれらの施設が極めて少ない。そのため、地域的な条件により、芸術文化に触れる機会が大きく制限される場合がある。また、美術作品の巡回展も、適切な規模の施設が必要であることから、開催地域が限定されやすい。さらに、経済的事情や家庭環境も大きな影響を与える要因である。経済的に恵まれない家庭では、展示会やワークショップの参加費用が負担となり、こうした体験が実現しにくい。また、家族の芸術文化への関心や価値観も、子供や若者がこれらの機会にアクセスできるかどうかに影響を及ぼす。

以上のように、子供や若者にとって芸術文化に触れることはその健やかな成長にとって極めて重要であるにもかかわらず、地理的、経済的、家庭的要因による格差が存在する。その結果として生じる経験格差は、社会全体の文化的な豊かさや創造性の発展を阻む要因となり得る。この課題を解決するためには、芸術文化へのアクセスを公平にするための政策や地域社会での取り組みが求められている。

本企画は写真をテーマにした展示とワークショップを芸術に親しむ機会の 1 つとし、芸術文化へのアクセス格差にアプローチすることを第 1 の目標とする。また本企画では特に、鑑賞者としてではなく、表現者として芸術文化に親しむ機会を創出することを目指す。本企画の参加者が、創作をテーマとした展示の鑑賞、また自らが実際に制作をする体験を通し、芸術文化にアプローチする一つの方法としての表現手段が必ずしも高い専門性を要するのではなく、広い範囲の人々に対して開かれていることを知ってもらいたいという意図がある。これを第 2 の目標としている。

写真を対象とした理由は、その普及度と手軽さにある。スマートフォンが普及した現代において、写真はほとんどの人が手軽に始めることができる表現手段である。特に絵画のように技術的な習熟を必ずしも必要とはしないため、小さな子供であっても簡単に取り組むことができ、これを表現の方向から芸術に親しむ機会とすることができる。

具体的な活動計画

【展示】

「名前のない明日から」

会　　期：2025年 9 月17日～9 月21日
会　　場：茨城県つくば美術館　第 2 展示室
開場時間：9:30～17:00（最終日は15:00閉場）
内　　容：写真を中心とした作品の展示を行う。写真パネルやプロジェクターの使用を予定。写真という表現手段の再考と、表現者として芸術に親しむことを提案できる構成を検討している。詳細はつくば美術館との面談後に決定される。

スケジュール：

7 月上旬	ポスター、ビラ完成、公開および配布開始（SNS およびビラ配布） 作品制作開始
8 月 6 日	美術館で打ち合わせ、展示詳細決定
9 月16日	つくば美術館設営
会期	展示
9 月21日	撤収

「写してみよう展」

会　　期：2025年 7 月31日～8 月 7 日

会　　場：つくば市民ギャラリー
開場時間：9:00～17:00（最終日は15:00閉場）
内　　容：「写してみよう」をテーマとし、インスタントカメラから多様なフォーマットの銀塩写真、デジタル写真を用いた作品の展示を行う。展示の形式は、プリント、モニター、プロジェクター、ポジフィルム原版を想定している。写真表現における手段や取り組み方の可変性を示すことを目指す。
スケジュール：
７月上旬　　ポスター、ビラおよびワークショップ参加応募フォーム完成、公開（SNS およびビラ配布）
　　展示作品制作開始
７月31日　　設営、展示開始
会期中　　展示およびワークショップ（８月２日）実施
８月７日　　撤収

「写してみよう展 ワークショップ」
開催日：2025年８月２日
内　　容：参加者に古典的なアナログカメラをベースとしたインスタントカメラを使って作品を制作してもらうワークショップ。写真撮影に馴染みが無い人、古典的なカメラを触ってみたい人など、制作や実践に関心があれば対象は問わない。ただし、小学生以下の参加者は保護者の同伴を求める。制作した作品は同会場で開催している「写してみよう展」の会期中展示される。古典的なアナログカメラの操作と撮影を通して、写真における基本的な考え方を実践的に理解するとともに、参加者自身が自ら作品を制作し、人に見てもらう経験を提供する。参加者の費用負担はない。参加者が撮影したいものがあれば持参してもらう（余裕をもって運搬でき、つくば市民ギャラリー内に持ち込み可能なものに限定。飲食物や生体など、施設や作品の汚損の原因になるものは認めない）。
　　１回の所要時間は50分で、５名を上限とする（付き添いは含まない）。当日は10:00～16:00の間に計６回開催する。会場はつくば市民ギャラリー内。参加は事前にフォームで受け付けるが、当日の飛び入り参加も可とする。
スケジュール：
７月上旬　　ポスターおよび参加応募フォーム完成、公開
　　ワークショップ企画テスト、フィードバック
８月２日　　ワークショップ実施

以上の展示会・ワークショップは、全ての会場の予約を完了している。

広　　報：X（旧 Twitter）およびインスタグラムのアカウントを開設、７月上旬から運用を開始する。展示会およびワークショップの情報発信、また制作の進捗や写真に関するトピックの発信を行う。

活動場所
筑波大学筑波キャンパス構内
つくば市民ギャラリー
茨城県つくば美術館

活動期間
2025/06/01～2026/02/28

対象
学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー
O：藤田知里（社会学類４年）
　二村祥太（医学類４年）
　近角悠（情報科学類３年）
　浅野怜矢（知識情報・図書館学類３年）
P：中田和人 先生（生命環境系）



活動報告

実際の活動内容

①「写してみよう展」

つくば市民ギャラリーにて、写真の多様な表現手段や原理について紹介する展示会を開催した。多くの人に身近な一方で、多様な表現を実現できる写真の魅力を発信するとともに、芸術文化に対して、「つくる」側から親しむことを提案した。

②「大判カメラを使った撮影ワークショップ」

「写してみよう展」会期中に、大判カメラを用いて、参加者に自由に撮影してもらうワークショップを開催した。大判カメラは単純な構造をしており、撮影における操作を通して、写真の原理を体験的に学ぶことができる。これに加え、参加者が自ら考え、自由に表現する経験を提供することを目的とした。

③展示会「名前のない明日から」@ つくば美術館

2025年 9 月17日～9 月21日の期間に、つくば美術館で展示会「名前のない明日から」を開催した。本展示では、「感じ、考え、つくる」という一連の創作プロセスそのものを、内面にまで言及する形で提示することを試みた。一連の展示の鑑賞を通して、鑑賞者一人一人が自らの体験と照らし合わせながら、芸術とはどのようなものか、芸術がどのような効果をもつのかについて考える場となることを目指して企画した。会期中、500名以上の来場者を記録した。

④展示会「名前のない明日から」@ 筑波大学総合交流会館

2026年 1 月に、前年の展示を再構成し、筑波大学総合交流会館、多目的ギャラリーにて展示した。

⑤くるくる桜マルシェ 出張撮影

筑波大学の学生団体 かざぐるま様と CYCLE CHIC 様が運営する「くるくる桜マルシェ」にて、大判カメラを用いた撮影を行った。主な来場者であった親子連れを撮影すると同時に、大判カメラを前にして写真の仕組みについて体験的に学ぶ機会となることを目指した。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒100％

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

展示会の開催期間においては、必ずメンバーの誰かが会場に常駐する必要があった。説明などの対応を踏まえると、同時に 2 名以上の常駐が必要であったため、シフトの割り当てに困難が生じた。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

プランナーやその他の数名の学生のシフトを増やすことで対応した。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

2024年年末に開始した企画「展示会を身近にしよう」に引き続き、美術に対する親しみを提案するという目的のもとで本活動は企画された。

学内の開催であり、また鑑賞者からのフィードバックを得る仕組みを用意しなかった前企画と異なり、学外を中心として展示会場に常駐し、またワークショップを加えて実施した本企画では、幅広い層の鑑賞者や参加者のコメントや反応を得、企画の効果を評価できたことが特に重要であると考えている。



これによって、自分自身が美術への親しみを広めたいと考えるのはなぜか、美術への親しみがどのような効果を生じるか、美術への親しみを広めるにあたって、将来的に、また目前にどのような課題があるのか、など、企画のコンセプトや展望を極めて効果的にブラッシュアップすることができた。

また本企画は、チーム運営に関しても大いに学びを得る機会になったと感じている。本企画は実施にあたって、早期に企画のコンセプトや構造、具体的な日程が定

まっていたが、これに対して仕事の分担には大いに苦戦した。実施においてはメンバーの特徴や参加のモチベーションを踏まえて割り振りを行いたかったが、意思決定に際してのメンバーの主体性を引き出すことができず、効果的な分担には繋がらなかった。また、対面・オンラインを交えたミーティングを複数回実施し、特にコンセプトや企画の構造に関して共有を図ったが、主観的にはあまり成功しなかったと評価している。企画の運営に際してこの影響は大きく、分担した作業においてプランナーが高頻度の確認を行う必要が生じてしまった。

現在、以上のような問題は、企画の根源的なモチベーションを共有できなかったことに由来しているのではないかと考えている。プランナーおよびオーガナイザーは企画以前から他のサークル活動等を通して交流があり、関係性は現在まで良好である。また活動期間を通して、プランナーおよびオーガナイザーは全員が企画に対して積極的な取り組み姿勢を維持していた。にもかかわらず、オーガナイザーの積極的な実行、および企画のコンセプト・構造の伝達に支障が生じた。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

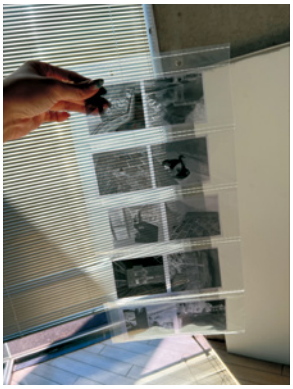
やりたいことができた充実感はありましたか？⇒4














つくば自然共生プロジェクト ～ ITF Lab. ～（25011A）

T-ACT プランナー　作森　元司郎（世界遺産学学位プログラム博士前期課程1年）

活動目的



筑波大学の広大な自然を自然共生サイトとして登録することが活動の目的である。

本活動では、キャンパス内の動植物の調査や申請書案の作成を行い、学生から大学に自然共生サイトの登録に向けた働きかけを行う。また、つくば市内の自然共生サイト登録地域との連携を推進すべく、共生サイトの見学会・意見交換会を実施する。

近年、生物多様性の急速な消失が世界的な課題となっている。森林破壊、海洋汚染、気候変動などの影響により、多くの動植物が絶滅の危機にさらされ、生態系のバランスが崩れつつある。生物多様性は、私たちの食料・水・空気の質など、暮らしの根本を支える重要な基盤であり、これを守ることは人間社会の持続可能性にも直結している。

こうした背景のもと、国際社会は「30by30（サーティ・バイ・サーティ）」という目標を掲げた。これは、2030年までに地球上の陸と海の30％以上を健全な生態系として保全し、生物多様性の損失を食い止めるとともに、回復への道筋を築くことを目的とした国際的な目標である。この目 標は、2022年12月に開催された生物多様性条約第15回締約国会議（COP15）で採択された「昆明・モントリオール生物多様性枠組」に明記され、日本でも2023年に「生物多様性国家戦略2023-2030」に位置づけられている。

この30by30目標の達成手段の一つが自然共生サイトの登録である。自然共生サイトとは、国立公園などの法的保護地域ではないが、結果的に生物多様性の保全に寄与している区域を指す。地域や民間、大学などの主体が管理している場所であっても、生態系が守られ、管理が継続されている場合には、自然共生サイトとして認定される可能性がある。

筑波大学は、広大なキャンパスに多様な自然環境を有しており、生物多様性の観点からも重要な資源を抱えている。そのような場所を自然共生サイトとして登録することは、大学が持つ自然資源の価値を明確に示し、国内外に対して環境保全への主体的な貢献を発信することにつながる。また、学生や研究者にとっても、身近なフィールドとして自然を活用できる環境が制度的に認められることで、教育や研究の質も高まると期待される。

以上の理由から、筑波大学が自然共生サイトとして登録を目指すことは、30by30の実現に資するだけでなく、持続可能な大学経営と社会貢献の観点からも極めて意義深い取り組みである。

具体的な活動計画

【活動内容】

学生から大学に対して自然共生サイトの登録に向けた働きかけを行い、実際に登録を目指す。つくば市内の自然共生サイト登録地域との連携を推進すべく、共生サイトの見学会・意見交換会を実施する。

具体的には筑波大学、筑波キャンパス内にある自然の中から、自然共生サイトの基準を満たすエリアを選定。エリアの生物等を把握する調査を経たのちに、申請書類を作成し、筑波大学を自然共生サイトに登録する。

【スケジュール】

７月　チームビルディング（担当分担、役割決定）
８月　どこが登録できるか、考える。
　　調査（現地・大学有識者）
　　土地所有・管理体制の確認
　　つくば市内の自然共生サイト訪問（国立環境研究所、応用地質株式会社を予定）
　　申請書の骨子作成
９月　どこを登録すべきか考える。
　　調査結果の整理
　　申請書ドラフト作成
　　ERCA への事前相談実施
10月　本格的な書類作成にとりかかる。
　　事前相談を受けた修正作業
　　必要に応じて追加調査・追記
　　学内合意形成（教員・施設管理関係者）
11月　書類最終段階にとりかかる。
　　書類の最終化

学内手続き完了
必要に応じて関係者ヒアリング調整
筑波大学生き物多様性フェスタにて活動報告
共生サイト登録に積極的なつくば市内企業等が集まる場で報告会
⇒申請書ブラッシュアップ

12月　提出
正式申請書の提出（ERCA 宛）
報告・振り返り・成果の共有

活動場所

筑波大学筑波キャンパス人文社会学系棟　B216
つくば市内の自然共生サイト見学させていただく可能性有り。

活動期間

2025/07/14～2026/03/31

対象

学生・教職員

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：酒井岳大（人間総合科学学術院 1 年）、荒木聡太（理工情報生命学術院 1 年）
　福谷有恒（理工情報生命学術院 1 年）、加藤彩海（理工情報生命学術院 2 年）
P：三ツ井聡美（芸術系）、澤田聖人（芸術系）

活動報告

実際の活動内容

・学内生態系調査
・つくば生き物多様性フェスタ出展
・企業とのネットワーキング
・企業の申請書作成者に対するインタビュー調査
・ERCA 申請書作成

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒90％

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと
　他組織との日程調整、書類の作成、役割分担

解決をどのように図ったか，困ったことを解決できたか
　粘り強くたくさん考える。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか
　自然保護・保全への関心を軸足に様々なバックグラウンドを持つメンバーが活動に参加してくれた。彼らが活動に関心を持った時に、T-ACT が信憑性を担保しているという事実が彼らの背中を押したのではないかと考える。
　学部内では出会えない仲間と協働できる貴重な経験であった。

参加者への影響
　「30by30目標」「自然共生サイト」という制度への共感や、関心から集まったメンバーで活動した。そのため、皆がこれまで縁のなかった方々と協働する経験を積むことができた。
　つくば生き物多様性フェスタにおいては、活動を紹介するポス



ター発表を通して、つくば市内に拠点のある多くの企業の方が活動に関心を持っていただいた。またその後申請書作成に際して、お力添えいただくことができた。これらの交流から企業視点から見る自然保護・保全について学ぶことができた。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

うっすらやりたいと思っていることがあったらおすすめです。自分のプロジェクトの進捗が世界に公開されているため、サボったらバレる！という気持ちで取り組めます。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

他組織との交渉を進める際に信用を担保してくれる存在としてありがたかった。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒4







T-KOSEN ～全国高専向け大学説明会2025～（25012A）

T-ACT プランナー　木村　亮一（知能機能システム学位プログラム前期課程2年）

活動目的

T-KOSEN は、筑波大学への編入学や大学院進学を目指す高等専門学校（高専）生を支援する、筑波大学の学生による学生主体のサポート団体です。メンバーは全員が実際に高専から筑波大学へ編入・進学した経験を持ち、自らの体験をもとに、後輩たちの不安や疑問に寄り添う活動を行っています。

高専卒業後の進路として「編入学」という選択肢は非常に有意義である一方、その制度や受験方法についての情報はまだまだ限られており、全国の多くの高専生が「どの大学に進めるのか」「何を準備すればよいのか」「どのような試験対策が必要なのか」といった悩みを抱えています。

T-KOSEN では、そうした情報格差を解消すべく、全国の高専生を対象にしたオンライン説明会や対面イベントを実施します。筑波大学をはじめとする大学編入に関するリアルで具体的な情報発信を行うことで、過去の自分たちが欲しかった情報を、今の高専生に届けていこうと考えています。

また、希望者には個別相談の機会も設けて、「どの学類・専攻を目指せばよいか」「自分の興味分野に合う研究室はあるか」といった個々の関心に応じた、きめ細やかなサポートを提供します。

加えて、私たち自身が今まさに学んでいる筑波大学の魅力、自由で多様性に富んだ学風、広大で快適なキャンパス、学生主体の研究環境やサポート体制などについても積極的に発信することで、「進学先」としての筑波大学をより具体的にイメージしてもらえるよう努めます。

私たちは、T-ACT の一員として、高専生支援の取り組みを学内外に広げるだけでなく、他団体や研究室との連携を通じて、たとえば「高専と大学の学びの接続」や「地域連携を活かしたキャリア支援」など、より多面的なアプローチを模索していきたいと考えています。

また、T-ACT への参加によって、T-KOSEN の活動が単なる情報提供にとどまらず、「学生が学生の未来を支える」という新しいモデルとして教育界や社会に向けた発信力を持つだけでなく、他の意欲ある学生団体や個人との交流を通じて、活動そのものがさらに活発で多様性のあるものになると考えています。

私たちが提供するのは、単なる情報ではありません。

それは、「同じ道を歩んだ仲間だからこそ伝えられる安心感」と、「一歩を踏み出す勇気」です。

T-KOSEN はこれからも、高専生が自分の可能性を信じ、進路を前向きに選択できるよう、心を込めてサポートし続けます。

具体的な活動計画

T-KOSEN のメンバーは、全国各地のさまざまな高専出身であり、情報系・電気電子系・機械系・化学系など、多様な分野に所属しています。そのため、編入学に関する情報だけでなく、分野ごとの学習内容や受験対策、進学後の学生生活に至るまで、幅広く具体的な経験談を届けることができます。

特に力を入れているのが、全国高専生向けのオンライン説明会です。この説明会は2021年から毎年開催しており、参加者からのフィードバックや経験をもとに内容をブラッシュアップし続けています。説明会では、事前に寄せられた質問にも丁寧にお答えし、高専生のリアルな不安や疑問に寄り添った構成を心がけています。

さらに、全国向けの説明会に加えて、** 各メンバーの母校を対象とした「母校説明会」** も開催しています。こちらでは、より身近な先輩として、編入学までの具体的なステップ、試験勉強の工夫、学類の選び方など、自らの体験を通してリアルな声を届ける場となっており、後輩たちが今後の進路を考えるきっかけづくりを大切にしています。

T-KOSEN の年間スケジュール

時期	内容
４月中旬	新メンバー勧誘
５月～6 月	新体制での活動基盤の構築
７月下旬	メンバー間で資料内容の見直し・再選定
８月中旬	全国説明会向けの資料・アンケート作成
９月中旬	筑波大学キャンパス紹介動画の再撮影
10月上旬	全国の高専へ説明会の周知開始・アンケート実施
10月中旬	最終資料の調整・リハーサル
11月上旬	全国高専向けオンライン説明会を開催
11月以降	母校説明会を順次実施予定

全国高専説明会の当日スケジュール

時間 内容

14:00～14:10	全体説明（編入学制度、院試、T-KOSEN の紹介）
14:10～14:15	筑波大学の概要紹介
14:15～14:40	キャンパス紹介動画（図書館、体育施設、宿舎、研究室など）
14:40～15:00	全体での質疑応答
15:00～15:30	個別質問対応（Zoom のブレイクアウトルーム等）
15:30	終了・アンケート回収

活動場所

オンライン、対面

活動期間

2025/07/04～2026/03/04

対象

学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：鹿志村快音（数理物質科学研究群 応用理工学学位プログラム 電子・物理工学サブプログラム前期課程 2 年）
山田真緒（システム情報工学研究群 構造エネルギー工学学位プログラム前期課程 1 年）
持田航輔（情報学群情報メディア創成学類 3 年）
江尻悠斗（数理物質科学研究群 応用理工学学位プログラム 物性・分子工学サブプログラム前期課程 1 年）
佐藤世菜（数理物質科学研究群 応用理工学学位プログラム 物性・分子工学サブプログラム前期課程 1 年）
石関隼人（システム情報工学研究群 知能機能システム学位プログラム前期課程 2 年 ）
友田陽大（システム情報工学研究群 知能機能システム学位プログラム前期課程 1 年 ）
塚本匠（システム情報工学研究群 構造エネルギー工学学位プログラム前期課程 1 年 ）
石川将丈（情報学群情報メディア創成学類 4 年）
西本健太（数理物質科学研究群 化学学位プログラム前期課程 1 年）
龍﨑創平（生命環境学群生物資源学類 3 年）
P：北條梨沙（教育推進部社会連携課）



活動報告

実際の活動内容

主な活動として、全国の高専生を対象としたオンライン説明会を実施しました。本説明会は2021年から毎年継続して開催しており、過去の参加者から寄せられたアンケート結果やフィードバック、運営側の経験をもとに、毎年内容の見直しと改善を行いながら発展させています。単なる制度説明にとどまらず、実際の編入試験対策、学類選択の考え方、進学後の学生生活など、参加者が具体的にイメージできる情報提供を意識して構成しました。

説明会では事前に質問を募集し、それらに対して丁寧に回答する時間を設けました。これにより、一方向的な情報提供ではなく、高専生が実際に抱えている不安や疑問に直接対応できる双方向型の説明会となるよう工夫しました。特に「試験対策の進め方」「研究室の選び方」「編入後の学習負担」など、実体験に基づく具体的な話ができたことは、大きな価値があったと感じています。

今年度は令和７年11月15日（土）14:00～15:40にオンライン形式で実施し、全国から約50名の高専生に参加していただきました。地域を問わず参加できるオンライン形式の利点を活かし、幅広い学年・分野の学生に情報を届けることができました。

また今年からの新たな取り組みとして、説明会終了後に T-KOSEN メンバーと少人数で話せる時間を拡充しました。個別の質問や進路に関する悩みをより深く相談できる場を設けたことで、参加者がより具体的な行動イメージを持てるようになったと考えています。この取り組みは参加学生からの評価も高く、「直接先輩と話せて安心できた」「より現実的な進学像を描けた」といった前向きな感想が多く寄せられました。

本活動を通して、情報を伝えるだけでなく、「同じ進路を経験した先輩として寄り添うこと」の重要性を強く実感しました。進学に対する不安は制度の説明だけでは十分に解消されず、実体験に基づいた具体的な話や対話によって初めて安心感につながることを学びました。今回の経験は、自分自身の進学経験を社会的に還元するという点でも非常に意義のある活動であったと感じています。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒100％

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

説明会の実施にあたり、参加申込者数が想定よりも少なく、開催直前まで十分な参加人数が集まらなかったことが課題でした。広報は事前に行っていましたが、告知のタイミングや情報の届き方によっては、関心があっても認知されていない可能性があると感じました。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

この課題に対して、全国の高専に対して改めてご連絡を差し上げ、担当の先生方を通じて学生への再告知をお願いしました。単なる再周知ではなく、説明会の内容や対象者、参加するメリットを具体的に伝えていただけるよう依頼しました。

その結果、追加で関心を持った学生からの申込みが増え、最終的には約50名の参加者を確保することができました。今回の経験から、イベント運営においては初回告知だけでなく、タイミングを見た再告知や、伝達経路を複数確保することが重要であると学びました。また、関係機関との連携が参加者確保において大きな効果を持つことも実感しました。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

この全国高専説明会は昨年も実施しており、その際は一メンバーとして参加していましたが、今年は代表として運営に関わりました。立場が変わったことで、単に説明を行うだけでなく、企画内容や構成、進行方法まで含めて全体を考える必要があり、責任の大きさと同時にやりがいを強く感じました。

特に意識したのは、「参加者が何を不安に思っているのか」「自分が当時の立場だったら何を知りたかったか」という視点に立つことです。形式や予定していた説明順序にこだわりすぎるのではなく、参加者の反応や質問内容に応じて柔軟に内容を補足し、関心の高いテーマに時間を多く割くよう心がけました。

その結果、事後アンケートでも説明内容や相談時間に対して好意的な評価を多くいただくことができ、運営側として大きな手応えを感じました。本活動を通じて、相手視点で情報を整理し伝える力や、状況に応じて進行を調整する力の重要性を学ぶことができました。

今回の経験を踏まえ、今後も T-KOSEN の活動を継続し、より多くの高専生にとって有益な機会を提供できるよう貢献していきたいと考えています。

参加者への影響

今回の説明会には、筑波大学のさまざまな学類・専攻に所属するメンバーが参加しており、それぞれが自身の受験方法や専門分野に関する知見を持ち寄ることで、情報系・機械系・電気電子系など、多様な分野の高専生に対応できる体制を整えました。その結果、参加者は自分の興味分野や進路に近い先輩から、より具体的で実践的な話を聞くことができる機会を設けました。

また、進学先の選択や試験対策について「自分にもできそうだと感じた」「進学後の生活が具体的にイメージできた」といった声が寄せられ、進路選択に対する不安の軽減や、前向きな意識の醸成につながったと考えています。単なる情報提供にとどまらず、実体験に基づいた対話を通して、参加者が自分自身の進路を主体的に考えるきっかけを提供できました。

このような効果を高めるため、運営メンバー間でも事前準備に力を入れました。メンバーにとっても全国規模での説明会運営は初めての経験であったため、事前に複数回の会議を行い、想定される質問の共有や役割分担、説明内容のすり合わせを行いました。こうした準備により、参加者一人ひとりに対して落ち着いて丁寧な対応が可能となり、説明会全体の満足度向上につながったと考えています。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

早めの段階で段取りを立てておくのをお勧めします。

必ず最初の予定とは異なる事象が発生するので、それに対処するためにも早めの行動をお勧めします。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

T-ACT を利用できたことで、大学の教室や設備を正式に使用することができ、活動の準備や運営を円滑に進めることができました。特に、大学公認の活動として実施できた点は大きく、参加者に説明する際にも信頼性や安心感を持って受け取ってもらいやすくなったと感じています。対外的な案内や広報においても、公認団体としての位置づけがあることで、活動の趣旨や目的をより明確に伝えることができました。

また、制度として活動を後押ししてもらえる環境があることで、学生主体でも継続的な取り組みを行いやすく、大きな励みになりました。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？ ⇒5

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒5





Step into Art 〈筑波大生パイロットプログラム〉(25013A)

T-ACT プランナー　宮川　詠子（人間学群教育学類　次世代学校教育創成 SP　M1）

活動目的

1 〈Step into Art とは？〉

「Step into Art」とは、高齢者の健康増進と生きがい作りを目的とした企画です。

ウォーキングアプリ「散歩で日本一周」と刺しゅうアプリ「Artspira」を融合させたチャレンジ企画で、参加者は、日々の歩行を「散歩で日本一周」アプリで記録し、バーチャルな日本一周の旅を楽しみます。一方で、刺しゅうアプリ「Artspira」を使って自分だけの作品を創作します。目標の歩数を達成すると創作した刺しゅうデータが作品になります。健康とオリジナル作品の両方をゲットできます。

〈期待される成果〉

①健康寿命の延伸と歩行の継続：散歩で日本一周」アプリのゲーム性、ストリートビューによる臨場感、そして「日本一周パスポート」という視覚的な収集要素と作品完成という明確な目標が、日々の歩行習慣を強力に促進します。

②デジタルリテラシーの向上：スマートフォンアプリを通じた創作活動「Artspira」や「散歩で日本一周」アプリなど AI ツールへの接触機会により、デジタル機器への抵抗感を軽減し、活用能力を高めます。

③生きがいと自己肯定感の醸成：ゼロから自分で生み出した絵が刺しゅう作品として完成する喜び、日々の継続的なウォーキングが、大きな生きがいと自己肯定感につながります。

④創作活動の継続と発想力の刺激：段階的な創作プロセスと、自由な表現の機会、そして旅やバーチャルビューからのインスピレーションが、今後の趣味活動への意欲を刺激し、発想力を高めます。

⑤地域交流の促進：共通の体験を通じた参加者間の交流や、作品発表会（オンライン、オフライン）、多世代交流の機会を創出します。

⑥経済的インセンティブと地域経済への貢献：完成した刺しゅう作品をトートバッグや T シャツなどに展開し、「身につける刺しゅうアート」として販売することで、高齢者自身の活動の対価を得る機会を創出します。得られた収益は、参加者が化粧品を購入したり、散歩アプリで達成した目的地のご当地グルメや特産品を購入したりするなど、個人の生活の質向上や、地域経済への還元に充てられることを目指します。（本企画のパイロットプログラムでは⑥を目的とした販売等の活動を行わない予定です。）

2 〈Step into Art ―筑波パイロットプログラムー とは？〉

今回は「Step into Art」の企画を高齢者施設で本格実施する前のパイロット企画です。筑波大生の皆さんに体験して頂き、この企画の有効性や課題を検証します。

具体的な活動計画

●具体的な活動計画

1．【実証研究期間：7/9～7/15】

参加者募集を行い、やり方について説明し、理解してもらいます。

具体的な方法は以下です。

- 企画者側が、先行して「散歩で日本一周」アプリ、「Artspira」アプリを自分のスマホにダウンロードして動作確認をします。（すでに確認済み）
- 企画者側が「Artspira」アプリのテンプレートを使用して刺しゅう作品のデータを完成させます。（すでに確認済み）
- 参加希望者には、「Step into Art」の動画を視聴してもらい、手順を確認してもらいます。また、「Step into Art」の趣旨と手順を理解してもらいます。

2．【チャレンジ期間：7/16～7/25】

参加者にアプリを用いて実際に体験してもらいます。具体的な方法は以下です。

- アプリの準備：参加者は、各自の空き時間を利用して「散歩で日本一周」アプリで歩数を記録し、Artspira アプリで刺しゅうにしたい絵を描いたり、テンプレートを活用して日々修正を行いながら図案を仕上げていきます。
- 歩数目標：設定期間内の 4 日間の累計歩数目標20,000歩です。 1 日5,000歩はあくまで目安とし、ボランティアは自分のペースで歩数を稼ぐことができます。
- 達成条件：設定期間内の総歩数が目標（20,000歩）を超えれば、最終的な刺しゅう制作に進めます。（刺しゅうデータを刺しゅう作品に）
- データ送信：参加者はチャレンジ終了後、自分で作成した刺しゅうデータを提出します（T-ACT において

あるミシンにスマホを近づけて刺しゅうデータを送信)。
・参加者は、「Step into Art」の動画の手順⑥にある QR コードを読み取り、必要なデータを企画・運営側に送信してもらいます。

〈データ提出はこちらから↓〉
https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSdZsCGbwCQPpVQZkfL3MwpFbhmbwI9KRdX0QFAOJvHw89xImw/viewform?usp=header

3．【作品刺しゅう制作・フィードバック収集期間：7/25〜8/4】
送られてきた作品の刺しゅうを制作する。また、参加者よりフィードバックをもらいます。
・運営チームのメンバは、刺しゅうデータを刺しゅう作品に仕上げて、参加者に渡します。
・参加者は作品を受け取り、「Step into Art」の動画の⑦にある QR コードを読み取り、今回の企画のフィードバックを行います。

〈Step into Art 事後アンケート↓〉
https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSeS0pyxm35ta2tH9PBIpy18Qks9xdrDKNbnS_HtdjmR_iLSSw/viewform?usp=preview

4．【振り返り期間：7/25〜9/30】
参加者からのフィードバックのアンケートをもとに報告書を作成する。
より多くの方に参加してもらえるよう、次の活動を検討する。

活動場所
①歩行、刺しゅうデータ作品作成：個人の自由
②刺しゅう作品のデータの提出場所：T-ACT フォーラム
T-ACT フォーラム：9:15〜17:00（12:15〜13:15お昼休み）
③刺しゅう作品の受け渡し場所：後日連絡

活動期間
2025/07/08〜2025/09/30

対象
学生・教職員

T-ACT オーガナイザー／パートナー
O：小林幸佳（人間総合科学学術院人間総合科学研究群（博士前期課程）教育学学位プログラム次世代学校教育創成）
P：飯田順子（人間系　教授）

備考
■協力
今回の企画は、brother（ブラザー販売株式会社）の協力をいただいております。
（刺しゅうデータを送信して刺しゅう制作ができるミシンを 2 週間借りる予定）

■活動のために利用するアプリについて
① Artspira（アートスピラ）
・brother Artsspira アプリ
・無料（一部課金あり。ただし、本企画では無料の機能のみで活動します。）
https://faq.brother.co.jp/app/answers/detail/a_id/12844/~/%E3%80%90artspira%E3%80%91artspira%EF%BC%88%E3%82%A2%E3%83%BC%E3%83%88%E3%82%B9%E3%83%94%E3%83%A9%EF%BC%89%E3%81%AE%E7%B4%B9%E4%BB%8B
②「散歩で日本一周」歩数計・ウォーキングアプリ
・スマホ用のアプリ　／　無料

■日本語ポスター
https://drive.google.com/file/d/1JE71gNQBukL_vBXYysdVZB4Kqzq8jFPN/view?usp=drive_link

■英語ポスター
https://drive.google.com/file/d/1ggRmOMCpgWcP69ze6jFRlYhpL-km6DBQ/view?usp=drive_link

■日本語　企画案内動画
https://drive.google.com/file/d/1wH2kP5NNb5n1bdDXh_qA97DQdjNeN2Oo/view?usp=drive_link

■英語　企画案内動画
https://drive.google.com/file/d/1tAtSExvKqJ0zytPNvUSFXkMd50-fnSK-/view?usp=drive_link

■アンケート URL
〈データ提出はこちらから↓〉
https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSdZsCGbwCQPpVQZkfL3MwpFbhmbwl9KRdX0QFAOJvHw89xlmw/viewform?usp=header

〈Step into Art 事後アンケート↓〉
https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSeS0pyxm35ta2tH9PBIpy18Qks9xdrDKNbnS_HtdjmR_iLSSw/viewform?usp=preview











活動報告

実際の活動内容

1　Brother とのやり取り

（1）4 月中旬に brother 東京ショールームのスタッフに直接本企画の内容説明
（4 月初旬に brother 経営関係者に企画内容を相談済み）

（2）4 月下旬に brother の担当スタッフとメールのやり取りを開始

（3）6 月に刺しゅうミシンの具体的な貸し出し日程の決定

（4）刺しゅうミシン貸出期間
第 1 次貸出期間：ミシン型番（PICNO KW）7/15～8/18
第 2 次貸出期間：ミシン型番（CR2600W）8/1～9/12

2　企画準備

（1）企画者側で無料アプリ「散歩で日本一周」、「Artspira」を自分のスマホにダウンロードして動作確認

（2）「Artspira」アプリのテンプレートを使用して刺しゅう作品のデータを完成

（3）企画内容の動画の作成

（4）企画内容の日程ポスターの作成（企画内容の動画をポスター内に QR コードで記載）

3　参加者への企画周知

（1）2025入学の学校教育領域のメンバー53人にラインを利用し、本企画の趣旨、本企画動画、日程ポスターをアップした。

（2）国語科領域や学校領域の学生に学習室にて口頭で企画内容の説明

（3）Student Support Center 企画の English Chat にて同じテーブルの留学生たちに本企画を説明し、一緒に企画動画を視聴、参加の依頼をした。

（4）知り合いの学生に口コミで企画内容の説明、動画の視聴、参加の依頼をした。

4　実証研究期間：7/15～8/24

（1）貸し出し刺しゅうミシンの動作確認
・ミシン内蔵の刺繍データから作品作成までの手順の確認と刺しゅう作品の完成
・企画者スマホの「Artspira」アプリで作成した刺しゅうデータをミシンへの転送動作確認後、刺しゅう作品の完成

（2）個人の「Artspira」で作成した刺しゅうデータをミシンへ転送する手順を写真付きで作成

5　実施期間：8/25～9/8

（1）参加者の活動手順
①アプリのインストール
②「散歩で日本一周」アプリで行うこと：歩数目標は 4 日間の累計歩数目標20,000歩。 1 日5,000歩はあくまで目安とし、参加者は自分のペースで歩いた。（設定期間内の総歩数が目標（20,000歩）を超えれば、刺しゅう制作に参加条件達成）
③「Artspira」アプリで行うこと：テンプレートを活用した刺しゅうデータを作成。参加者はチャレンジ終了後、自分で作成した刺しゅうデータを刺しゅうミシンに転送。（企画者がいる場合がデータ転送代行）
④参加者は、「Step into Art」の動画の手順⑥にある QR コードを読み取り、必要なデータを企画者に送信。
〈データ提出場所↓〉
https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSdZsCGbwCQPpVQZkfL3MwpFbhmbwl9KRdX0QFAOJvHw89xImw/viewform?usp=header

（2）企画者側の活動手順
①参加者の刺しゅうデータをもとに作品を完成。
②刺しゅう作品を参加者に贈呈

6 【フィードバック収集期間：9/1～9/15】
○参加者は作品を受け取り後、「Step into Art」の動画の⑦にある QR コードを読み取り、今回の企画のフィードバックを企画者に提出。
〈Step into Art 事後アンケート↓〉
https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSeS0pyxm35ta2tH9PBlpy18Qks9xdrDKNbnS_HtdjmR_iLSSw/viewform?usp=preview

7【振り返り期間：9/15〜9/30】
○参加者からのフィードバックのアンケートをもとに報告書の作成。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒30％

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

①ミシンの下糸がからまり、初めうまく刺繍ができなかったこと。
② brother の刺しゅうアプリのデータをミシンに転送することがはじめできなかったこと。
③時期が夏休みと重なり校内に学生がほとんどいなかったこと。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

①取扱説明書を再度読み、それでも解決できなかったときは brother のヘルプデスクに電話をして解決した。
②ネット環境が大学内のものを使えないことが分かった時は、T-ACT のスタッフの方の協力を得てテザリングをしてネットにつなぎ、転送環境を準備することができた。また転送する時に PIN コードでつなげるまでのやり方が複雑で brother のヘルプデスクに電話をして解決した。
③校内にいた M2の先輩にも協力してくれるようにお願いした。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

この「Step into Art」トライアル企画は、私自身の身近な体験から生まれたものであった。100歳を迎える身近な高齢者が漏らした「一日一日やれることがなくなっていく。昨日までできたことが今日できなくなっている。毎日何を支えに生きていけばいいのだろう」という切実な言葉が、企画の最も深い動機となっている。

現代の日本では、街を見渡せば高齢者の多さが目につく。医療、介護、年金といった社会保障問題に加え、高齢者が労働現場で支え手として働かざるを得ない状況は、現在の社会構造の歪みを示している。学校現場においても、コミュニケーションに困難を抱える子どもや、将来の夢を持てずに迷う子どもが増加し、家庭力や地域力の低下によって学校の負担が増している。あらゆる場所で人と人との繋がり、温もり、そして「ほっとする」瞬間が失われつつあると感じている。高齢者たちは、戦後の混乱を乗り越え、私たちに未来のバトンを渡してくれた世代である。それにもかかわらず、一部のマスコミや経済学者から「老害」や「集団自決」といった非人道的な言葉が投げかけられる現実は、あまりにも受け入れがたいものであった。少子高齢化が進む中で、高齢者を支えることが困難になっているという構造的な問題は理解できる。だからこそ、高齢者自身が「自分らしく生きる」ための工夫を模索する必要があると考えた。

この企画の第一の目的は、もちろん高齢者の健康維持である。しかし、それ以上に重要視したのは、「歩く」という日常的な行動を、自分だけのオリジナル作品を作る「創作活動」と結びつけることで、大きな活動誘因となり、生きる支えを提供することだ。日々の歩数目標を達成することがバーチャルな日本一周の旅に繋がり、その集大成として Artspira アプリを活用した刺しゅう作品が完成する。これは、高齢者にとって単なる趣味の範疇を超え、「まだ自分にもできること」「自分が生み出したもの」という自己肯定感を高める機会になるはずだと確信している。さらに、ゆくゆくはこの刺しゅう作品をトートバッグやタオルなどに仕立てて販売したり、展示会を開いたりすることで、高齢者の経済活動への参加や自己実現の機会に繋げたいという大きな構想を持っている。

今回の筑波大学の学生向けトライアルは、多くの貴重な教訓を与えてくれたが、正直に言えば「成功だったとは言えないかもしれない」という気持ちがある。主な反省点として、夏季休暇中の実施となったこと、異常な暑さの中での「歩く」という活動が学生にとって大きな障壁となったこと、そして企画の周知・広報のやり方に問題があり、参加人数が予想以上に少なかったことが挙げられる。検証すべきアプリの連携や Artspira の操作性については一定の知見が得られたものの、企画全体として十分な参加者からのフィードバックを得るには至らなかった。しかし、この失敗とも言える体験は、企画の核となる要素の重要性を再認識させるものであった。学生という若年層にとってさえ、モチベーションを維持することが難しかった「歩く」という行為は、健康維持が不可欠な高齢者にとっては、オリジナルの刺しゅう作品という大きな動機付けがなければ継続が困難であるという裏付けになったと言える。

現在、Brother 担当者へのミシン再貸し出しを依頼し、もう一度筑波大学でトライアルを実施するか、あるいは当初の目標である地域の高齢者向けに直接プログラムを実施するべきか、迷っている状況である。今回の体験を通じて、企画の核となる価値（歩行と創作の連動）は非常に大きいこと、そして、周知・広報戦略の徹底的な改善が必要であることが明確になった。今後はこの教訓を活かし、企画の真の対象である地域高齢者のもとで、この「Step into Art」を成功させたいと考えている。この学生トライアルは、本番に向けた重要なステップ、すなわち「失敗から学ぶ」貴重な経験であったと言える。

参加者への影響

心理学を学んでいる友人に企画内容を伝えた際、「高齢者にとって大きな喜びと自己肯定感に繋がる活動だ」という言葉をもらった。この心理的な視点からの評価は、企画の意義に対する確信を深めるものとなった。さらに、その友人は企画に強い興味を持ち、自ら進んで最初のトライアル参加者となってくれた。

運営に協力してくれた仲間からは、「これは修士論文のテーマにできるのではないか」といった積極的な応援の言葉を受けた。初めは準備や進行がなかなか進まない運営状況であったが、この言葉は、企画の持つ実践的な可能性を改めて認識することができた。

この企画に参加してくれた留学生は、brother の Artspira アプリを使って簡単に刺しゅうデータを作成できるプロセスに強い興味を示し、驚くほど素早く作品データを完成させた。彼女の反応は、デジタル技術と創作活動を結びつけるというこの企画が、日本人学生だけでなく、異文化を持つ留学生にとっての大きな関心を引き出す可能性があったと感じる。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

この「Step into Art」企画は、一人の高齢者の方の、社会とのつながりや生きがいへの願いから始まりました。私たちが社会を見渡すと、医療や経済の課題だけでなく、地域や人々の心が希薄化しているという、難しい現実にも直面しています。私たちの未来は、誰かが用意してくれるものではありません。私たち自身が「自分には何ができるだろうか」と考え、実行に移す、その一歩から創造されるものだと信じています。

だからこそ、未来のプランナーの皆さんに心からお願いしたいことがあります。それは、社会情勢や世界情勢に広い関心を持ち続けてほしいということです。ニュースや情報を単に受け取るだけでなく、多角的かつ多面的な視点で物事を捉える姿勢を大切にしてください。そして、表面的な情報に惑わされないために、歴史をしっかりと学び、自分の中に揺るがない「軸」を持つことが非常に重要です。その自分軸があるからこそ、困難な挑戦の中でも、ブレずに最適なプランを進めることができるようになると思います。

私たちの未来は、まさに「自分たちで創る」という精神をもって、果敢に挑戦する皆さんの手に委ねられています。この筑波大学の T-ACT プログラムは、まさにその挑戦を形にするための貴重な機会です。社会貢献を目指す人材となるための、有意義な実践の場として、ぜひ T-ACT を最大限に活用してください。アイデアを恐れず出し、失敗を恐れず挑戦し、仲間と共に学びを深めることで、皆さんの未来は大きく開かれていくと思います。がんばってください。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

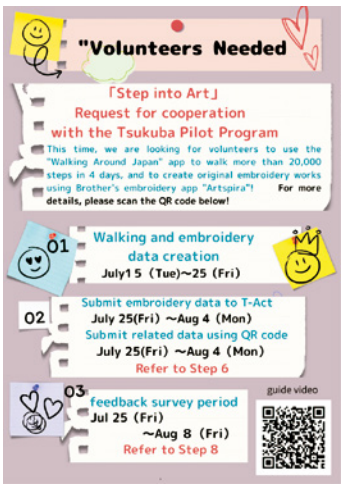
企画を最初に相談させていただいた時から、そしてミシンへのデータ転送で困ってしまった時も、親身になって関わってくださったことに、心から感謝しています。特に、大学が夏休みに入った時期も、T-ACT の部屋をほとんど一日中、気持ちよく使わせていただけたおかげで、集中してミシンと格闘する貴重な時間を持つことができました。

今回の活動を通して、改めて T-ACT が私たち学生にとって、有意義でかけがえのない場所であるかを実感しました。私たちが「やってみたい」と挑戦したいと思ったことを心から応援してくれる最高の場所です。T-ACT のおかげで、今回の企画に対し全力で取り組むことができました。本当にいろいろお世話になりありがとうございました。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒3





StartupWeekend つくば 14th（25015A）

T-ACT プランナー　溝田　光志（理工学群応用理工学類3年）

活動目的

Startup Weekend は、アイデアをカタチにするスタートアップ体験機会の提供を通じ、アントレプレナーを応援するコミュニティを地域毎に育てることを目的としています。解決すべき課題に対するアイデアを持った人たちが次々と生み出され、解決プロセスを学びながらコミュニティとして支 え合うことができるような機運を醸成し、また、風土を作ることを目指しています。

アントレプレナー支援のプログラムとしての立ち位置は、アイデアを生み出し、開発し、伝達することに重点を置いた、アイディエーションプログラムです。

前回の「StartupWeekend つくば 13th」で屋外に繋がる co-en を会場にして開催しました。無事に開催できた経験や終了後の振り返りからの課題点を反映し、今回は前回よりもつくば市の現地の人とのつながりを大事にしながら開催いたします！

具体的な活動計画

■イベント概要

StartupWeekend は、週末を利用してアイデアをカタチにする、スタートアップの体験ができるワークショップです。

StartupWeekend は、初日の夜にアイデアを発表するピッチから始まります。アイデアに共感したメンバーと共にチームを組み、最終日の夕方までにユーザエクスペリエンスに沿った必要最低限のプロダクト、そしてビジネスモデルを一気に創り上げます。

２日目の午後には、実際に事業を起こした経験者から、各チームのプロダクトに対して批評とアドバイスを受けられるコーチングセッションがあります。スタートアップの先輩からのフィードバックをもとに、プロダクトアイデアをブラッシュアップすることが求められます。

そして、３日目の夕方に、約40時間をかけて作り上げたプロダクトを発表し、評価（ジャッジ）されます。ジャッジを行うのは、自身で事業を立ち上げ、軌道に乗せ、それを牽引されている方々です。

■参加対象

StartupWeekend に興味を持ち、３日間を走り抜けるだけのやる気と気概がある方。

■募集方法

Peatix の申し込みフォームより参加申し込み。
https://swtsukuba20250829.peatix.com/

■開催日時

2025年８月29日（金）18:00～2025年８月31日（日）20:00

■当日の流れ

８月29日（金）
・18:30　受付開始＆懇親会
・19:00　ファシリテーター挨拶
・20:00　１分ピッチ
・20:30　話し合いと投票
・20:45　チーム結成
・21:00　１日目終了＆帰宅

８月30日（土）
・09:30　２日目開始
・10:00　ファシリテーション
・12:00　昼食
・14:00　コーチング
・18:00　夕食
・21:00 2日目終了＆帰宅

８月31日（日）
・09:00　３日目開始
・12:00　昼食



・14:00　プレゼン前のテックチェック
・15:00　最終プレゼン
・17:30　審査発表
・18:00　パーティー
・20:00　3日目終了＆帰宅

■スケジュール
7月15日～ ‥‥‥‥‥T-ACT 申請準備開始
7月20日～ ‥‥‥‥‥申し込みページ公開および参加者募集開始
8月15日～ ‥‥‥‥‥参加者向け案内開始
8月29日～8月31日‥イベント当日
9月30日ごろ ‥‥‥‥アフターイベント（振り返りイベント）

活動場所
co-en イベントスペース

活動期間
2025/07/01～2025/12/31

対象
学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー
O：大澤怜二（筑波大学 情報学群情報メディア創成学類 4 年）
P：川口一画（システム情報系）



活動報告

実際の活動内容

・7/27　芸術専門学群の卒業生 2 名によるアートにまつわるワークショップを開くことで、"Startup Weekend" 知ってもらうためのプレイベントを行いました。
・8/29　本番 1 日目、参加者同士でピザを囲んで懇親会を開き、この 3 日間でのアイデアソンのメンバーの割振りを決めました。
・8/30　本番 2 日目、メンターを招き、グループ毎にコーチングしていただきました。
・8/31　本番最終日、審査員をお呼びし、グループ毎に発表を行いました。その後、会場であるアシタエラボ様のご協力のもと、スタッフや参加者などを含め、集まった全員で懇親会を行いました。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒64％

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

アイデアソンにおいて当事者の意見を聞くために探すのが大変だった。特に土日であったため、専門家に聞きに行くことが困難でした。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

参加者同士やスタッフを通じて知り合い伝手にマッチングしてもらいました。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

近年、アントレプレナーシップ関連のイベントが増えており、大規模なカンファレンス、ピッチコンテスト、育成プログラムなどが都心を中心にいたるところで開かれるようになっています。そのような中で、私はこれらのイベントが飽和状態にあるのではないかと感じました。理由は次の 3 点です。

第一に、SNS で宣伝しようとした際、同様のイベントをビジネスとして手がける競合がすでに多数存在していたことです。第二に、宣伝のためにネットワーキングイベントを訪れた際、声をかけた相手が大抵別のアントレプレナーシップイベントに参加者やスタッフとして関わっていたことです。そして最後に、同じようなイベントに参加すると、また別の複数のイベントへの招待が届いたことです。

このような状況下で、参加者から費用を集めつつも運営はすべてボランティアで行うアイデアソンに、どのような意義があるのかを何度も自問しました。

このイベント運営を通じて私が学んだのは、単発のイベント開催そのものよりも、そこから生まれるコミュニティこそが集合知の形成において鍵を握っているということです。 だからこそ、個々のイベントの完成度を高めること以上に、いかに定期的に開催しコミュニティを維持・発展させていくかが重要なのではないかと考えました。

参加者への影響

参加者からは自分にとっての影響として、主に以下の 3 つの類の声をいただきました。

第一に、他の参加者の前向きな姿勢や会場の熱気によって、自身の意欲も向上したというものです。次に、”0 から 1 を生み出す” プロセスを経験することで、実践的な視点とスキルを学ぶことができたというものです。最後に、多様なバックグラウンドを持つ人々との出会いと交流によって価値のある指摘を受けることができたというものです。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

筑波大生を対象にイベントを行う際、筑波大学の敷地内で実施するという事実は、参加を検討する方にとって大きな安心材料となるようです。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

イベントの運営母体が ”怪しい団体ではない” という安心を示すうえで、T-ACT のロゴを使用できたことがとても心強かったです。

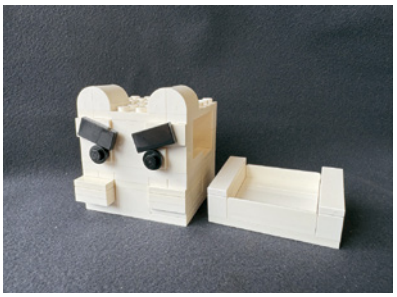
自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒4

レゴ®でからくり箱を作ろう（25017A）

T-ACT プランナー　篠原　　理（数理物質科学研究群　M1）

活動目的



レゴ® でからくり箱を作ることを通して、レゴブロックの楽しさ、面白さ、自由さを伝えることが主な活動目的です。

からくり箱とは、箱根の小田原地方の伝統工芸品「秘密箱」をルーツにもつ、「どうにかしないと開かない箱」です。からくり創作箱研究会（https://karakuri.gr.jp）の HP から様々なからくり箱の作品を見ることが出来ます。本場のからくり箱は木製かつ職人の手作りであるため、箱根まで足を延ばさないと触れられる機会も少なく、また、手軽に買えるものでもありません。

それを、レゴ® で作ろう！というのがこのワークショップです。

このワークショップを立ち上げた動機は、多くの人にレゴ® のからくり箱というマニアックなの世界を知ってほしい！あわよくば創作仲間が欲しい！という僕の小学生のころからの願いです。レゴ® は全体的に好きなのですが、家や飛行機などを作る造形よりは、仕組みや機構を試行錯誤しながら作るのが特に好きです。言い換えると、「レゴ® でこんな表現が出来るんだ！」というよりも「レゴ® でこんな動きが出来るんだ！」という驚きを求めて創作しています。

レゴ® で作成することのメリットは、職人技がいらないのはもちろんのこと、間違えたり仕組みを変えたいと思ったりしたときにやり直しが何度でも出来るというのがあると思います。また、パーツの形が限られていることも、新しい仕組みを考える上では思わぬヒントになってくれる場合もあります。

今回のワークショップでは事前に企画者が設計したものを、手順書を見ながら組み立てていただきます。今回のワークショップを入り口としてかなりマニアックな世界ではありますが、レゴ® のからくり箱に興味を持っていただければと思います。

具体的な活動計画

・活動計画

9/17～9/30　からくり箱の設計

篠原がからくり箱の設計、手順書の作成などを行います。

10/1～10/7　広報準備

広報のためのポスターの作製、印刷などを行い、承認後に速やかに広報を行えるように準備をします。SNS での呼びかけの方法も考えます。

10/8～10/22　広報

ポスターの掲示やレゴ® やモノづくりに興味がありそうなサークルや研究室に声を掛けに行きます。SNS での呼びかけも行いますが、できるだけ自分の足で宣伝をしに行こうと思っています。レゴ® のからくり箱、と聞いただけではなかなか想像しづらい部分があると思うので実際に触ってもらうことで興味を持ってもらえたらと思います。

10/15　レゴブロック注文

その時点での参加人数に応じてレゴブロックの注文を行います。

10/23、24　ワークショップ当日

以下に詳細を記述します。

10/25～10/31　活動報告書まとめ

ワークショップでのアンケートなどをもとに、今回の活動の報告書をまとめます。特に、これまでのレゴ® のイメージを変えることが出来たか、からくり箱を作ることに興味を持ってもらえたか、第二回の需要があるかどうかなどが知りたいです。

・ワークショップ当日の流れ（10/23、24　18:15～19:30）

18:15～18:30　全体説明

からくり箱とはどのようなものか？ということやレゴブロックのパーツの基礎的な説明、ブロックの外し方のコツなど初めての方でも問題なく始められるように説明いたします。

18:30～19:10　からくり箱作成（40分間）

本家と同じような細かい手順書を用意します。それに従って各自進めていただきます。少しわかりにくい手順のところは全体で説明します。もちろん個別で質問して頂いても構いません。

作成したからくり箱はお持ち帰りいただけます。

19:10～19:30　まとめ

ワークショップの簡単な振り返り、まとめを行います。アンケートの記入もご協力いただければ幸いです。
※からくり箱の作成が早く終わった場合は、代表（篠原）が作成したこれまでのレゴ® のからくり箱で遊べるようにいくつか用意します。ぜひチャレンジしてみてください。

・ワークショップの参加費、参加方法について
参加費：2,000円（レゴブロック代）
参加方法：以下のフォームよりお申し込みください。
https://forms.office.com/r/zbtUBcPDRn

からくり箱は企画者（篠原）が設計しているので、既存のセットを購入するわけではありません。
パーツ単位でブリッカーズ（https://brickers.jp）から購入します。

活動場所
3A212

活動期間
2025/09/17～2025/10/31

対象
学生・教職員

T-ACT オーガナイザー／パートナー
O：大牛瞭（工学システム学類　B4）
P：関場大一郎（数理物質系）



活動報告

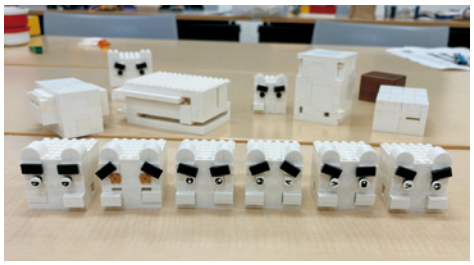
実際の活動内容
レゴ® でからくり箱を作成するワークショップを行った。

活動の詳細は以下の通りである。
9月17日～9月30日
プランナー（篠原）がワークショップで作成するからくり箱の設計を行った。まずは試作品を作成し、ワークショップの参加費をなるべく抑えるために、設計の変更や使用するパーツの選択を行った。今回使用するレゴ® ブロックはパーツ単位でブリッカーズ（https://brickers.jp）さんから購入するため、同じ構造でも使用するパーツが違えば値段が大きく変わってくる。そのため、できる限り値段を抑えるために使用するパーツを吟味する必要があった。
手順書の作成は bricklink® の Studio を用いた。
10月1日～10月13日
試作品を2セット分購入し、1つはプランナー自身で組立て、もう1つはオーガナイザーに組み立ててもらい、作成した手順書に不備はないか、発注したパーツでちゃんと組み上がるか、組み立てにどれくらいの時間がかかるのかを調べた。
また、広報用のポスターや申込フォームを作成した。10月10日に承認を頂いた。
10月14日～16日
広報用のポスターを大学の掲示可能な場所にできる限り行った。広報の詳細については「実施中の困難と解決策」にて述べた。
10月17日
レゴ® ブロックを12セット分を購入した。
10月20日
不足しているパーツがあったのでそれを追加で購入した。
10月23日、24日
ワークショップを開催した。延べ15名の方に参加していただいた。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒100％

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと



一つ目は学業との兼ね合いもあり、承認を頂いてから 2 週間後にワークショップを開催する計画を立てていたので、短期間でしっかりと広報が出来るかどうかが課題であった。

二つ目はワークショップの参加費の設定が難しかった。最終的には2,000円という設定にしたが、当初は1,000円で行いたいと考えていた。

T-ACT のこれまでのワークショップでも、2,000円はもちろん、1,000円台も見当たらなかった。レゴ® 自体が安価ではない玩具であるので、レゴ® の一般的な相場に馴染みがない人からすると、かなり高額な参加費になってしまった。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

一つ目の広報については、T-ACT の方から学内でポスターの掲示が可能な場所やチラシの設置が可能な場所を教えて頂いた。その他にもポスター掲示が可能なところを探し、最終的には60枚ポスターを掲示した。ポスターは目立つように赤や黄色をメインとした色を用いて、サイズは A3にした。

具体的な設置場所は以下の通りである。

【ポスター掲示場所】

・第一、二、三、体育芸術、図書館情報エリアの掲示板（各支援室の学生課で許可を得た。）

・ 3A 棟、3B 棟、3L 棟、F 棟、総合研究棟 B の各棟のエレベーター横の掲示板（システム情報工学支援室の総務課で許可を得ることが出来た。）

【チラシ設置場所】

・第二、三エリアの T-ACT が設置しているチラシ置き場

・中央図書館のチラシ置き場

・体育・芸術図書館のチラシ置き場

また、ポスターの掲示やチラシの設置だけでなく、今ワークショップに興味を持ってくれそうなサークルや研究室に直接宣伝を行ったり、知人に頼んで学年の LINE グループに宣伝文を送ってもらった。

参加者の目標の人数は10人であったが、ワークショップ前日の10月22日時点で申込者14人に達した（内一組は親子連れ）。特にポスターやの影響が大きかった。短期間の宣伝ではあったが想定よりも多くの方に参加していただくことが出来た。

二つ目の価格設定については、ワークショップ後のアンケートにて参加費が妥当であるかどうかを尋ねた。15人全員が妥当であると回答して頂いたので、結果的には価格設定に問題はなかったと言える。より細かく見ると、15人中 4 人がワークショップ前の時点では、「少し高いと感じた」「参加を迷った」といった意見をしてくださった一方で、3 人の方からは「むしろ安いくらい」「良心的な価格」といった意見をいただいた。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

自分の趣味が多くの人に受け入れられる瞬間を目の当たりにするのは非常に新鮮で嬉しい体験だった。

普段からレゴ® のからくり箱を持ち歩いていれば、「趣味は何ですか？」と尋ねられた時にぱっと出して「これを作ることです！」と胸を張って言えるが、自分がからくり箱を携帯していることは稀で、大抵口頭でレゴ® のからくり箱を説明することになった。そういった場面で一度もうまく伝えられたことが無かった。

全力で自分の趣味を現物を見てもらいながら語る、というこれまで友人との間でもあまりしてこなかったことを、今回ワークショップで行い、変な言い方ではあるが、レゴ® でからくり箱を作ることが自分の趣味であるということに気づいた。当たり前ではあるが、1 人でひそひそとからくり箱を作っている時は、これが自分の趣味だ！とは思っていないので、「趣味は何ですか？」と聞かれる瞬間以外、レゴ® のからくり箱が自分の趣味であるという認識が薄かった。しかし、今回のワークショップでレゴ® のからくり箱について語ってみると、自分でも驚くほど言葉が流れ出てきたし、普段レゴ® からくり箱に対して考えていることがこんなにあったのかと、軽い衝撃を受けながらレゴ® からくり箱は自分にとってかなり重要な趣味なんだと自覚した。ありがたいことに、その語りを温かく真剣に参加者の皆さんが聞いてくださり、興味を持ってレゴ® からくり箱を受け入れてくださった。小学生のころから15年近くレゴ® でからくり箱を作り続けてきて本当に良かったなとしみじみと感じた。

とは言ってもワークショップの進行は少し上がってしまい、これは言いたい！と思っていたことをすっかり飛ばしてしまった部分もあった。オーガナイザーの大牛君が絶妙なフォローをしてくれたり、場を和ませてくれた

りと自分にはできない芸当でワークショップ全体をまとめてくれて、無事に終えることができた。大牛君には感謝してもしきれない。

参加者への影響

以下、参加者へのアンケートからの一部抜粋である。

・定期的に開催してほしい。
・からくり箱を作るだけでなく、企画者の製作秘話やレゴ® の話も聞くことができたのがとても楽しかった。機会があればまた参加したい。
・作っていくうちにからくり箱の仕組みが分かってきて、作る面白さと仕組みの興味深さが両方楽しめるワークショップだと感じた。
・レゴ® に対するイメージが変化したきっかけにもなり、もっとレゴ® の造形について知りたいと思った。
・実際に手を動かして仕組みを学ぶことができた。
・こだわりポイントなどを丁寧に解説してくださってとても分かりやすかったし、仕組みを考えながら作れて本当に楽しかった。
・企画者のレゴ® やからくり箱に対する熱意がひしひしと感じたワークショップだった。
・もっと色々なからくり箱を作ってみたい。
・自分では普段目にしないからくり箱というコンテンツをレゴ® を通して体験することで、すごく入り込みやすく、楽しかった。
・からくり箱に対して興味はうっすらあったが、買うほどではなかったので触れてよかった。
・からくり箱という日本の文化と。レゴ® というデンマークの文化がうまく混ざっていて、和洋折衷というか温故知新みたいでとても有意義で楽しい時間だった。
・からくり箱をレゴ® で作るという発想が面白かった。今までいろんなものをレゴ® で作ってきたがこれを機にからくり箱にもチャレンジしてみたい。
・持ち帰れるものがあるのがうれしかった。

ワークショップを開いてよかったと心から思えるお言葉をたくさんいただいた。レゴ® のからくり箱の認知度を少しでも上げることができ、さらにその楽しさを伝えることができたのは大変うれしい。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

T-ACT の方々の助けを借りると、このワークショップがしたい！と思い立ってから 1 か月後には開催出来てしまいます。すごいことです。

一人ではなかなか出来ることではありません。ぜひワークショップを開きたい方は T-ACT の方々に相談してみてください。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

半ば衝動的にワークショップを開きたいと思い立ち、かなり無理のあるスケジュールでも親身に相談に乗っていただきました。本当にありがとうございました。支援室でポスター掲示をお願いする際に T-ACT で承認済みであることを伝えると、どこでもすぐに許可が下りたことには非常に感動しました。短い宣伝期間であったので大変助かりました。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒5





るりもん　わたしの蝶が消えた理由 ～絶滅から環境保全を考える～（25019A）

T-ACT プランナー　江川　和総（生命地球科学研究群生物資源科学学位プログラム）

活動目的



本企画の目的は、昆虫好きでない子供やその保護者に、昆虫の美しさや環境保全の重要性に体験的に触れてもらうことである。「架空の絶滅蝶」を題材に、ストーリー性をもった学びを提供することで、「生物多様性」や「環境保全」といった概念を楽しみながら理解できる環境を目指すとともに、芸術と科学を横断した学びの体験を通して、参加者に広い視野を持つきっかけを与えることを目的とする。

日本各地で昆虫関連のイベントは多数開催されているが、その多くは参加者が昆虫愛好者に偏りがちで、昆虫が苦手だったり、関心がない層との接点は限定的である。しかし、昆虫を取り巻く現状や絶滅の危機について知ることは、ひいては環境保全や生物多様性の意識を広く浸透させることにつながる。そのため、これまで昆虫と接点のなかった人々、特に子どもやその保護者にも、昆虫の魅力や自然の大切さに触れる機会を提供する必要がある。

本企画は、芸術分野とのコラボレーションから、「工作ワークショップ」という形をとることで、従来の「昆虫教室」のイメージを和らげ、昆虫が苦手な人の参加のハードルを下げる効果が期待される。

具体的な活動計画

○コンセプト

その昔、人知れずひっそりと絶滅してしまった蝶がいました。
世界でたった一人、あなただけが、その蝶について知っています。
どうか、記憶を頼りに標本を作って、彼らが存在した証として残していただけないでしょうか。
彼らはどこに住み、何を食べて、どうして絶滅してしまったのでしょう。

本企画は上記のストーリーから、参加者が自由に架空の絶滅蝶を考え、それを絵や文章で共有するプロセスを通して、昆虫の絶滅、ひいては生物多様性や環境保全について学ぶ機会を提供する。従来の「昆虫教室」ではなく、「工作ワークショップ」としてのイメージを先行させ、実物の昆虫は扱わないこととする。

○プログラムの流れ（約３時間、土日昼の開催を予定）
①導入
・蝶や絶滅種の簡単な紹介
・作品例や参考資料（図鑑）の提示
②架空の絶滅蝶の設定を考える
・名前（和名）、分布、生息地、生息条件、食べ物、絶滅理由などを考え、プロフィール用紙に記入
③架空の絶滅蝶のビジュアル作成
・描画やコラージュを用いて画用紙にオリジナルの絶滅蝶を作成
④標本箱の作成
・画用紙から切り抜いて、標本箱に収める（電池駆動で羽がパタパタする仕掛け付き）
⑤発表＆撮影会
・発表形式は低学年でも参加しやすい形に調整予定
・発表と同時並行で撮影
⑥解説
・種の絶滅や保全に関する解説
⑦ SNS 発信
・架空の絶滅蝶の写真と設定を投稿（個人情報は表示しない）

○対象者：つくば市内小学 3～6 年生とその保護者
期間内スケジュール
11月～１月上旬　企画準備
１月下旬～２月下旬　企画の開催

活動場所
つくば市内の交流センターでの開催を予定
既につくば市役所と連絡をとっており、企画申請後、具体的な場所を決定する。

活動期間
2025/11/01～2026/04/30

対象
学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー
O：王尾仁思（人間総合科学学術院 人間総合科学研究群 博士前期課程 デザイン学学位プログラム）
　岩田悠佑（生命環境学群生物学類）
P：藏滿司夢

備考
　活動期間内では行わないが、本プロジェクトは今後定期的な開催を予定しており、本活動で描いてもらった蝶の絵を用いた展覧会等の催し物を今後開催する予定である。

活動報告

実際の活動内容
　子供たちに「架空の絶滅蝶」を考えてもらい、そのプロフィール及びチョウの絵を創作してもらった。昆虫学を専門とする学生による解説、芸術学を専門とする学生による技術的な指導を交えつつ、保護者の助けも借り、時間内に全員が作品を完成させることができた。更に、完成した作品を用いた発表会では、運営する学生によるインタビューという形式をとることで、子供たちのほとんどが無理なく自分の作品を発表することができた。昆虫の絶滅をトピックとした解説も親子ともに熱心に耳をかたむけていた。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒70％

実施中の困難と解決策
実施中に困ったこと
　宣伝を開始してから、開催までの日程が短く、十分な集客ができるか不安であった。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか
　民間の児童館に直接メールを出し、広報用チラシを置かせていただいた。また、つくば市内の各地域交流センターに直接赴き、広報用チラシを置かせていただいた。最初に予定していた人数を集めることができなかったが、結果的にそれが無理のない参加人数であり、第一回を無事開催することができた。

活動の体験について
自分にとってどんな体験であったか
　本活動では、「現在、昆虫が急激にその種数を減らしている」という事実を、いかに子供たちにインパクトをもって伝えるかを大きな課題としていた。そこで、工作ワークショップの中に昆虫の保護・保全に関する知識を解説する時間を設けたが、子供たちがその解説にきちんと耳を傾けてくれるかという不安もあった。結果として、この試みは大きな成功を収めた。子供たちは工作に熱中するだけでなく、解説にも真剣に耳を傾けてくれた。さらに、保護者にも参加していただくことで、幅広い層の人々にこの事実を知ってもらうことも本活動の狙いの一つであったが、保護者も子供たちと同様に熱心に解説を聞いてくれた。以上のことから、本活動は当初の課題を十分に達成したといえるだろう。第一回開催として、非常に申し分のないものとすることができたと私たちは感じている。同時に課題点もいくつか見えてきたため、今後の活動に非常に良い形でつなげることができるものと確信している。



参加者への影響

参加した子供たちは、終始高い集中力で工作に没頭していた。単に作業をこなすだけでなく、自分なりに工夫を凝らそうとする主体的な姿勢が随所に見られた。完成した作品を満足そうに眺める表情からは、自らの手で作り上げたことによる強い達成感が見て取れた。

参加者からは感謝の言葉が寄せられており、「また参加したい」という次回開催への強い期待感は、本企画が子供たちの知的好奇心を刺激するとても有意義な機会となったことを示しているだろう。

また運営側においても、子供たちとの接し方や専門的な内容の平易な伝え方を実践を通じて習得できたことは、今後の対外的な情報発信に活かせる好影響をもたらした。総じて、本ワークショップは参加者・運営者双方にとって、実りある影響をもたらしたと言える。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

T-ACT 担当の先生は本当によくしていただけるので、どんどん頼ると良いと思います。
応援しております。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

広報チラシが足りなくなったときに、追加で刷ることができたのは本当に助かりました。
また、今後の活動でも T-ACT さんを頼っていければと思いますので、よろしくお願いいたします。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒5









筑波大学オタクフリマ（25021A）

T-ACT プランナー　中川　遼子（人文学学位プログラム博士前期課程1年）

活動目的

本活動の目的は大きく分けて２つ挙げられる。



①処分しにくいオタクグッズを処分できる場をつくる

オタク活動に精を出していると発生する、処分しにくいオタクグッズを欲しい人に気軽に託せる場を筑波大生に提供したい。ここでいう「処分しにくいオタクグッズ」の語は「手放したいがフリマアプリ等でも買い手が見つからず、かといって捨てるのも忍びないもの」の意で用いている。また「処分しにくいオタクグッズ」の例としては（1）ランダム商品のなかでレアリティの低いもの、（2）購入特典等の非売品で参考価格がないもの、（3）発売時期が古いもの、（4）マイナーなジャンルのものが挙げられる。これらは通常オタク同士の交換によって需要と供給を満たすことができる。しかし交換の場の中心は都内であり、つくば市に在住する筑波大生は気軽に参加することができない。大学構内でフリーマーケットを開催することによってグッズの処分に困っている筑波大生の手助けをしたいと考えている。

②筑波大学のオタク同士の交流

まだ見ぬ同好の士と出会い、交流する場を筑波大生に提供したい。本学ではオタク文化に焦点を当てた大規模イベントが少なく、交流が活発とは言い難い。さらにオタク同士の交流の中心は都内にあり、つくば在住の筑波大生がオタク同士の交流を楽しめる機会は少ない。フリーマーケットを開催して筑波大学のオタクが一堂に会する場を作り、交流のきっかけを生みたい。

具体的な活動計画

12/1～12/3の期間でオタク文化を中心に据えたフリーマーケットを石の広場にて開催及びその準備。

ジャンルや次元を問わず、自らをオタクと自認する筑波大学関係者（学生、卒業生、教職員）なら誰でも出店可能である。

【イベント準備】

- Twitter（現 X）上での発信や口コミ、チラシ配りによって広報や出店者の募集を行う。
- 出店者の募集・管理。Google フォーム上で代表者氏名・学籍番号・出店希望日時・販売予定物を入力してもらい、その後の連絡事項は大学の u アドレスにメールで送信する。
  →出店者のお申込みフォーム
  https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSeBi4oOXotbceKROy4vr5dC9WS1kzOlr8vXuHolVge-uuxPWg/viewform?usp=header
- チラシやポスターのデザイン・印刷。生活課への申請。

11/14　……広報本格化。出店者募集開始。
11/23　……出店者募集締め切り。　※ただし当日飛び入り出店可能ゾーンも作る。
11/24～25　‥出店シフト作成。
11/25　……応募者に出店可能日時やブースの場所を通知。出店者それぞれの広報開始。
12/1～３　‥‥フリーマーケット開催。

【イベント当日】

- 会場設営・片付け。机・椅子の運び出し。
- 出店者管理。出店者は第一部～第三部のうち参加可能な時間帯を選択しておく。各部終了15分前にアナウンスを行い、撤収を促す。終了時刻には完全撤収し、次の出店者が出店準備を行う。
- 飛び入り出店ブースの管理。会場の隅に５つほど飛び入り出店可能ブースを作っておき、当日希望者がいれば案内を行う。
- その他トラブル対応。

会場設営‥‥10:00～11:25
第一部……11:25～13:30
第二部……13:45～15:00

第三部……15:15～16:30
会場片付け‥16:30～18:00

【必要物品】
机３台、椅子２脚×20 ‥‥出店ブース
机２台、椅子３脚×1……受付
マイク、スピーカー……アナウンス用
看板（複数個）……会場案内用

活動場所
石の広場
広報期間の短さをカバーするため確実に学生たちの目に入る石の広場をフリーマーケット会場とする。なお防寒・強風対策を十分にして活動を行う。

活動期間
2025/11/14～2025/12/03

対象
学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー
O：境繭子（比較文化学類４年）、神谷昊大（人文学類２年）、藥袋陽仁（生物学類２年）
P：吉原ゆかり（人文社会学系）

備考
出店者には以下のルールを課す。
●社会通念上不適当と思われるもの、及び法律・関係諸条例に抵触する物品の持ち込み、販売、及び行為は禁止。
●偽ブランドや海賊版・コピー商品などの違法商品、盗品、危険物、生き物、飲食品全般の販売は禁止。
●成人向け商品の販売は禁止。
●中古品を販売する際、購入価格以上の値段をつけるのは禁止。
●出店者以外の作者による二次創作物の販売は禁止。また二次創作物を販売する際は著作元のガイドラインに従う。
●出店に際して発生したゴミはすべて持ち帰る。
●十分な強風・防寒対策を取る。
●イベント当日は運営スタッフの指示に従う。

雨天時対応は以下の通りである。
●雨天中止。
●中止連絡は当日朝9:00までに行う。出店者にはメール、その他来場者に向けてはTwitter（現X）にて通知する。



活動報告



実際の活動内容

【イベント準備期間】

①広報

- SNS 運用

  Twitter（現 X）にて筑波大学オタクフリマ公式アカウントを作成し、情報発信を行った。イベントの詳細や出店者募集リンクのほか、売ってほしいものの例や出店者情報を拡散した。

- ポスター配布

  制作したポスターの配布願を学生生活課に提出し、大学構内でのポスターを配布した。学生による石の広場や図書館での配布のほか、複数名の教員に授業での配布を依頼した。

②出店者管理

- 募集

  SNS 上で出店者募集の Google form を公開した。最初の設問で注意事項に同意してもらい、当日のトラブルを回避する工夫をした。

- 配置決め

  石の広場にどのように出店スペースを設けるか決定し、出店者を割り振った。

- リマインド

  出店前日に時間帯や注意事項についてのリマインドメールを送付した。

【イベント当日】

①会場設営・片付け

机や看板など必要な物品を T-ACT 推進室から石の広場まで運搬した。また養生テープを地面に貼って出店スペースの区画を作った。

②会場アナウンス

出店者に準備や片付けを促すほか、通行人に向けてイベントの宣伝を行った。

③当日飛び込み出店枠対応

注意事項を載せた同意書を作成しておき、希望者には学籍番号と氏名を記入してもらった。

④雨天時対応

雨の予報が出ている 3 日目は SNS でこまめにアナウンスを行いながら運営を行った。出店予定者にはメールでの通知も行い、悪天候を理由とした出店キャンセルを受け付けた。会場では雨が降った時点で中止の判断を下せるように待機した。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒80％

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

- 石の広場の使用許可問題

  会場とした石の広場について、大学のどの組織が管理しているか決まっておらず集会願を提出することができなかった。

- 広報期間の短さ

  準備期間が 1 ヶ月と非常に短く、また 1 週間以上の推薦入試休みがあり、十分な広報が行えない懸念があった。

- イベント当日の会場設営に動員できる人数が少ない

  オーガナイザーが少ないことやイベントが平日開催なこともあり、当日の会場設営に参加できる人数がとても少なかった。

- 平日開催のため授業のある学生は出店しにくい

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

- 石の広場の利用許可問題

  学生生活課と施設部の職員の方々とお話しする時間を設けていただき、双方の認識を明らかにしてもらった。その結果、使用許可に関しては学生生活課が担うことに決定した。また施設部は施設の修繕等を担う。

- 広報期間の短さ

  往来する人が多く目につきやすい石の広場を会場とすることで、事前にイベントについて知らない層にも来場してもらいやすくした。また当日飛び込み出店枠を設け、出店数の底上げを図った。飛び込み出店数は 3 日間でのべ 5 店舗であった。

▪ イベント当日の会場設営に動員できる人数が少ない
当初予定していた机と椅子による出店ブースの設営を断念し、地面に養生テープで区画を作って敷物を用いる形式に変更した。
▪ 平日開催のため授業のある学生は出店しにくい
1日を3つの時間帯に分ける三部制を導入した。第一部を11:25~13:30、第二部を13:45~15:00、第三部を15:15~16:30のように、大学の授業時間に合わせて3つに区切った。各部ごとに出店者の募集を行うことで、空きコマに気軽に出店してもらえたのではないだろうか。また三部制を導入しても開催日に空きコマがない学生は出店・来場が困難であるため、12/1~3の期間イベントを開催することで、参加可能な層の拡大を図った。

活動の体験について
自分にとってどんな体験であったか
▪ 自己分析の深まり
自分の考えた企画でたくさんの人たちが楽しそうにしていて、まず率直に、とても嬉しかった。思い描いていた素敵な空間になったのではないだろうか。人々の笑顔や交流を生むことが自分にとって大きなやりがいを感じることなのだと再確認した。就職活動でもこの気持ちを軸にしている。
▪ 企画者としての難しさ
オーガナイザーに仕事を振るためには、自分の頭の中にある計画を全て適切言語化して伝えなくてはならず、それがとても難しかった。意図したことと違う伝わり方をしてしまったり、抜けがあったりした。そのため完璧に遂行することを諦め、疑問点があった場合に質問しやすい雰囲気づくりを心掛けた。
▪ 周囲の人たちのあたたかさ
今回のオーガナイザーは3名であったが、その他にもたくさん手伝ってくれる人がいた。振り返ると、誰が欠けてもイベントの完遂は難しかっただろう。自分1人でできることはほんのわずかであることを痛感するとともに、力を合わせることの大切さや尊さを学んだ。また周りにはこんなにも自分を助けてくれる人で溢れているのだと、これまでの大学生活で積み重ねてきたものの重みを知った。

参加者への影響
3日間でのべ300名の来場者、のべ28店舗を記録した。イベント当日は来場者・出店者・運営が入り乱れ、様々な交流が生まれ、多くの人の笑顔が見られた。当初予想された同じ趣味を持つ来場者と出店者の交流だけでなく、出店者同士の交流が生まれ、互いの好きなものを紹介し合っていたのが印象的だった。事後アンケートでは総合的な満足度に関する設問で「大変満足」「満足」と回答した人は全体の100% であった。またその理由として「普段周囲の人間と自ジャンルについて話せる機会があまりないため、出店者や来場者といろいろ話せて楽しかった」「女オタクが出会い、交流する場として機能していたと思う」「家のものも少し処分できてありがたかった」という意見が挙げられた。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ
「こんなことやれたらいいな」をアイデアのままにせず、ぜひ一歩踏み出してほしいと思います。自分のことをもっと知れたり、周囲の人のあたたかさを再確認できたりして、大変良い経験ができました。今回は運営メンバーやその他のお手伝いしてくれた方々がそれぞれの得意分野で活躍してくれたのですが、その活躍の場を作れるのは企画者の特権であり喜びだな、と感じました。T-ACT 推進室をはじめとした大学職員のみなさんも、学生の「やりたい」に全力で応えてサポートをしてくださいました。今しかできないことを、この筑波大学でやりましょう。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください
大学公認イベントということで、会場の使用許可を得ることができたり大々的に告知できたりして良かった。要望としては、広報手段にもっと幅が欲しいと思った。立て看板やTwinsの掲示板での広報は認められておらず、SNS 上での発信しかできなかったため届く層の偏りが懸念された。また T-ACT 自体の知名度が低く、公式アカウントに取り上げてもらっても反響が小さかった。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒5



旧宿舎からの脱出２（25022A）

T-ACT プランナー　牧山　光汰（応用理工学類3年）

活動目的



【活動の目的】
１．謎解き文化の普及・発展
２．小児がん患者の支援
３．様々な人間の交流

第１弾で続編希望の声を多数いただいき、大好評だったため、続編制作を考えました。今回は、40部屋以上を使った、大掛かりな謎と仕掛け満載の館を攻略していただきます。

旧宿舎を使って初心者も上級者も楽しめる、ここでしか体験できない脱出ゲームを制作する。初心者には謎解きを身近に感じてもらい、上級者には過去類を見ない脱出ゲームを体験してもらうことで、謎解き文化の更なる発展を目指します。

また、余ったお金はヒスターズナウつくばを通して小児がん患者の支援に当てる予定です。

準備には多様な人間が関わっており、それぞれの強みを活かした作品を創り上げます。

【旧宿舎を使う意義について】

館一棟を使ったギミックのある脱出ゲームは、恐らく今まで実現されてこなかった。これは会場取りが難しく、回転率が悪いため、会社としてあまり収益が見込めないためだと考えられる。

この点について、本企画は収益（お金稼ぎ）を目的としていないため実現可能である。したがって、本企画を実施することにより謎解き業界に新たな道を提案し、謎解き文化の発展を目指したい。

【ヒスターズナウつくば　とは】

つくばに拠点を置く、小児がん患者の支援を行う一般社団法人。つくば駅前でレモネードスタンド活動を行ったり、小児がんを多くの人に知ってもらう活動を行っている。

T-ACT を利用した活動も行っており、T-ACT の授業で活動報告を聞き存在を知り、少しでも力になりたいと考えたため、余ったお金を寄付することとなった。

【補足】
・安全のため、前回同様ポンタ 1 日レジャー保険（https://ponta.pointhoken.jp/details/2d58bc65-1252-4353-bbb9-e940e275c466）を使用する。
・チケット販売サイトはこちらです。
https://escape.id/syukusyaescape-org/e-deathgame-land/

具体的な活動計画

【概要】

謎解きサークル、演劇系サークル、芸術専門学群に所属する多様な学生が集結し、各々の強みを活かして筑波大学の資材・人材を最大限活用したここでしかできない企画を創り上げます。

運営班、コンテンツ班、創作班、広報班、渉外班に分かれて活動します。

余ったお金は、“ヒスターズナウつくば”を通して小児がん患者の支援に使われます。

※対象は高校生以上
※参加費は学生500円・一般1,000円＋手数料を予定（イベント保険含む）

【メンバー】

以下のサークル・団体に所属する有志が集い活動する。
・謎解きサークル　Lilac
・ミュージカルサークル　ESSASSA
・演劇サークル　筑波小劇場
・放送サークル　THK
・芸術専門学類
・ヒスターズナウつくば

【スケジュールの概要】
11月：メンバー集め、T-ACT 申請
12月：内覧とテストプレイ、チケットサイトへコンタクト
１月：台本・イラスト完成、広報を本格化、招待声掛け
２月：シフト作成、招待者先行公演、チケット販売開始
３月：土日２日間開催、活動報告書作成

【参加者の動きの概要】
・参加者はオンラインチケットを Escape.ID（Peatix に変更の可能性アリ）で事前購入する。
・当日は、まず旧宿舎前で受付・チケット確認を行う。
・注意事項を述べ、謎解きにも関係する館内図を渡し、ゲーム部屋へ案内する。
・ゲームの進行に従いスタッフに案内されながら部屋を移動していく。
※すべての謎は基本的に部屋の中で解くため、歩きながら or 階段を移動しながら解くこと はない。
・正解、失敗に限らず、制限時間が来たら解説を始める。
・参加者から質問があれば回答し、無ければ出口へ案内し終了となる。

【決定したスケジュール】
1/22：　映像素材撮り
1/24：　謎テストプレイ
2/28、3/1：テストラン
3/2、9：　練習
3/20～24：準備、本番、片付け



活動場所
平砂10号棟（廃宿舎）
※前回同様、学生生活課の許可を得て行う

活動期間
2025/11/12～2026/03/31

対象
学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー
O：飯田眞一郎（心理学類４年）
松崎結大（物理学類３年）
永吉瑛人（情報メディア創成学類１年）
河端旭弥（医学類１年）
本橋京佳（地球学類１年）
香川直寛（芸術専門学群１年）
高田七虹（人文学類１年）
垂石ひなた（教育学類４年）
三井舞香（化学類１年）
赤谷隼（情報メディア創成学類３年）
中山智恵（応用理工学類３年）
桑原侑（国際総合学類３年）
遠藤虹亮（物理学類１年）
田畑莉空（情報科学類１年）
大成彩未（生物学類１年）
竹田燿（人文学類１年）
中村武尊（情報メディア創成学類１年）
澤口彩花（生物学類４年）
森南々帆（比較文化学類２年）
石岡洋輝（芸術専門学群１年）
栗栖幸久（情報科学類２年）
竹上淑世（心理学類３年）
P：外山文子 先生（人文社会系）

備考
（１）万全を期すため「安全マニュアル」を作成しましたが、添付場所がなかったため、12/1 に T-ACT 推進室へ別途メールで送信しました。ご参照ください。
追記：動線を追加したアップデート版を12月９日にお送りしました。

（２）理想の参加人数144人について
２日間の最大キャパです。計算としては、１公演18人・１日４公演・２日間開催となっています。ただし、10人程度の参加者がいれば赤字になることはありません。前回30人程度来たことから赤字の問題はないと思われます。

メインターゲットは、謎解きが好きな大学外部の人間と筑波大生です。
100人程度の集客の見込みはあると考えています。理由は以下の通りです。

a）謎解き業界では誰もが一度は実現したいと思ったことがあるが、会場取りや収益の観点から今まで実現されてこなかったような内容であり、今まで満たされてこなった潜在的な需要があると考えられるため。
b）今までに行われてきた脱出ゲームを見ると、独自の試み（演出、ギミック、トリック　など）がある作品は評価が高い傾向にある。本作は一棟使うことでしかできないトリックや体験があるため、その魅力をあらかじめ宣伝することで集客がで期待できるため。
c）脱出ゲームにおいて１公演の相場は4,000円程度である中、本作は学生700円・一般1,200円を予定しており、脱出ゲームに行き慣れている人にとって、お得感があるため。
d）脱出ゲームファンは謎解きのためだけに遠出や旅行することが少なくなく、東京から少し離れている筑波にも来る見込みがあるため。

（３）招待者先行公演について
広報活動の一環であり、実施できない場合でも本番実施の可否に影響はない。謎解きクリエイター・レビュアー４組ほどへ声掛けをする。まず招待したい旨を伝え、交通費を出せる保証がないと明言した上で、ご参加いただけるか掛け合う。招待者公演は本番チケット販売開始の１週間後であるため、売り上げ状況を見て可能であれば交通費をお渡しする。
なお、遅くとも１か月前には招待の誘いの連絡をしする。また、イベント保険をこちらでかけるようにする。これについても、交通費がなくても参加は見込めると考えています。
理由は、声掛け予定の方々は先行公演に参加している投稿をよくしているため・本企画の内容は希少性があり熟練者であるほど気になる内容であるためです。

活動報告

実際の活動内容

平砂10号棟（廃墟）を丸ごと一棟使い、脱出ゲームを開催した。

チケットは脱出ゲーム専用チケットサイト「ESCAPE.ID」にて販売し、茨城県の外からたくさんの謎解きファンの方々にご来場いただいた。

廃墟一棟を使った脱出ゲームは謎解き業界で（恐らく）初の試みであり、手探りで進めることも多かったが、アンケート結果は平均満足度8.8と大盛況であった。

謎解きサークル、演劇サークル、ミュージカルサークル、放送サークル、芸術専門学群に所属する多様なメンバーの各々の長所を組み合わせることで、昨年と比べて大規模かつ高いクオリティの公演を創り上げることができた。

また、茨城県の謎解き制作団体（茨城大学謎解きサークル、ひたちナゾ（会社）、JolerProject（会社））との交流の場を設けることで、学外との繋がりを形成できた。

さらに、謎解き業界に携わる方々をお招きし、プロの目線でのフィードバックをいただくことで、快適なイベント設計などを深く学ぶことができた。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒100％

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと
イベント当日のスタッフ間の連携やトラブル対応

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか
以下の３つの対策を行い解決できた
・スプレッドシートを用いて全体進行やタイミングを調整した
・事前練習を入念に行った
・予備人員を用意し巡回を行った



活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

今までに携わったイベントの中で最も大変だが、最も充実した活動であった。それを説明をするにあたって重要なキーワードは「他者との関わり」と「相手の立場になって考える」

である。チームメンバーとの関わり、参加者との関わりという 2 つの面から述べていく。

（Ⅰ）チームメンバーとの関わり

元々、私は楽だからという理由で自己完結を好む人間であった。一方で、今回の企画はほとんどの部分で他者との協力が必須であり、一人で創れる規模ではなかった。そのため、活動の中で他者と関わり続けることでコミュニケーションの難しさや、それを円滑にする方法を身をもって体感することができた。ポイントは相手の立場になって考えることである。具体例として " 運営マニュアル " を挙げる。運営マニュアルとは、当日のイベント運営の動きをまとめた資料のことである。自分の頭の中にある動きを出力してまとめるわけだが、初版はかなり分かりづらいものとなった。その原因は明確であり、自分は知っているが他者は知らない情報を補完しきっておらず、説明不足の状態となっていたためである。メンバーから指摘をもらうことで自分の思い込みに気づかされた。そこから、資料を書き終えた後に必ずまだ何も知らない人の立場になって再読し、情報の漏れがないかチェックするようになった。これは一人で活動していては気づけないことである。

また、一人でできることには限界があることも理解できた。これを言い換えると、他者と協力することで一人でできる以上のパフォーマンスを発揮できることを理解したということである。今回は参加人数が多く、各々の強みを重ね合わせることで効率的に作品の質を上げることに成功した。

（Ⅱ）参加者との関わり

コンテンツ制作の進度が速かったことで、どうすれば参加者により楽しんでもらえるかを考える時間を多くとることができた。また、チケットが即完売したことがさらに拍車をかけ、チームでは熱い議論が飛び交うことになった。ここでも、やはりポイントは相手の立場になって考えることであり、初めて体験した人はどう思うか、どうすればより快適になるかなどを当日まで注意深く考え続けた。

以上をまとめると、他者との関わりが大変であると感じながらも、協力することの良さや嬉しさを感じることができたため充実した活動であったということである。

参加者への影響

廃墟一棟を使った脱出ゲームは恐らく今までに存在していないため、謎解きファンの間で少し話題になった。期待に応えるべく、ここでしかできない体験は何かということを考え続け、新しい体験を提供できたと思う。実際、満足度アンケートの平均は10点中8.8点であった。

一緒に運営した仲間は「やってよかった」「楽しかった」などと語っており、各々の長所を寄せ集められるのは多人数運営の強い武器であると感じられた。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

やりたいことがあれば、考えて動かなくなる前にさくっと構想を立ててすぐに飛び込むと良いと思う。T-ACT の活動を通して、勇気をもって動くと案外どうにかなることや、動くことでしか見れない新たな景色があることをぜひ知って欲しい。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

平砂10号棟を借りるにあたっての学生生活課との交渉が楽であったこと。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒5



観客『も』動き回る体験型演劇を学内で ―物語を歩いて辿る、新しい演劇鑑賞のかたち（25023A）

T-ACT プランナー　百海　結妃（知識情報・図書館学類2年）



活動目的

私たちは筑波大学において新たな演劇表現の可能性を探るべく、「イマーシブ演劇」といった新しい分野に挑戦するプロジェクトを立ち上げました。イマーシブ演劇とは、観客も物語の一部として演者と同じ空間に入り込み、物語を体験することができる革新的な演劇形態です。現在、学内の演劇サークルではこの形式での公演は行われておらず、私たちはこの新しいスタイルを筑波大学に根付かせる第一歩を踏み出したいと考えています。観客と演者の垣根を越えた没入型の演劇体験を通して、演劇の魅力をより多くの人に届けるとともに、表現の可能性を広げていくことを目指します。

具体的な活動計画

平砂旧宿舎にて観客が固定の席に座らずに歩き回る形で演劇公演を２日間にわたって行う。企画参加者は複数の芸術系サークルをはじめとした10人弱の有志の筑波大学生。メンバーを運営、脚本・舞台美術等、広報、会計の４チームに分けて本番まで準備を進める。

◎企画内容詳細
日時：２月21日～２月22日
場所：平砂旧宿舎10号棟
参加費：前売り400円
　　当日450円
支払い方法：当日受付にて支払い（現金、PayPay）
参加方法：チケット予約（予約フォーム：https://forms.gle/DgLFaDtx97ptmU5N7）
対象者：筑波大学内外を問わず参加可能（ただし中学生以上に限る）

◎本番の段取り
①本番開始約20分前に受付開始
②チケット代の受け取り
③安全規約、注意事項を説明する
④公演開始（緊急事態については後述の『緊急対応マニュアル』に従って行動する）
⑤1 時間弱で公演終了
⑥参加者には公演についてのアンケートに答えてもらう
その他の動きについては下記の当日スタッフ用マニュアルに従って動く。

◎広報について
T-ACT を通した宣伝
X、Instagram を活用した宣伝
学内外にポスター・ビラの設置

◎スケジュール
・全体
１/13～２/18 ‥‥稽古
１/30 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥通し確認①
２/６ ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥通し確認②
２/13 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥通し確認③、避難訓練①
２/19～２/20 ‥‥小屋入り（現地での準備期間）
２/21～２/22 ‥‥避難訓練②、本番
２/22～２/24 ‥‥撤収
・運営
～11/20（12/4）‥T-ACT 申請完了
12/25～12/31　‥役者募集
１/１～１/12 ‥‥稽古日程調整、当日スタッフマニュアル作成

1 /13～1 /29 ····宿舎清掃、必要物品買い出し
1 /13～2 /20 ····前売りチケットの予約期間
2 /21 ·····ポンター日レジャー保険申請

・脚本
～11/17 ·····棟内の導線決定
～11/20 ·····脚本の舞台設定決定
11/21～12/10 ··第一稿の完成
12/11～12/25 ··旧宿舎にて動作確認、第二稿の完成
11/21～12/25 ··仮舞台美術・衣装案を提出
12/26～12/31 ··最終稿の完成
12/26～1 /12····完全版舞台美術・衣装案の完成

・広報
11/28～2/22 ····SNS にて文章・映像で宣伝
12/11～12/20 ··ビラ・ポスター制作
12/21 ·····ビラ・ポスター印刷
12/22～2 /22····ビラ設置、ポスター掲示

・会計
～11/20（12/4）··予算案作成
2 /22～2 /28 ····決算作成

活動場所

平砂旧宿舎10号棟（学生生活課承認済み）
使用する部屋、廊下については当日スタッフ用マニュアルに記載いたしました。

活動期間

2025/11/16～2026/03/31

対象

学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：根本大輝（情報メディア創成学類 2 年）　香川直寛（芸術専門学群 1 年）
村田かな美（工学システム学類 1 年）　高橋若奈（日本語・日本文化学類）
関口きり（情報メディア創成学類 2 年）　根本花音（人文学類 3 年）
白岳航佑（地球学類 2 年）　吉井颯紀（応用理工学類 2 年）
井口可憐（芸術専門学群 2 年）　木全美羽（人文学類 2 年）
和久田壱成（社会学類 3 年）
P：河合新 先生（システム情報系）　吉田奈穂子 先生（芸術系）

備考

◎安全対策
・舞台セットによって観客が怪我をすることを防止するため、基本的に宿舎をそのまま利用し、大掛かりな舞台セットは設置せず、一人で持てる程度の小道具に留める。また、当公演は会話劇が中心であり、観客が怪我をしてしまう恐れがあるような大きな動きを含む演技は行わない。
（役者と観客の動きは当日スタッフマニュアルに記載いたしました。
当日スタッフマニュアル：https://docs.google.com/document/d/e/2PACX-1vQ1t-0JwnYDmVSHyHtQAIlYKTzLjgHWTeozMvw7OkoDWGd3iS6u7g5sPdkdDKhX9FeIb9YuNDQdIa2b/pub）
・役者含め、場内スタッフの目の届かないところに観客がいる状況を生じさせないようにする。
・参加者は「ポンター日レジャー保険」への加入を必須とする。保険料は運営負担。予約フォームで加入同意を取得し、2/20に前売予約を締め切った後、まとめて運営が申請する。当日参加者については受付でその場で申請する。
https://ponta.pointhoken.jp/details/2d58bc65-1252-4353-bbb9-e940e275c466
・参加者は中学生以上に限る。
・参加者の安心・安全を確保するため、演者と観客との間に身体的接触は一切行わない。
・公演に際しての禁止事項（例：走らない、撮影禁止、大声を出さない等）および安全規約を事前に策定し、観客には予約時の Google フォーム上で明示するとともに、当日の受付時にも再度周知を図る。

・使用しない教室・スペースには「立入禁止」の表示を掲示し、観客および関係者の誤侵入を防止する。
・公演前に全出演者・スタッフを対象とした安全確認ミーティングを実施し、緊急時の対応手順を共有する。
・公演中はスタッフを配置し、観客の誘導および安全確保に努める。
・事前にスタッフ一同で避難訓練を行う。
・感染症対策として、必要に応じてマスクの着用や手指消毒の協力を呼びかける。
・万が一の事故や体調不良に備え、緊急連絡先（百海）との連携体制を整備する。
・その他緊急事態については、以下の緊急対応マニュアルに従って対応する。
https://docs.google.com/document/d/e/2PACX-1vQHokrPba_rEeMTKmKrqCdkJPyeOQv1vcvRzR0Bn4KFFR2cv1P02RZcTPJBazclH0tmCiDw1ogtR12a/pub

◎宿舎内の衛生管理について
・公演前後および必要に応じて、会場内の換気を徹底し、空気の循環を確保します。
・必要に応じて、マスクの着用を推奨または義務付けます。
・小道具や共用設備（ドアノブ、椅子など）は公演前後に消毒を行います。
・使用する可能性のあるスペースは事前に旧宿舎の清掃を行います。
清掃スケジュール：1/13〜1/26

◎その他
・参加者の個人情報は前述の保険のみに利用し、それ以外の目的に利用しない。
・X や Instagram 等の SNS で企画を宣伝する際、ネットリテラシーには十分配慮する。

活動報告

実際の活動内容

本企画では、観客が物語の一部として参加する体験型・没入型演劇の企画・制作・上演に挑戦した。舞台と観客席が区切られている従来の座って観る演劇とは異なり、「観る」だけでなく「関わる」体験を生み出すことを目指した。

企画立案から脚本制作、舞台設計、動線計画、広報活動、当日運営等、学生のみで行い、特に会場全体を一つの物語空間として構成する点に力を入れた。参加型である以上、観客の反応によって空気や展開が変化するため、リハーサルを重ねながら細部まで検証を行った。

当日は受付・誘導・進行管理を分担しつつ、遅刻した観客がいた場合は公演時間を少しずらす等、柔軟に対応した。公演後には、初対面同士の参加者がアンケートを記入しながら感想を語り合う姿も見られ、本企画の目指した「他者と関わる体験」が実際に生まれていることを確認できた。

メンバー全員が経験のない形の公演であったため、運営面でも挑戦の連続であったが、状況に応じて改善を重ねながら、安全かつ円滑に公演を実施することができた。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒100％

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

①準備及び制作過程においてスケジュール通りに進まないことがあった。当初の想定よりも作業に時間を要することがあり、進行に遅れが生じた。

②予想以上の反響を頂き、急遽公演枠を増やした結果、会場内が過密になる可能性が生じた。





解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

①担当メンバーに都度進捗確認を行い、状況を把握したうえでスケジュールを柔軟に再編成した。結果として、遅延なく本番を迎えることができた。

②メンバー間での協議と実験を重ね、観客の動線や脚本内容を再検討した。最終的に動線と脚本を一部変更することで空間の使い方を調整し、快適な観劇環境を実現した。また、公演前の注意事項説明で、会場内の混雑について事前に説明することで観客の理解を得るとともに、心理的な不安や戸惑いを軽減することができた。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

本企画は、私にとって初めて団体の代表を務める経験であった。当初は「代表なのだからすべて自分で把握し、決定しなければならない」と考え、強い責任感と同時に大きなプレッシャーを感じていた。しかし実際に動き出すと、想定していた以上に多くの工程や調整が必要であることに気がついた。会場利用に関する確認や騒音に対する許可申請、安全管理やメンバーのスケジュール調整など、表に見えない準備が数多く存在しており、一つの公演を実施するためには段階的な手続きと丁寧な調整が不可欠であることを実感した。

当初はそれらを一人で抱え込もうとしていたが、次第に他のメンバーに業務を分担し、意見を積極的に取り入れるようになった。その結果、団体全体で企画を動かす体制へと変化し、メンバーの主体性も徐々に高まっていった。

また、大規模な企画を実際に最後まで遂行できたことは、自分にとって大きな自信となった。同時に、企画全体の流れを俯瞰し、どの段階で何が必要になるのかを見通す力が身についたと感じている。今回の経験を通して、仲間と協働する重要性だけでなく、企画を実行に移すための現実的な段取りや調整力を学ぶことができた。この経験は、今後の公演を計画するうえでの大きな基盤になると考えている。

参加者への影響

本企画は、私だけでなく、運営に関わったメンバーにも大きな影響を与えた。準備当初は、主に 2〜3 名を中心に企画を進めていたが、活動を重ねる中で徐々に他のメンバーも主体的に関わるようになった。脚本や演出、空間設計についての意見交換が活発になり、最終的には全員で議論しながら方向性を決定する体制へと変化した。企画を「誰かのもの」ではなく「全員のもの」として共有できたことは、団体としての結束力や当事者意識を高める結果につながったと感じている。

参加者（観客）への影響としては、本公演の大きな特徴でもある、「劇中に観客同士が話し合う場面」が大きな役割を果たした。劇中で意見を交わす体験を通して、単なる鑑賞ではなく、他者とともに物語を考える時間が生まれた。その影響か、公演前まで互いに面識のなかった参加者同士が、公演後にアンケートを記入しながら自然に感想を共有する様子が見られた。

アンケート結果からも満足度は非常に高く、作品体験を通して一時的であっても参加者同士の交流が生まれたことは、本企画の大きな成果の一つであると考えている。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

代表という立場になると、「自分がすべてを背負わなければならない」と思ってしまいがちですが、実際には、一人でできることには限界があります。周囲のメンバーを信頼し、積極的に頼ることが、結果として企画をより良いものにしていきます。誰かに任せることは責任を放棄することではなく、団体全体で企画を育てるための大切な選択です。困ったときは一人で抱え込まず、ぜひ周囲に相談し、仲間と協力しながら進めることで、企画は想像以上に広がり、より豊かなものになると思います。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

T-ACT のサポートがあったことで、最初何から着手すべきか分からない状態から、順序立てて準備を進めることができた。特に公演中の安全面や緊急事態対応についてのアドバイスが役立った。また、物品の借用およびビラやラミネートの印刷支援は大きな助けとなった。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒5

ひかりのや ～夜桜とランタンが織りなす一の矢の新たな魅力～（25028A）

T-ACT プランナー　福澤　葉月（生物資源学類3年）

活動目的



一の矢学生宿舎へと向かう道は、周辺に豊かな自然が広がっている一方で、夜間は人通りが少なく、暗く閑散とした印象を与えている。本企画では、この道が本来持つ自然の魅力に着目し、夜桜のライトアップを行うことで、安心感と賑わいを生み出し、場所への注目度を高めることを目的とする。

また、４月は新入生が筑波大学での生活をスタートさせる時期であり、不安と期待が入り混じる時期でもある。ランタンづくりのワークショップを通して、学生同士や地域住民が交流しながら空間づくりに参加することで、「見るだけのイベント」ではなく、「自ら関わり、記憶に残る体験」を提供する。

夜桜とランタンの柔らかな光が生み出す幻想的な景観は、新入生にとって筑波大生としての生活へのワクワク感を高めると同時に、学生同士 のつながりを育むきっかけとなることを目指す。さらに、本企画を通じて、一の矢学生宿舎周辺が安心して歩ける、魅力ある空間として再認識されることを期待する。

具体的な活動計画

〈活動内容〉

一の矢学生宿舎周辺へ向かう道に咲く桜をはじめとした自然豊かな木々や、落ち着いた静寂な雰囲気を活かし、周囲の景観と調和する夜桜ライトアップを実施する。強い照明ではなく、桜や道の輪郭をやさしく照らす光を用いることで、夜間でも安心して歩ける空間を演出する。

あわせて、参加者が自ら制作したランタンを用いるワークショップを開催し、完成したランタンをライトアップの一部として設置する。参加者とともに空間をつくり上げていくことで、鑑賞するだけでなく、関わりながら楽しめる参加型のイルミネーションを実現する。 本企画は筑波大学の入学式後の時期に実施することから、特に新入生を主な対象とし、筑波大学での学生生活への期待感や愛着を高めることを目指す。また、新入生に限らず、在学生や地域住民など幅広い層が参加・来場できるよう広く呼びかけ、大学と地域をつなぐ交流の場としての活用も図る。

〈ランタンワークショップの詳細〉

- 材料 -

ボタン電池、LED ライト、レジン液、風船、デコレーション用の飾り

- 作り方 -

1．膨らませた風船にレジンをかける
2．お花や飾りをくっつける
3．太陽に当てて固まったら風船を割る
4．形を整えてボタン電池に被せる

〈活動期間内のスケジュール〉

- 当日の流れ -

開催予定日時：2026年４月10日（予備日４月９日）いずれの場合も16時～21時
15時　ワークショップ開催場所の準備、桜の木の下にランタンを置く準備
16時　ワークショップ開始
18時　日没ごろにワークショップを終了し、ワークショップ参加者が作成したランタンを桜の木の下に設置する。
20時　点灯終了、片付け
21時　完全撤収



活動場所

一の矢学生宿舎へ向かう道（虹の広場の向かい側）

活動期間

2026/01/23～2026/04/10

対象

学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：淺野眞子（障害科学類２年）、勝部奈桜（生物資源学類２年）、
　鈴木心捺（生物資源学類２年）
P：川田清和（生命環境系）



備 考

・参加費無料
・持ち物なし
　お気軽にお越しください！
・お子様が参加される場合はハサミを扱うなど危険を伴う作業はスタッフが行います。また、小学生以下の方は保護者の同伴が必要となります。
・当日はスタッフが作り方のサポートをします。
・Instagram、学内チラシ掲示、新歓祭 T-ACT ブースでのチラシ配布にて広報活動を行います。
　Instagram リンク↓
　https://www.instagram.com/hikarino_ya2025?igsh=c2RqN3kyaHpqb293&utm_source=qr
・当日100人を超える参加者が見込まれる場合は事前申し込み制または先着制とさせていただくことがあります。
　事前申し込みフォーム↓
　https://docs.google.com/forms/d/1Qhh-ISM2fZ-pRUXov_HLgOTE3PdRlgCnrCSy6YyiLks/edit

活動報告

実際の活動内容

一の矢学生宿舎へ向かう道及び虹の広場に咲く桜をはじめとした自然豊かな木々や花、落ち着いた静寂な雰囲気を活かし、周囲の景観と調和する夜桜ライトアップを実施した。桜や道の輪郭をやさしく照らす光を用いることで、夜間でも安心して歩ける空間を演出した。

あわせて、参加者が自ら制作したランタンを用いるワークショップを開催し、完成したランタンをライトアップの一部として設置した。参加者とともに空間をつくり上げていくことで、鑑賞するだけでなく、関わりながら楽しめる参加型のイルミネーションを実現した。

新入生の入学直後の時期に実施することから、特に新入生を主な対象としていたが、新入生に限らず、在学生・大学職員の方々も含めた幅広い層が参加・来場し、交流の場としての役割も果たした。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何％ぐらいですか？⇒60％

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

①屋外で実施するイベントだったこともあり、当日の天候に左右されやすかったこと。
②在校生にとってはまだ授業が始まっていない時期で、参加予定者数や事前申し込み数が変動し、見通しが立ちにくい部分があったこと。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

①予備日を設定し、各種 SNS 等で宣伝した。また、事前申し込みフォームの中に予備日開催での参加の可否を追加した。
②入学式一斉歓迎や新歓期間の昼休みにビラ配りをし、その際事前申し込みを行うように促した。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

今回の活動では、当初ひかりのやとして構想していたプロジェクトから変更をし、ランタンワークショップと桜のライトアップを実施するに至った。前計画の段階から T-ACT には相談に乗っていただいており、自分たちが想像しているコンセプトとそれを実現できる現実的な手段について数多くの助言を頂いた。自分一人では考えることすら及ばなかった様々なアイディアがメンバーや T-ACT の担当者様から生まれ、今回のイベントを実施することができた。この経験の中で、大学の自由な環境の中で生まれるクリエイティブな活動を許容し、楽しむことができる風土の中で自分たちが一からイベントを作り上げられたことに達成感や充実感を得た。自分は大学に入ってから漠然と何かをやりたいと思っていたが、それを達成するための具体的な手立てを知り、実行に移せたことで、自信につながった。はじめからできない、難しそうだと決めつけるのではなく、まずはやってみると

いう第一のアクションを起こすことが重要であり、進めていく中で得られる経験や困難な事態も全て自分の学びになるのだと感じた。結果だけでなく過程から得られる学びに注目できるのは、社会人になってからはあまりできないことだと思っているので、大学生のうちにこれからも未知のことに挑戦していきたい。

参加者への影響

本イベントの企画・運営を通して、運営メンバーの経験および能力を向上させることができた。準備段階では、SNS 運用やチラシの配布・掲示による広報活動に加え、関係各所への許可取得、目的に即した企画内容の検討、リスク管理など、多岐にわたる対応が求められた。特に広報活動においては、SNS による発信と対面でのビラ配布をあわせて行い、投稿内容の工夫や口頭での説明を通してイベントの魅力を伝えることに努めた。また、運営者同士で進捗状況や到達目標の確認を都度行い、時には困難であったイベント準備のモチベーション維持とイベントの質の向上に努めた。これらの取り組みにより、行動力、協働力、問題解決能力といった多様な能力の向上がみられた。

また、参加者にとっても、本イベントは交流や思い出作りの機会となった。参加者の中には仕事のため一時的に来日した外国人の家族連れもおり、幼い子どもともに草花を拾ったり、幻想的な風景の中で写真を撮ったりしてイベントを楽しんでくれていたようだった。また、今春筑波大学に入学した学生が、新しくできた友人とともに参加する姿もあり、友人や我々運営者との交流を深める機会の提供につながった。

さらに、参加者の中にひかりのやに興味を示し、今後の活動への参加を申し出てくれた方がいた。自分たちのコンセプトに共感し、一緒に活動をしていきたいと思ってもらえたことに喜びを感じるとともに、自分たちとは異なる視点からのアイディアが生まれることへの期待感が膨らみ、参加者の他に主催者である運営メンバーにとっても影響が大きかった。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

T-ACT を利用することで、自分が大学生として生活する中でやってみたいと感じていたことを T-ACT の職員の方々や仲間の協力を得ながら実現することができた。自分の見通しが甘かったり、計画が思い通りに進まずトラブルに直面した際も、職員の方々が一緒になって解決策を考えてくださった。イベントが成功するか、準備は十分にできているか、当日になるまで不安でいっぱいだったが、参加者の皆さんと交流する中で新たな出会いが生まれたり、笑顔を見たりすることができ、イベントを開催して本当に良かったと思うことができた。

プランナーになることを考えている皆さんは、T-ACT を通じて自分の思いややりたいことを形にして、充実した大学生活にしてほしいと感じるし、大学生の今だからこそできる自分を表現する場として T-ACT を活用してほしいと思う。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

ひかりのやプロジェクトを構想していた時期に大学構内の使用許可や広報活動などは個人で行うにはハードルが高いと感じていた。そのような状況の中で T-ACT 推進室を訪問し、今後の活動計画や予算確認など親身に相談に乗っていただいた。また、茗渓会学生支援活動事業への申請や大学構内の使用許可申請方法、当日の物品貸し出しといったサポートまで行っていただくことができた。

さらに、T-ACT を利用することで自分たちが何を目的に活動し、どんなことを伝えたいのかといったビジョンが明確になるとともに、プロジェクトを進めていく上で見通しを持つことの大切さを学んだ。また、今回大学広報局に取材する機会をいただき、広くプロジェクトの宣伝をすることができたのも、T-ACT 推進室の担当者様のご尽力のお陰であり、プランナー及びオーガナイザー 4 人では実現することができなかった活動である。

上述したように T-ACT を利用したことで自分たちのやってみたいというプランを実現に結び付けることができ、多くの学びを得ることができた。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒4





つくばの街で外遊び&居場所づくりをしよう！（24008V）

受入団体名：つくば de プレイパークひろめ隊（23012G）

活動内容

「プレイパークをあちこちにつくって地域みんなの居場所にすること」を目標に、プレイパーク、地域協働イベントを開催しています。



〈つくいち de プレイパーク〉
開催日時：通年毎月第２日曜　10～13時前後（夏期は９時頃～）
つくば市中央公園

〈きつつきプレイパーク〉
開催日時：通年毎月第４月曜　15時～17時（冬期は日没まで）研究学園駅前公園

活動期間

2025年４月～2026年３月

参加学生

T-ACT ボランティア：23人（延べ人数）

活動報告

●受入団体担当者

プレイパークという場で子どもたちの遊びに寄り添い、支え、共に遊んでいただきました。子どもたちにとっても年齢の近いお兄さん、お姉さんと遊ぶことは楽しいことであり、大学生にとっても子どもたちや保護者の方とのふれあいやプレイパークでの野外体験は稀な機会だったようで、お互いにとって初めての体験や挑戦であったり、楽しい時間になったのではと思います。私どもスタッフとしても活動に関しての新しい視点をいただいたりとよい時間となりました。

●学生参加者：相澤誠勲（理工学群応用理工学類２年）

活動の成果

つくば de プレイパークでは、子供たちが自然の中で自由に遊ぶことの手伝いをしました。私自身が楽しむことができたうえに、子供たちが純粋に喜んでくれる姿を見ることができて、このプレイパークの場を作る一員であることができてよかったと感じました。

ボランティアを通して、純粋に地域のため、人のために動く人たちに触れられて、自分もそうした意識を少し持つことができました。

●学生参加者：匿名希望

活動の成果

活動内容としては、「子供達と一緒に遊ぶ」ことです。
子ども達のクリエイティブ性を肌身で感じました。昨今、遊ぶスペースが減少しているが、この活動のように子どもたちがやりたいことをやり、子どもたちがのびのび過ごせる環境を作ることは大切だと感じました。

今後の課題

参加者とボランティア両方の人数を増やしていく必要があると考えます。







「矢中の杜（旧矢中邸）」の保存活用（25002V）

受入団体名：NPO 法人“矢中の杜”の守り人（16008G）



活動内容

重要文化財「矢中の杜」の保存活用活動として、「矢中の杜（旧矢中家住宅）を千年保たせる」ためにさまざまな活動を実施しています。平成20年に旧矢中邸の所有者が変わったことをきっかけに、所有者や筑波大学の学生が中心となり邸宅の保存活用活動を開始、平成22年６月に NPO 法人を設立しました。地域の文化財として保存活用活動を続け、令和５年９月、国の重要文化財に指定されました。毎週土曜日の邸宅公開では、公開時の邸宅の清掃、軽微な修繕、庭園の整備などを行います。

活動時期

2025年４月～2026年３月

参加学生

T-ACT ボランティア：16人（延べ人数）

活動報告

●受入団体担当者

矢中の杜の通常の邸宅公開や秋の特別公開のスタッフとして、公開準備から受付、ガイド、掃除や庭の手入れ作業まで一般のボランティアスタッフと一緒に活動していただきました。

また、防災ワークショップや文化財の勉強会など、保存活用へのさまざまな活動に大変積極的に取り組んでいただいており、それぞれの視点の違いにも柔軟に触れてくれています。今期行ったクラウドファンディングにも積極的に意見をだし、かつ、実行してくれたことが、良い結果に結びつきました。

●学生参加者：

活動の成果

今後の課題



第4回 小児がん支援のためのレモネードスタンド（25003V）

受入団体名：HiStar'Snow Tsukuba（24014G）

活動内容

全国一斉レモネードスタンドの日に合わせて、小児がんを知ってもらうためのレモネードスタンドイベントを2025年６月14日（土）つくばセンター広場にて開催しました。



〈イベント詳細〉
①レモネードスタンドコンテスト
②キッズダンスフェスティバル
③シャボン玉リリース
⇒筑波大学附属病院に入院している子どもたちへのエール
④家族交流会
⑤こどもフリマ・ゲーム　その他

活動日・活動場所

2025年６月14日・つくばセンター広場

参加学生

T-ACT ボランティア：10人（延べ人数）

活動報告

●受入団体担当者
会場設営・撤収、レモネードスタンド販売支援、ガチャガチャ・シャボン玉くじの販売、子どもたちの見守り等、イベント内で柔軟に活動していただきました。

●学生参加者：匿名希望
活動の成果
子どもたちのレモネード販売補助と全体の運営を行いました。小児がん患者やその家族を支えようとする多くの人と実際に会うことができ大変貴重な機会となりました。学校で学んだり本で読んだりして知識として理解していたことと、実際に当事者の方と出会い、言葉を交わすこととは受け取るものの重みが全く異なりました。その「重さ」を肌で感じられたという点で、医療や患者さんについての向き合い方が以前よりも深く、真剣なものになったと感じています。



●学生参加者：匿名希望
他のボランティアの子や子どもたちと協力して店舗設営を頑張り、一緒に喜べた時は達成度が高かったです。

●学生参加者：匿名希望
小児がん支援のためのレモネードスタンドイベントの運営補助（景品・展示物づくり、ミニゲーム運営等）を通じて、小児がん支援に携わる人々がたくさんいることを実感できました。

今後の課題
団体で日頃活動している方々と比べると消極的になってしまったと思います。子供たちに喜んでもらえるようにおもちゃやゲームを作ったり、景品を用意したりする姿を見て、私もより主体的に活動したいと感じました。ただ任された仕事をこなすのではなく参加者や子供たちのことを考えできることを行えるようになりたいです。



つくばの森づくり　森林保全　参加者募集 (25006V)

受入団体名：つくばの森づくり（23009G）

活動内容

つくば市の市有林（高崎自然の森、筑波山・四季の道）と民有林（山口地区、臼井地区）の間伐、枝打ち、下草刈り、剪定、植樹などを行います。

森林保全整備をすることによって、光合成を促し、植生に栄養を与え、新たな植生の芽生えにつながり、森を元気にする活動です。







活動日・活動場所

本活動では、市有林整備活動（筑波山・四季の道、高崎自然の森）として、下草刈り、剪定、枝打ち、植樹、間伐など技術習得を安全第一に心掛けて、怪我無く楽しく行っています。

令和７年６月21日（土曜）22日（日曜）筑波山・四季の道
令和７年８月16日（土曜）17日（日曜）高崎自然の森
令和７年10月18日（土曜）19日（日曜）筑波山・四季の道
令和７年12月20日（土曜）21日（日曜）筑波山・四季の道
令和８年２月21日（土曜）22日（日曜）高崎自然の森
土曜日は、9:00～15:00
日曜日は、9:00～12:00　までの活動となります。

参加学生

T-ACT ボランティア：１人（延べ人数）

活動報告

●受入団体担当者

筑波山四季の道に於いて活動を行いました。森林保全ボランティアの意義のレクチャーや、ノコギリ、剪定鋏を用いて枝払いや剪定、刈り払い機を用いての下草刈りをしました。また、活動地の散策もしました。

森林保全によって、多様な植物の芽生えを期待しています。森林は人手によって守られます。

●学生参加者：相澤誠勲（理工学群応用理工学類）

活動の成果

つくばの森づくりでは、森林を保全することの意義を教えていただいたうえで、下草刈りの体験や、枝打ちの体験をしました。実際に森を守るために動いている人を見ることができました。このボランティア自体が喜びの場であったうえ、こうした人たちなしに今の山の景観はないのだとわかって、意義を感じました。

ボランティアに参加してみるということ自体が目標だったので、その目標は達成できました。





森のようちえん あなたとわたしサマースクール (25009V)

受入団体名：森のようちえん あなたとわたし（25002G）



活動内容

3000㎡以上の森をフィールドに、子どもたちがやりたいことを自由に楽しむ活動を行いました。たき火、探検、木登り、基地づくり、虫取り、木工作、水遊び、泥遊び、草木染めなど、多様な遊びを子どもの主体性に合わせてサポートし、スタッフは遊びを指導するのではなく、安全を見守りながら子どもの挑戦や発見に寄り添い、活動後は振り返りを行って学びを共有します。

活動日・活動場所

2025年７月24日～2025年８月18日・あなたとわたしの森

参加学生

T-ACT ボランティア：５人（延べ人数）

活動報告

●受入団体担当者

子どもと大人、立場などを区別せず、「人対人」の関わりを大切に、“自分として一緒にその場を楽しむこと”“「この団体のルール」や「世間では」という判断ではなく「私は」という主語をつけて、自分の意見を言うこと”“一人になっている子がいたら、傍にいって寄り添う”という意識のもと、活動していただきました。

子ども達のやりたい遊びで一日が展開されるので、水遊び、焚き火でミニピザ作り、虫探し、ザリガニ釣りなど、幅広い活動でしたが、学生さんたちは初めてのことでも全て積極的に一緒に楽しんでいました。特に焚き火での料理や水遊びでは、子どもたちのやりたいをサポートしながら、スタッフの補助もやっていただきました。

●学生参加者：匿名希望

活動の成果

主な活動は小学生の低学年の子供と虫取りを行ったり、水遊びを行ったりすることです。私は子供たちの安全に配慮しながら一緒に遊び、自然が豊かな環境で大量のバッタやザリガニを捕まえたりして楽しみました。子供たちを無事に楽しませたので良かったです。

●学生参加者：匿名希望

活動の成果

子ども達と虫取り、肩車、鬼ごっこ、食事、水遊びを行いました。最初はお互い緊張していましたが、徐々に仲良くなって一緒に遊んだり、誘ったりしてくれてとても嬉しかったです。

今後の課題

・自然豊かな環境では様々な危険が存在していました。特に初めての行った場所であったため、どんな地形か、毒をもった虫がいるのかどうかなど活動の始めは場所に関する情報が少なく、苦労しました。
・子ども達それぞれが行いたい事が異なり、同時にお願いされた時にどのように対応するか、独り占めしたい子がいるときにどのように対応するかが大変でした。







小中学生の居場所支援 ～遊び・学び・生活支援～ @つくば市 (25011V)

受入団体名：認定特定非営利活動法人 Learning for All（16013G）



活動内容

Learning for All（ラーニング・フォー・オール）は、「子どもの貧困に、本質的解決を。」をミッションに掲げ、つくば市・都内近郊・尼崎市などで子ども支援の活動をしている認定 NPO 法人です。

大学生のみなさんには、さまざまな困難を抱える子どもたち（小・中学生）に居場所づくり支援をしていただきました。研修、全力で子どもたちと向き合う経験、拠点の他の学生ボランティアや学生スタッフと共に力を合わせて現場運営をしていく経験等、学生の皆様自身にも大きく成長いただけるプログラムとなっています。

活動期間

2025年 4 月～2026年 3 月

参加学生

T-ACT ボランティア：79人（延べ人数）

活動報告

●受入団体担当者

小学校 1 年生～中学校 3 年生までの子どもたちに、安心して過ごせる居場所づくりを行っている拠点にて活動いただきました。

拠点には、様々な背景がある子どもが来室しています。ボランティアの皆さんには、日ごろの遊びやコミュニケーションを通して、「頼れる大人との出会い」「自分らしくいられる居場所づくり」をサポートしていただきました。

●学生参加者：菅野葵（医学群医療科学類 4 年）

活動の成果

子どもの貧困解決を目的として、子どもを対象とした家や学校以外の第 3 の居場所づくり事業に参加しています。平日の放課後の時間や日曜日に子どもと遊んだり食事をしたりして、子どもが安心して過ごすことができる環境作りに努めました。日々の活動の他に、団体の職員や他のボランティアと話したり、団体が提供する勉強会や研修への参加を通して、子どもの貧困への理解が深まりました。

今後の課題

子どもとの関わりを通して、自分が人としてどうあるか、支援者としてどうあるかについて考えさせられました。また、答えの出ない“その子どもがどうありたいか”“その子どもの幸せとは何か”について考え続けることも非常に難しかったです。子どもの貧困という大きな社会課題に対して、自分の位置から何ができるのか今後も考え続けていきたいです。





令和７年度 茨城県警察大学生サポーター (25012V)

受入団体名：茨城県警察大学生サポーター（13005G）

活動内容

茨城県警察本部人身安全少年課少年サポートセンターと連携し、街頭での少年補導や学校等における非行防止教室及び非行少年等を対象とした立ち直り支援を行います。活動は勉学等に支障のない範囲で行い、活動によっては社会貢献することができ、また、御自身の成長にもつながります。

活動期間

2025年４月～2026年３月

参加学生

T-ACT ボランティア：１人（延べ人数）

活動報告

●受入団体担当者

少年サポートセンターにおいて、大学生サポーター研修会を行いました。研修会では、大学生サポーターの活動や注意事項の説明をしました。

今回研修会へ参加された学生さんは、大学生サポーターの活動には研修会のみの参加でしたが、令和５年度から大学生サポーターとして委嘱され、活動されてきました。これまでの活動に感謝申し上げます。



チャリティーサンタつくば支部　運営スタッフ募集 (25013V)

受入団体名：NPO 法人 チャリティーサンタつくば支部（18005G）



活動内容

クリスマスイブ当日に依頼を受けたご家庭にサンタクロースとして登場し、保護者の方からお預かりしたプレゼントとメッセージを子供たちに伝え、ご家庭の大切な思い出をつくるお手伝いをしています。

また、お誕生日プレゼントをもらうのが難しい子供たちに向けて毎月お誕生日会『絵本を選んで笑顔あふれる誕生日にしよう！』を企画し、プレゼントの絵本を渡すというイベントも行っています。また、年間を通して子ども食堂でパネルシアターなどのイベントを行っています。



活動期間

2025年 4 月～2026年 3 月

参加学生

T-ACT ボランティア：34人（延べ人数）

活動報告

●受入団体担当者

今年度は支部の人数も拡大し、サンタ活動においてもたくさんのサンタクロースとともにご家庭にプレゼントを届けることができました。クリスマスイブに訪問するご家庭との連絡や SNS における広報、サンタクロースをしてくれる一般のボランティアさんへの研修会の企画や運営など、それぞれが多岐にわたる内容を分担して行うことができました。

また、クリスマスイブに保護者の方へ渡すプレゼントを自分たちで考えて作成し、喜んでいただくことができました。加えて、お誕生日会においては子供たちの特別な思い出となるよう、装飾を工夫したり、絵本のラッピングの間に一緒に折り紙やお絵描きをして楽しいひと時をつくることができました。

子ども食堂でのイベントでは、イベント内容（人間間違え探し、工作、ダンス）を考え、スタッフ全員で連携して準備を進めました。当日は、子供たちとダンスや工作をし、その場にいるみんなで楽しい時間を過ごすことが出来ました。

●学生参加者：井上もえな（社会・国際学群国際総合学類 3 年）

活動の成果

ボランティアでは、依頼のあったご家庭に出向き、子供たちにプレゼントを渡しました。私は、プレゼントを直接渡すサンタさんではなく、サンタさんをサポートする係でしたが、サンタさんより先におうちに入って子供たちにあいさつし、ご家族とサンタさんのお写真を撮るなど、ご家族にとっての思い出がより濃いものになるようお手伝いをしました。

昨年度も伺ったお宅にプレゼントを届けたのですが、子供たちが私の顔をみるなり思い出してくれたようにうれしそうに笑ってくれたのが本当にうれしかったです。昨年は緊張してリアクションもなかなかとれなかった子供たちでしたが、今年はしっかり挨拶したりアクションしてくれたりと、1 年の成長を感じ感動しました。私個人としても、臨機応変な対応ができてよかったかなと思っております。

運営スタッフとしては、受付や片付け等の準備などを行いました。





今後の課題

幼稚園生かそれ未満のお子さんのお宅にも伺ったのですが、小さい子は何が起きているかを理解することが難しく、子供によっては泣き出してしまうパターンがあるので、そういった場合でも子供たちができるだけ楽しくリラックスできるようアシストできたらよかったかなと思いました。



●学生参加者：山口梨華（人間学群教育学類 4 年）

活動の成果

2025年 7 月より、経済的に厳しい家庭を対象とし、お子様の誕生月に親子で一緒に絵本を選んでいただく誕生日企画「絵本を選んで笑顔あふれる誕生日にしよう！」を実施しました。現在は月に約 3 件～ 7 件ほどの申し込みがあり、家庭にとって特別な一日を支える取り組みとして継続的に実施しています。

また、2025年 9 月からは、サンタ訪問活動に向けた準備を開始しました。運営スタッフとして参加した学生は、応募のあったご家庭やボランティアの方々との連絡調整、支部からお渡しするプレゼントの作成、当日に向けたボランティア説明会・講習会の企画・運営などを担当しました。学生一人ひとりが自分の役割を理解し、責任をもって活動に取り組みました。

当日ボランティアとして参加した学生は、事前に説明会・講習会に参加し、サンタ訪問の流れや声かけの練習を行いました。訪問当日の12月24日には、ボランティア同士の交流を深めるためのアイスブレイクや、訪問前の最終確認やサンタ衣装のチェックを行いました。その後、グループごとに分かれて各家庭を訪問し、活動の様子を笑顔あふれる写真として記録に残しました。23人のボランティアに参加していただき、21軒のご家庭を訪問しました。ご家庭とボランティアの両方が笑顔になってとてもあたたかいサンタ活動となりました。

今後の課題

今後の課題として、「絵本を選んで笑顔あふれる誕生日にしよう！」については、支援を必要とする家庭により多く届けるため、広報の幅を広げることが挙げられます。また、多くのご家庭からの申し込みがあった場合に対応できるスタッフの人数を増やすために、当日ボランティアを設けることも考えられます。重ねて、サンタ訪問活動については、より多くのご家庭および当日ボランティアに参加していただけるよう、参加しやすい仕組みづくりや周知方法の工夫が必要であると考えています。参加学生によっては、ミーティング等にまったく参加出来ていないなど活動に幅がありました。本活動をよく理解して、関わる必要があると感じました。

●学生参加者：竹原優奈（人間学群教育学類 4 年）

活動の成果

私たちの活動は、応募があったご家庭をクリスマスイブの夜にサンタが訪問して、プレゼントを渡すとともにお子様が 1 年間頑張ってきたことを褒めて笑顔であふれるクリスマスイブを作ることです。前々からご家庭や当日ボランティアの方とのやりとりやプレゼントの準備をし、当日ご家庭の笑顔を見れたり感謝の言葉を聞けたりしてや達成感がありました。こちらまで幸せをもらったクリスマスでした。



今後の課題

来年度は、今年の中心メンバーが多く卒業・脱退してしまうため、新たな運営スタッフの募集や役割分担を今後進めていく必要がある。





森のようちえん あなたとわたしウィンタースクール (25015V)

受入団体名：森のようちえん あなたとわたし（25002G）

活動内容

森でのウィンタースクールにおいて、子どもたちの自由遊びを見守りながら活動をサポートしました。たき火、探検、木登り、基地づくり、木工作などの野外活動に寄り添い、安全管理や準備・片付けを行った。また、子どもたち一人ひとりの自主性を尊重し、円滑な活動環境づくりを支援しました。



活動日・活動場所

2025年12月14日～2025年12月28日・あなたとわたしの森

参加学生

T-ACT ボランティア：２人（延べ人数）

活動報告

●受入団体担当者

雨天の中での野外活動でしたが、ブルーシートで大きな屋根を張り、その下で雨や寒さをしのぎながら、雨天遊び活動をしました。

●学生参加者：北原琉愛（社会・国際学群社会学類２年）

活動の成果

子ども達がありのままの自分でいられる場を大切に、思いっきり野外で遊ぶ時間を一緒に過ごし、子どもたちに寄り添うボランティア活動でした。活動では、子どもたちの自主性ややりたいことを大切にボランティアの大学生としてではなく、「わたし」として参加できました。

今後の課題

子どもたちのやりたいことがぶつかってしまったときにどう対応するかが難しかったです。声掛けだけでなく、両者の話や思っていることに耳を傾けることで気持ちを落ち着かせ、解決することができると主催者の方から教えていただいたので参考にしたいと思いました。

●学生参加者：匿名希望

活動の成果

森の中で子どもたちと遊んだり、ご飯を食べたりしました。子どもたちが主体的となって活動するのをサポートする形でした。久しぶりに子どもたちと全力で遊び、とても新鮮な経験になりました。うまく声をかけられない部分も多かったですが、子どもたちと同じ目線に立って活動することが出来たと思います。

今後の課題

乳幼児を対象にしたイベントだったため、子どもたちの意図を汲み取り、適切な対応をするのは少し難しかったです。また、汚れた服を着替えさせるのも難しかったです。

茨城県のひきこもり支援を盛り上げよう

受入団体名：一般社団法人アイネット（18007G）



活動内容

大学生の皆様にひきこもり問題・ひきこもり支援の方法を知っていただくことにより、ひきこもり支援の継続と発展が実現するのではないかと考え、支援活動を実施しました。

・不登校・ひきこもり状態にある児童生徒への学習支援
・ひきこもり支援フォーラムの運営サポート（年４回）
・当センター職員の出張相談（県内44市町村のうちどれか）に同行し、会場のセッティングや書記の補助
・フリースクール活動やイベント運営の補助
・各講演会への同行

活動期間

2025年５月～2026年３月

参加学生

T-ACT ボランティア：15人（延べ人数）

活動報告

●受入団体担当者

【学習支援】

当団体運営の県西サポステにて、利用者の学習支援を実施。高卒認定試験対策のため、受験科目や集中的に勉強したい科目に焦点を当て、利用者のレベルに合わせた教材を用いたり言葉かけを工夫したりしていました。相手の目線に立って教えてくれたため、利用者も意欲を持って参加していました。

【フォーラム】

会場の設営や案内の補助を主に実施。事前に用意していたレイアウト図に合わせて机や椅子を並べること、チラシの設置や来場者の案内をお願いしました。

【不登校支援イベント】

「令和７年度つながる“縁”日@県西」にて、ブースでの利用者補助をお願いしました。手作り商品を利用者が売る際の会計補助や、やりとりの補助を円滑にしてくれた印象です。他のブースにも参加することでイベントの雰囲気や不登校に関する理解を深められました、と言っていただけました。

●学生参加者：

活動の成果

今後の課題





2025 年度　実施状況報告

つくばアクションプロジェクト（以下、T-ACT）は、学生が自らの関心に基づく多種多様な自発的活動を、新たな人間関係を構築しながら実行するよう促進することで、学生の人間力を育成する筑波大学の人間力育成事業である（図 1 ）。その始まりは、2008年度に文部科学省の「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム（学生支援 GP）」に採択された事業「共創的コミュニティ形成による学生支援―学生・教職員が一体となった新たな自主的活動の創生―」にある。学生支援 GP が終了後も、筑波大学の人間力育成支援事業の一環として続けられている。

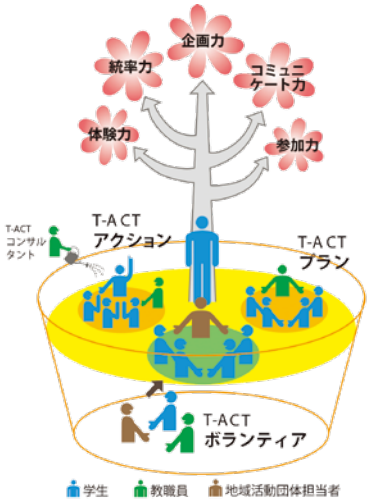


図 1　共創的コミュニティ形成による T-ACT の展開と学生の成長

T-ACT には、学生が企画立案し展開する T-ACT アクション、教職員が企画立案し展開する T-ACT プラン、地域活動団体が実施する社会貢献活動に学生が自発的参加をする T-ACT ボランティア（2012年度から開始）の 3 種類の活動がある。

T-ACT が支援する諸活動は、学生・教職員・地域による共創的コミュニティをベースに、半年以下の単発的・短期的活動であるため、アクティヴな流動性をもつことを特徴としている。学生はそれらの活動を通して、様々な活動へ積極的に加わる参加力、経験からより豊富な気持ちや教訓を感じ取る体験力、他者と関わり協調するコミュニケート力、人をまとめ率いる統率力、ビジョンを具現化し創造する企画力といった人間力を養うことになり、自主性と社会性を備え、将来社会を担う人材として成長することができると期待されている。2018年度からは、T-ACT アクションの支援対象として、ビジネスにつながりうる活動も含めるようになった。すなわち、プレ的なビジネス体験を支援し、ビジネスに関するノウハウを体感しつつ、さらに発展的な支援につなげるという機能も担いつつある。

本報告では2025年度の T-ACT の支援活動についてのデータをまとめる。なお、データは2026年 3 月までに T-ACT 推進室で把握できたものに限られる。その中でも過去10年分のデータを示すこととする。データの出自である学生からの活動報告等の資料は、提出されるタイミングが様々であるため、これまでの活動の全てが本報告の執筆時点で出揃っているわけではない。したがって、本報告のデータは今後更新されることがある。

1．T-ACT で申請された企画等の状況

2025年度の T-ACT アクション・プランの企画申請数は44件（アクション37件、プラン 7 件）であり、そのうち34件（アクション28件、プラン 6 件）が承認された（図 2 ）。また、2025年度までの累積承認企画数は1110件となった。2025年度に申請された企画におけるプランナーは43名（重複者を除く実数は40名）であり、そのうち教職員のプランナーは 4 名であった（図 3 ）。なお、プランナー数（43名）が承認企画数（34件）を上回るのは、前年度に申請された企画が次年度に承認されるなど、年度内の申請数と承認される企画数が一致しないためである。学生オーガナイザーは138名（実数は127名）、教職員パートナーは36名（実数は33名）であった（図 4、図 5 ）。前年度（35件）に比べて企画数は 1 件減少したものの、オーガナイザー数は増加した（前年度117名）。承認企画 1 件あたりのオーガナイザー数が増えたことから、企画の運営に関わりながら積極的に活動した学生がやや増えたと考えられる。T-ACT ボランティアに登録されている団体数は29であり、登録団体から申請され、募集が承認されたボランティア企画は22件であった（図 6 ）。前年度に比べて登録団体数および承認されたボランティア企画数はやや減少したが、ボランティア団体から参加の報告があった本学学生は実数で139名となり、前年度（110名）より増加した（図 7 ）。

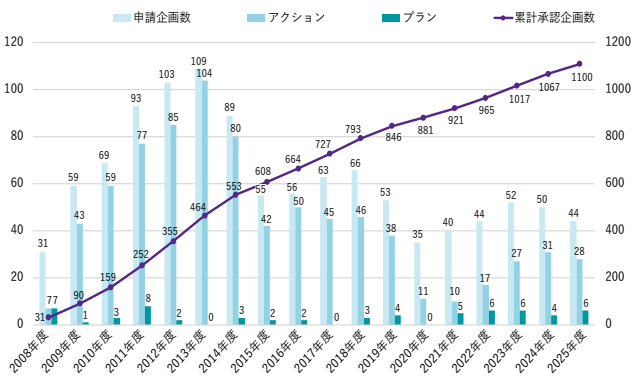


図 2　アクション・プランの企画承認数の変遷

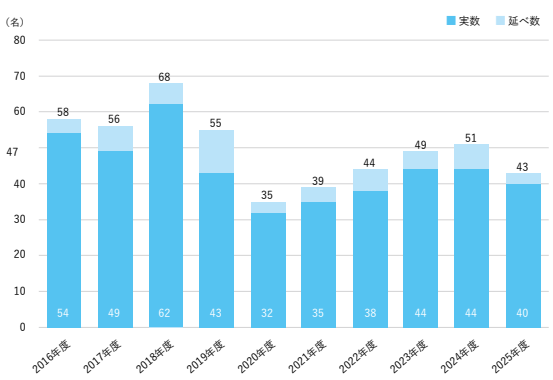


図 3　プランナー数の変遷

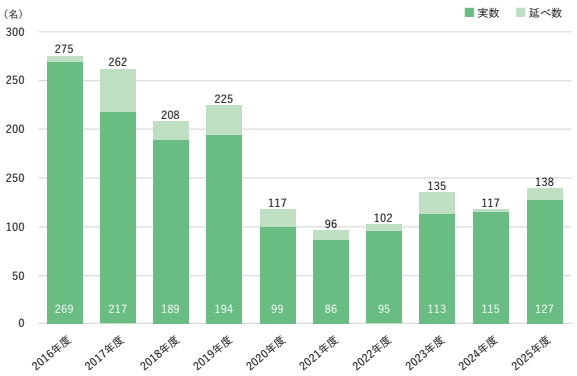


図４　学生オーガナイザー数の変遷

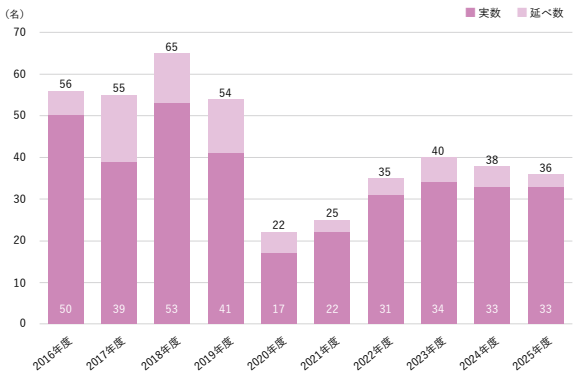


図５　教職員パートナー数の変遷

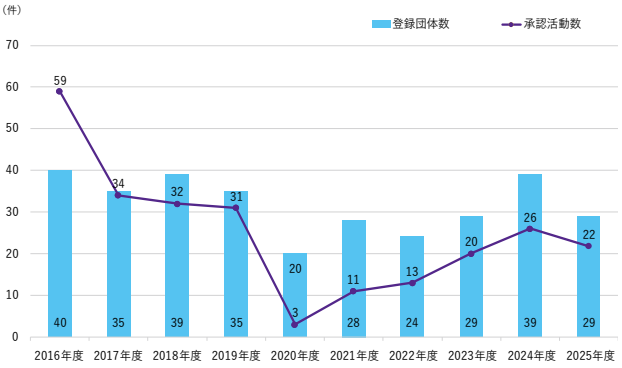


図６　T-ACT ボランティアの登録団体数と承認活動数の変遷

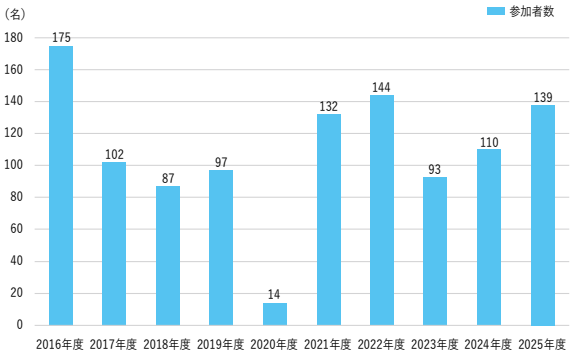


図７　T-ACT ボランティアに参加した学生数の変遷

2025年度は、2、3 年前に立案された企画が継続して申請・実施された例が複数見られたことが特徴として挙げられる。また、学内で行われてきた活動を、T-ACT を通じてより多くの学生に知らせたいといった目的から、T-ACT アクション企画として実施された活動も複数あった。こうした継続企画の背景には、中心となって活動した学生が卒業すると活動が引き継がれず、活動や団体が縮小してしまうという課題がある。この課題に対して、新入生を含む新たなメンバーを集めたり、活動を学内外に知らせたりする目的で T-ACT を利用する学生団体が見られる。こうしたニーズを踏まえると、学内外に T-ACT および T-ACT を用いた活動をいかに知らせるかといった広報をより積極的に行う必要があるだろう。また、広報の方法についても、コロナ禍以降の活動様式の変化や、SNS や生成 AI などのデジタルツールが日常的に使われている現状を踏まえて見直すことが課題である。

2025年度に行われた T-ACT アクション企画では、芸術文化をはじめとする個人の趣味や興味関心を共有できる交流の場作りを目的とした活動が多数見られた。こうした活動の中には、地域社会や自治体の協力を得て実施できた例もある。さらに、T-ACT 活動をきっかけに、大学の事業として展開されたり、事業化に向けた起業につながったりするなど、学内外へ展開されていった企画もみられた。これらの事例は、T-ACT が、やってみたいことを続ける中で自分の興味関心やキャリア上の目標を見つけたり、社会とつながったりする体験ができる、学生の学びと成長の場として機能していることを示している。こうした意義を踏まえ、今後も、より多くの学生が T-ACT を通じてやってみたいことを形にし、多様な体験を通じて成長できるよう支援していくことが重要である。

2025年度の T-ACT ボランティアでは、以前から登録している団体の多くが継続して登録し、学生に活動の場を提供していただいた。ボランティア団体からは、学生に継続して参加してほしいという声がよく聞かれ、こうした期待が継続登録の背景にあるとも考えられる。しかし、参加する学生は一回限りの参加報告が多く、今後は、ボランティア活動に継続して参加することの意義や学びを学生に伝える工夫が必要であろう。

登録団体の活動には、子どもの学習支援や居場所づくりに関する活動が複数あり、多数の学生からの参加もあった。なかには、海外にルーツを持つ子どもの日本語学習を支援する団体からの相談や登録も複数あり、社会の変化に伴った活動の様子がうかがえる。今後、多文化共生社会のニーズを反映したボランティア活動はさらに増えていくと考えられ、参加する学生にとって、多様性や多文化への理解を深める学びの場となることが期待される。

最後に、ボランティア活動への参加者数は前年度より増加したものの、団体のニーズに比べると参加や参加後の報告はまだ少なく、引き続き取り組むべき課題である。地域社会を拠点としたボランティア団体から、学生との交流を求めるニーズは高く、学生がボランティア活動を通じた社会貢献に関心を持って参加できるよう、T-ACT 推進室からも積極的に働きかけていく必要がある。

2．T-ACT フォーラムの利用状況

T-ACT フォーラム来室者数の変遷を図 8 に示した。2025年度の延べ来室者数は453名、実来室者数は331名であり、前年度（延べ475名、実来室者数339名）よりやや減少した。また、来室者（学生、教職員、地域団体からの来客など）の来室目的の割合を図 9 に示した。T-ACT アクションの新規申請に関する相談などの利用（A 新規）が18%、T-ACT アクションの運営のための相談や作業といった利用（A 継続）が58%、T-ACT プランの利用（P 新規・P 継続）が1%、T-ACT ボランティアに関する相談（V 学生・V 団体）が6%、授業に関する利用が2%、その他の理由による利用（学生と学外者を含む）が15% であった。A 継続が約 6 割を占めることから、すでに T-ACT で活動している学生が継続的に来室し、T-ACT フォーラムを利用していることがうかがえる。

来室者数が減少した背景としては、T-ACT フォーラムを支える T-ACT スタッフの入れ替わりにより、学生対応ができるようになるまでの準備に時間を要し、学内外への広報に充てる時間がやや減ったことが考えられる。一方で、来室者の 3 割程度が T-ACT フォーラムを居場所として利用していることもうかがえる（図 8 ）。こうした結果を踏まえ、T-ACT フォーラムが学生にとっての“サードプレイス（Oldenburg, 1989）”、すなわち家庭や教室・研究室とは異なる居場所として利用されるよう工夫することが、今後の課題の一つである。そのためには、まず居場所としての存在を知ってもらうことが必要であり、T-ACT 制度および T-ACT を用いた活動を周知するイベントの開催や、学内行事での広報など、学生の目線に合わせた広報の工夫が求められる。さらに、学外となる地域社会からの交流依頼も増えている。学生が地域社会への貢献や交流を通じて学びを深められるよう、T-ACT も大学の外へ出向き、さまざまな機関や団体との交流を深めて、学生により良い学びの場を提供していく必要がある。

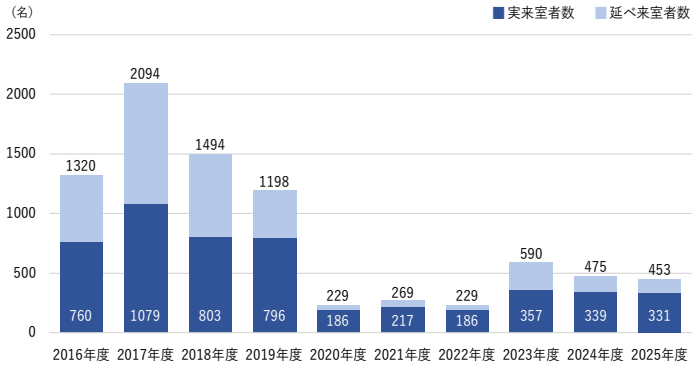


図 8　T-ACT フォーラム来室者数の変遷

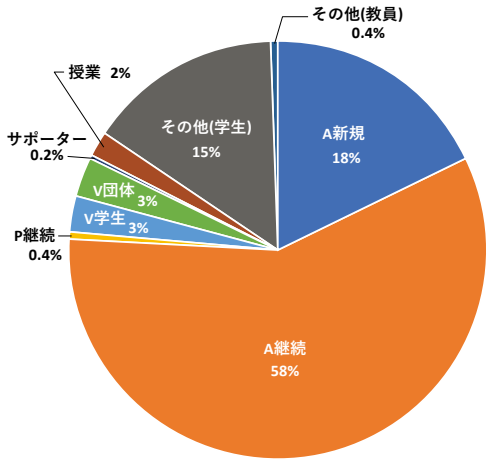


図 9　T-ACT フォーラム利用目的

3．T-ACT による人間力の成長

T-ACT アクション・プランの利用者には、活動終了後、活動報告書の作成と併せて人間力の成長に関するアンケートに回答してもらっている。参加力、体験力、コミュニケート力、統率力、企画力の 5 つを人間力の指標として想定し、それに加えて体験を通じた自己理解の深まりについて、それぞれを測定する質問項目を定めている（表 1 ）。

調査では、T-ACT アクション・プランの活動を終えた学生・教職員を対象に、活動中に表 1 の各項目をどの程度感じたかを 4 件法（「全く当てはまらない」「あまり当てはまらない」「少し当てはまる」「とても当てはまる」）で尋ねた。プランナーには、活動報告書を作成する際にシステム上で回答を求めている。一方、オーガナイザーおよびパーティシパントには、プランナーを通じて協力を呼びかけるか、コンサルタントおよび T-ACT 推進室から回答を依頼している。2025年度は、オーガナイザーおよびパーティシパントからの回答が得られず、16名のプランナーからのみ回答が得られた。T-ACT プラン企画のプランナーからの回答は 1 名のみであったため、T-ACT アクション企画のプランナー15名のデータを分析対象とした。

全体の回答状況をみると、5 つの力のいずれにおいても「全く当てはまらない」と回答した者はいなかった。「参加力」と「コミュニケート力」では肯定的な回答（「とても当てはまる」と「少し当てはまる」の合計）が100%（15

名全員)、「体験力」「統率力」「企画力」でもそれぞれ90%以上を占めており、回答したプランナーの多くが、活動を通じて5つの力の成長を実感していることがうかがえる。ただし、活動後に1回のみ行った自己評価であり、回答者も報告書を提出したプランナーに限られるため、結果の解釈には留意が必要である。さらに、「自分について考えさせられる体験ができた」という項目（表1の「その他」）でも93%（14名）が肯定的に回答しており、5つの力に加えて、活動を通じて自己理解を深める体験ができたこともうかがえる。

最後に、現在のアンケートは、プランナーが報告書を提出する際に回答する仕組みになっている。オーガナイザーやパーティシパントについては、活動終了後にT-ACTスタッフからプランナーに依頼したり、別の経路で回答を依頼したりする必要があるため、回答率が上がらない状況が続いている。特にパーティシパントは、活動に参加した者の把握自体が難しく、回答を得にくい面もある。しかし、T-ACTを通じて学生の成長につながる関わりを考えるためにも、プランナーと異なる立場から参加し活動した経験からの成長も含めた検討を行うことは意義があり、より効果的に回答が得られる方法を引き続き検討していく必要がある。

表1　人間力を測定する項目

参加力：積極的に活動に取り組む力
活動の実現に向けて自分なりに努力できた 活動に積極的に関わることができた 活動の実行に貢献することができた 活動にできるだけ多く参加できた 互いに協力し合いながら、活動を進めることができた
体験力：活動の中で感じとり考える力
活動を通して、新しいまたは忘れていた自分の長所に気づくことができた 活動を通して、自分の改善すべき点を知ることができた 活動を通して、喜怒哀楽を感じることができた 活動を通して、なんらかの新しい発想を得ることができた いろいろな出来事を見聞きできた 活動に参加して、いろいろと考えさせられる体験ができた
コミュニケート力：他者と関わる力
他のメンバーに対して自分の意見を伝えることができた 他のメンバーと積極的に関わることができた 自分の気持ちを伝えることができた 他のメンバーの意見に耳を傾けることができた
統率力：メンバーをまとめる力
他のメンバーに対して公平に接することができた 孤立したメンバーがいないかどうか注意を払うことができた 指示を出し、効率よくメンバーを動かすことができた 活動の目的、あるいは目標を達成させることができた リーダーシップを発揮することができた
企画力：創造し計画し実現する力
活動に関して様々なアイデアを発想することができた 活動を実現するために適切な計画を立てられた 活動を実現する際に生じる問題点を予測しておくことができた ある程度計画通りに活動を遂行できた 活動に関係する情報を多く集めることができた
その他
自分について考えさせられる体験ができた

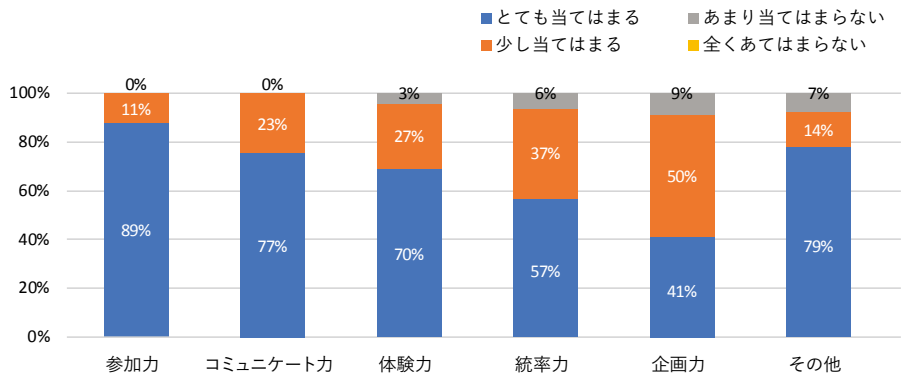


図10　T-ACT による人間力の成長（プランナーの場合）

4．活動報告会および企画表彰

T-ACT 推進室では、T-ACT を用いて行われた活動のうち、すでに活動が終了した企画を対象に、翌年度に活動報告会にて報告してもらい表彰を行っている。

2025年度 T-ACT 活動報告会は、2024年度下半期から2025年度下半期までに行われた活動を対象に、新入生への T-ACT の周知も兼ねて、「T-ACT Welcome Fest 2026―つくばアクションプロジェクト新入生歓迎会・活動報告会」を、2026年 7 月10日（金）（17:00～19:30）に未来社会デザイン棟にて開催した。発表者は、それぞれの企画に取り組む中で得られた成果や課題、活動を通じて得た学びや成長について報告した。発表では、国際交流や地域活性化、芸術文化、環境保全など、多様なテーマに取り組む企画が紹介され、社会課題への関心から始まった活動だけでなく、個人の興味や専門分野を生かして企画された活動も多く、幅広い視点と行動力が感じられる内容であった。会場からも活発な質問が寄せられた。

当日には、本学学生122名、教職員20名、学外参加者25名の計167名が参加し、新入生を含む本学の学生が多く参加した中で盛況のうちに開催することができた。第 1 部では、2025年度に活動を行った企画の中から T-ACT アクション（学生中心の活動）9 件と T-ACT ボランティア（地域団体中心の活動）1 件の活動報告が行われ、合計10件の活動が報告された。第 2 部のポスター発表を兼ねた情報交換会・交流会では、参加者同士が気軽に交流できる場を設けた。学生同士の交流だけでなく、教職員、自治体および地域活動団体の関係者の方々も参加され、積極的な意見交換が行われた。2025年度の活動の振り返りにとどまらず、今後の活動へのお誘いや新たな企画立案に向けて話し合うなど、活発な交流が見られた。





















T-ACT アクション・プランへの表彰（活動奨励を目的に、参加者の人間力をより高めたと評価される企画への賞の授与）は、活動終了後に活動報告書を提出し、活動報告会で発表した企画をノミネート企画とし、来場者の投票によって決定した。投票の結果、最優秀賞には、「令和 7 年度日韓青少年対話型交流事業」（プランナー：竇積應公さん／社会・国際学群社会学類 4 年）が選ばれた。本企画は、日本と韓国の青少年による対話と交流を通じて相互理解を深めることを目的に、2023年度から継続して実施されてきた T-ACT アクション企画である。学生が主体となって韓国の学生を招へいし、多言語による交流の場を企画・運営したこと、そして参加者が国際的な視野を広げ、多様な価値観に触れる機会を創出したことが、来場者から高く評価された。優秀賞には、廃墟空間を活用した体験型企画である「旧宿舎からの脱出 2 」（プランナー：牧山光汰さん／理工学群応用理工学類 3 年）、そして、参加者自身が物語の世界を歩いて体験する新たな演劇鑑賞の形を提案した「観客『も』動き回る体験型演劇を学内で―物語を歩いて辿る、新しい演劇鑑賞のかたち」（プランナー：百海結妃さん／情報学群知識情報・図書館学類 3 年）が選ばれた。最後に、T-ACT アクション企画の活動を行う学生へのご支援をくださった教職員へグッド・パートナー賞を、そして、学生に活動の場を提供し教育的な配慮をしていただいたボランティア登録団体への感謝状を贈呈した。これらの表彰式や感謝状贈呈について、表 2 ～ 3 にまとめた。

表２　2026年度に表彰された企画

賞	承認番号	企画名
最優秀賞	24028A	令和７年度日韓青少年対話型交流事業
優秀賞	25022A	旧宿舎からの脱出２
	25023A	観客『も』動き回る体験型演劇を学内で　―物語を歩いて辿る、新しい演劇鑑賞のかたち
奨励賞	25008A	筑波大吃音会 ―ツクスター v3
	25010A	芸術文化の入り口としての体験型写真展示とワークショップ
	25011A	筑波大学お掃除大作戦！
	25017A	レゴでからくり箱を作ろう
	25021A・25025A	筑波大学オタクフリマ・筑波大学オタクフリマ２
	25028A	ひかりのや ~ 夜桜とランタンが織りなす一の矢の新たな魅力 ~

表３　2026年度グッドパートナー賞・ボランティア感謝状

グッド・パートナー賞	吉原　ゆかり　先生 （人文社会系　教授）	【25021A】筑波大学オタクフリマ【25025A】筑波大学オタクフリマ２
	川田　清和　先生 （生命環境系　助教）	【25028A】ひかりのや ~ 夜桜とランタンが織りなす一の矢の新たな魅力
ボランティア感謝状	一般社団法人アイネット	

編集後記

2025 年度をもって、T-ACT 推進室を離れることになりました。本報告書は、着任してからの日々を振り返りながらまとめたものでもあります。

T-ACT フォーラムでは、多くの学生の皆さんから相談を受け、たくさんの「やってみたい」を聞かせてもらいました。企画を申請して活動を行い、報告書を提出して本報告書に掲載された企画は、そのほんの一部にすぎません。ここには載っていない「やってみたい」も数多くありましたし、報告書にまとめるほどの成果が得られなかったと感じている活動もあったかもしれません。けれども、私にとってはその一つひとつがとても興味深く、夢中になって話してくれる皆さんの姿が輝いて見えました。形になったかどうかにかかわらず、「やってみたい」と思い、それを誰かに話してみたこと自体が、皆さんにとって大切な一歩だったのではないかと思います。

学生の皆さんと語り合い、活動が広がっていく様子を見守ることができた時間は、私にとってかけがえのないものです。これからも、皆さんが大学や社会のどこかで、それぞれに輝きながら活躍されることを心より願っております。

最後に、学生の活動を温かく支えてくださった教職員の皆様、学生に学びの場を提供してくださった地域の団体の皆様、そして T-ACT の運営を共に担ってくれたスタッフの皆さんに、心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

T-ACT コンサルタント
李　健實

2025 年度活動報告書をお読みいただき、誠にありがとうございます。

筑波大学には、さまざまな専門分野や価値観、背景を持つ人々が集まっています。その多様性こそが本学の大きな魅力であり、新しい挑戦や学びを生み出す原動力になっていると感じています。

今年度も、多くの学生が地域へ足を運び、さまざまな活動に取り組みました。その姿を見ながら改めて実感したのは、学生の成長は教室の中だけで完結するものではないということです。地域の方々との対話、ボランティア団体との協働、自分とは異なる価値観との出会い。その一つひとつの経験が、学生たちの世界を広げ、自分自身を見つめ直すきっかけになっています。

活動を始めるとき、多くの学生は「何かしたい」という思いを持ちながらも、明確な答えを持っているわけではありません。しかし、実際に地域へ飛び込み、人と関わり、試行錯誤を重ねるなかで、自ら課題を見つけ、考え、行動する力を身につけていきます。活動の成果以上に、その過程で得られる気づきや成長こそが、T-ACT の大きな価値であると感じています。

T-ACT フォーラムはこれからも、学生と地域をつなぐ架け橋として、一人ひとりの「やってみたい」を大切にしながら、その挑戦に寄り添ってまいります。本報告書を通して、学生たちの成長の軌跡と、そこから生まれた地域との豊かなつながりを感じていただければ幸いです。

最後になりましたが、学生たちを温かく支えてくださった地域の皆さま、ボランティア団体の皆さまに心より感謝申し上げます。今後とも T-ACT フォーラムへのご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。

T-ACT ボランティア担当職員
岡野　芽衣

2025 年度 T-ACT 推進室員一覧

		所　属	職　名
室長	唐木　清志	人間系	教授
副室長	杉江　　征	人間系	教授
室員	土井　裕人	人文社会系	助教
	葛山　泰央	人文社会系	講師
	角替　敏昭	生命環境系	教授
	梅本　通孝	システム情報系	准教授
	金　　尚泰	図書館情報メディア系	教授
	尾花　　望	医学医療系	助教
	澤江　幸則	体育系	准教授
	川島　史也	芸術系	助教
	水野　雅之	人間系	准教授
	慶野　遥香	人間系	助教
	北原　祐理	人間系	助教
	李　　健實	助教	T-ACT 専任教員
	小野　健一	学生部学生生活課	課長

2026 年度 T-ACT 推進室員一覧

		所　属	職　名
室長	唐木　清志	人間系	教授
副室長	伊藤　宗親	人間系	教授
室員	山口有梨沙	人文社会系	助教
	鈴木　大三	システム情報系	准教授
	春本　敏之	生存ダイナミクス研究センター	助教
	照井　　章	数理物質系	准教授
	金　　尚泰	図書館情報メディア系	教授
	尾花　　望	医学医療系	助教
	澤江　幸則	体育系	准教授
	山本　浩之	芸術系	准教授
	水野　雅之	人間系	准教授
	土井　裕人	人文社会系	助教
	慶野　遥香	人間系	助教
	北原　祐理	人間系	助教
	松岡　悠和	助教	T-ACT 専任教員
	小野　健一	学生部学生生活課	課長

つくばアクションプロジェクト活動報告書

2026 年 11 月発行

筑波大学　T-ACT 推進室

〒 305-8577　つくば市天王台 1-1-1

TEL　029（853）2222 ／ 2269

2025年度 活動報告書

筑波大学
University of Tsukuba

T-ACT

https://www.t-act.tsukuba.ac.jp/



2026年発行